松山市文化財調査報告書148

久米窪田古屋敷遺跡

2011

松山市教育委員会

財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

久米窪田古屋敷遺跡

2011

松山市教育委員会
財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

序

本報告書は、昭和62年、松山市東部の久米窪田町において実施された、民間開発に伴う発掘調査成果報告書です。

調査地周辺は、昭和52年の国道11号建設に伴う発掘調査「久米窪田Ⅱ遺跡」などの成果から、かつては久米郡衙の有力候補地として注目されたエリアでした。しかし、近年の「史跡久米官衙遺跡群 久米官衙遺跡 来住廃寺跡」域内における調査の進展により、郡衙を含めた官衙の中枢域は西方1kmの来住廃寺周辺にあり、調査地周辺は官衙周辺施設域であった可能性が高いことがわかってきました。本調査や近隣の調査成果もあわせて、現在では、古代の久米という地域が官衙中枢域を中心に、その周辺施設や、ひとびとの生活域・生産域とともに成り立っていた様子を立体的に復元することが可能になりつつあります。

また調査では、弥生時代前期から中期にかけての豊富な遺物の出土もみられています。そのなかには、土佐型あるいは西南四国型といわれる土器もあり、この時代の土佐や南予地域と道後平野との交流の一端を知ることができる貴重な成果となっています。

このような成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力のたまものと心より感謝申し上げる次第です。

本書が、埋蔵文化財の保護思想の啓発や調査研究等にご活用いただければ幸いに存じます。

平成23年3月31日

松山市教育長　山内　泰

例　言

1．本報告書は、松山市久米窪田町において松山市教育委員会が実施した、久米窪田古屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は1987（昭和62）年、店舗建築に伴う調査として、株式会社恵比寿の協力を得て実施された。

3．遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、池田学（平成４年退職）、丹生谷道代、多知川富美子、矢鋪妙子、矢野久子が行った。

4．遺構の撮影は、調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

5．遺物の縮尺は、土器を１／４にすることを原則とし、土製品、鉄器・鉄製品、石器・石製品を１／２で掲載している。

6．使用した方位は磁北である。

7．本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。

8．本報告書の執筆・編集は、栗田茂敏が行った。

本文目次

第1章　はじめに …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．環　境 …… 1
（1）地理的環境 …… 1
（2）歴史的環境 …… 2
3．組　織 …… 6
第2章　調査の成果 …… 7
1．A区の調査 …… 7
（1）調査地の区割りと層序 …… 7
（2）弥生時代の遺構と遺物 …… 11
（3）古墳時代～古代、中世の遺構と遺物 …… 43
（4）柱穴出土の遺物 …… 72
（5）包含層出土の遺物 …… 75
（6）撹乱出土および表採遺物 …… 82
2．B区の調査 …… 84
（1）溝 …… 84
（2）表採遺物 …… 90
（3）出土地点不明の遺物 …… 91
第3章　まとめ …… 94

挿図目次

図1　調査地と周辺の主要遺跡 …… 3
図2　調査地南北ライン土層模式図 …… 7
図3　調査地の区割り …… 8
図4　遺構全測図 …… 9
図5　竪穴建物ＳＢ7・出土遺物 …… 12
図6　土坑ＳＫ1 …… 13
図7　ＳＫ1出土遺物 …… 14
図8　土坑ＳＫ2・出土遺物 …… 15
図9　土坑ＳＫ3・4 …… 16
図10　ＳＫ4出土遺物（1） …… 17
図11　ＳＫ4出土遺物（2） …… 18
図12　土坑ＳＫ5 …… 19
図13　ＳＫ5出土遺物 …… 20
図14　土坑ＳＫ6 …… 21

図15　ＳＫ６出土遺物（１）……22
図16　ＳＫ６出土遺物（２）……23
図17　ＳＫ６出土遺物（３）……24
図18　土坑ＳＫ７……25
図19　ＳＫ７出土遺物……26
図20　土坑ＳＫ９……27
図21　ＳＫ９出土遺物（１）……27
図22　ＳＫ９出土遺物（２）……28
図23　土坑ＳＫ10……28
図24　ＳＫ10出土遺物……29
図25　土坑ＳＫ11……30
図26　ＳＫ11出土遺物（１）……31
図27　ＳＫ11出土遺物（２）……32
図28　土坑ＳＫ12・出土遺物……33
図29　土坑ＳＫ13……34
図30　ＳＫ13出土遺物（１）……35
図31　ＳＫ13出土遺物（２）……36
図32　ＳＫ13出土遺物（３）……37
図33　土坑ＳＫ14……37
図34　ＳＫ14出土遺物……38
図35　溝ＳＤ７……39
図36　ＳＤ７出土遺物（１）……40
図37　ＳＤ７出土遺物（２）……41
図38　ＳＤ７出土遺物（３）……42
図39　竪穴建物ＳＢ４……43
図40　ＳＢ４出土遺物……44
図41　竪穴建物ＳＢ５……45
図42　竪穴建物ＳＢ８・出土遺物……46
図43　掘立柱建物ＳＢ１……47
図44　ＳＢ１出土遺物……48
図45　掘立柱建物ＳＢ２……49
図46　ＳＢ２出土遺物……50
図47　掘立柱建物ＳＢ３・ＳＢ６……51
図48　掘立柱建物ＳＢ９……53
図49　掘立柱建物ＳＢ10・出土遺物……54
図50　掘立柱建物ＳＢ11……55
図51　掘立柱建物ＳＢ12……56
図52　掘立柱建物ＳＢ13……57

図53　ＳＤ１出土遺物……58
図54　ＳＤ２出土遺物（１）……60
図55　ＳＤ２出土遺物（２）……61
図56　ＳＤ３出土遺物（１）……63
図57　ＳＤ３出土遺物（２）……64
図58　ＳＤ３出土遺物（３）……66
図59　ＳＤ３出土遺物（４）……67
図60　ＳＤ３出土遺物（５）……68
図61　ＳＤ４出土遺物……69
図62　ＳＤ５出土遺物……69
図63　ＳＤ６出土遺物……71
図64　柱穴出土遺物（１）……73
図65　柱穴出土遺物（２）……74
図66　ＮＥ区出土遺物（１）……75
図67　ＮＥ区出土遺物（２）……76
図68　ＮＷ区出土遺物……77
図69　ＳＥ区出土遺物……78
図70　ＳＷ区出土遺物（１）……80
図71　ＳＷ区出土遺物（２）……81
図72　撹乱出土遺物……82
図73　表採遺物……83
図74　ＳＤ101出土遺物……85
図75　ＳＤ103出土遺物……85
図76　ＳＤ104出土遺物……86
図77　ＳＤ105出土遺物（１）……88
図78　ＳＤ105出土遺物（２）……89
図79　表採遺物（１）……90
図80　表採遺物（２）……91
図81　出土地点不明遺物……92

図　版　目　次

図版１　調査前全景（西より）
　　ＳＫ１遺物検出状況（北より）
図版２　ＳＫ２遺物出土状況（東より）
　　ＳＫ４遺物出土状況（南東より）
図版３　ＳＫ７遺物出土状況（北より）
図版４　ＳＫ11遺物出土状況（東より）
　　ＳＫ１検出状況（西より）
　　ＳＫ６遺物出土状況（東より）
　　ＳＫ９遺物出土状況（南より）
　　ＳＢ４床面ＳＫ２・14調査状況（北より）

図版５　ＳＫ14遺物出土状況（南より）　ＳＫ13遺物出土状況（西より）
ＳＫ13遺物出土状況近景（南より）
図版６　ＳＤ７遺物出土状況（東より）　ＳＤ７遺物出土状況近景（北西より）
図版７　ＳＢ４検出状況（西より）　ＳＢ４調査状況（南東より）
図版８　ＳＢ５検出状況（北より）　ＳＢ５完掘状況（南より）
図版９　ＳＢ１・２（北東より）　ＳＢ１（北より）
図版10　ＳＢ２（北東より）　ＳＢ３（西より）
ＳＢ３・９（東より）
図版11　ＳＢ６完掘状況（西より）　ＳＢ11完掘状況（東より）
ＳＢ12完掘状況（東より）
図版12　ＳＤ１調査状況（東より）　ＳＤ２遺物出土状況（東より）
図版13　ＳＤ３遺物出土状況（東より）　ＳＤ３内土師器坏集積状況（北より）
図版14　ＳＤ４・５調査状況（東より）　ＳＤ６調査状況（東より）
図版15　Ａ区中央部周辺の状況（東より）　Ａ区全景（１）（北東より）
図版16　Ａ区全景（２）（南東より）　Ａ・Ｂ区全景（南東より）
図版17　ＳＤ101～104（東より）　ＳＤ104（南より）
ＳＤ105（北より）
図版18　ＳＢ８・ＳＫ１出土遺物、ＳＫ４出土遺物（１）
図版19　ＳＫ４出土遺物（２）、ＳＫ５出土遺物
図版20　ＳＫ６出土遺物（１）
図版21　ＳＫ６出土遺物（２）、ＳＫ７・９出土遺物
図版22　ＳＫ10・11出土遺物
図版23　ＳＫ13出土遺物（１）
図版24　ＳＫ13出土遺物（１）、ＳＫ14出土遺物
図版25　ＳＤ７出土遺物（１）
図版26　ＳＤ７出土遺物（２）
図版27　ＳＢ４・ＳＤ１出土遺物
図版28　ＳＤ２出土遺物、ＳＤ３出土遺物（１）
図版29　ＳＤ３出土遺物（２）
図版30　ＳＤ３出土遺物（３）
図版31　ＳＤ３出土遺物（４）、ＳＤ４出土遺物、ＳＤ６出土遺物（１）
図版32　ＳＤ６出土遺物（２）、柱穴出土遺物（１）
図版33　柱穴出土遺物（２）、包含層出土遺物（１）
図版34　包含層出土遺物（２）、Ａ区攪乱出土・表採遺物
図版35　ＳＤ101・103出土遺物、ＳＤ104出土遺物（１）
図版36　ＳＤ104出土遺物（２）、ＳＤ105出土遺物（１）
図版37　ＳＤ105出土遺物（２）、Ｂ区表採遺物

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

1987（昭和62年）１月、株式会社恵比寿代表取締役清水邦一氏（以下、㈱恵比寿）より、松山市久米窪田町における店舗建設に伴う埋蔵文化財確認願が、松山市教育委員会文化教育課（以下、市教委）に提出された。当該地は、松山市の指定する包蔵地「№129 鷹ノ子遺物包含地２」に属しており、同月内に実施した試掘調査により、申請地の北側において、弥生時代をはじめとする包含層および柱穴等の遺構の存在が確認され、この部分について本格調査が必要と判断された。この結果を受けて、市教委、㈱恵比寿の二者は遺跡の取り扱いについて協議、㈱恵比寿の協力のもと、市教委が主体となって発掘調査を実施することとなった。

調査は同年１月26日より開始した。実施されたのは、申請面積3,928.38㎡のうち約2,000㎡で、申請された４枚の水田のうちの北東の一枚をＡ区としてほぼ全面、これの西側に隣接する一枚の一部をＢ区として調査した。Ａ区では、弥生時代から古代・中世にかけての多数の遺構・遺物が調査され、Ｂ区では氾濫に伴う大小の流路を確認したが、時間的な制約から、平面プランの記録とこれに伴う遺物の採集にとどまり、年度も明けた４月８日に調査を終了した。

２．環　境

（１）地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の２大河川がある。この２河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約４㎞の通称「出合」で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、平野北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の中間にあって、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。調査地は、平野東部にあって、北方を西流する堀越川と南方を西流する小野川とに挟まれた、久米・来住地区の台地南西縁辺部近くに位置している。この微高地は、小野川水系の河川活動により形成された砂礫台地や古期扇状地、段丘などによって構成されているが、先述のとおり、調査地はこの台地の縁辺部付近にあたり、眼前の南方一帯には小野川流域の氾濫原である低地がひろがっている。

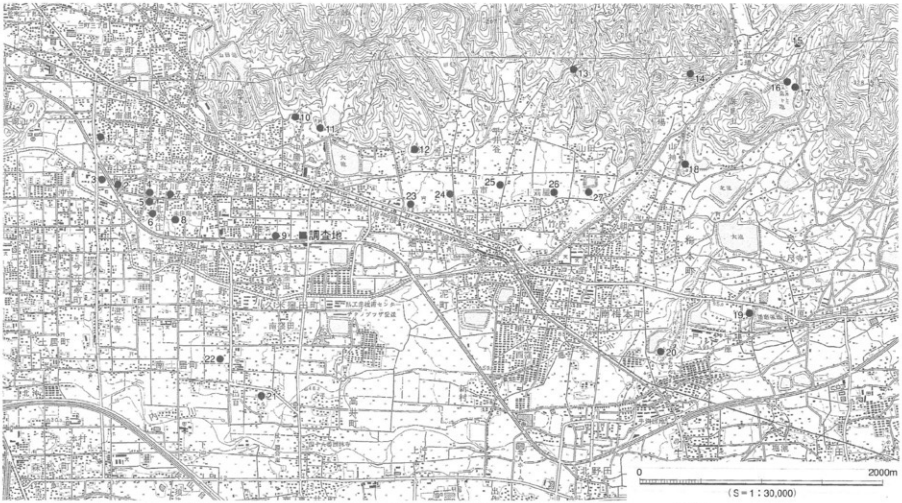
（2）歴史的環境

ここでは、調査地周辺の道後平野南東部の来住・久米地区から小野平井地区の遺跡分布を中心に述べることにする。

旧石器時代の遺物は、この地区に限らず道後平野では該期の遺構とともに出土した例は知られておらず、数例ある資料も採集遺物であったり、単独出土であったりする例がすべてである。この地区では、鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査に伴い出土した角錐状形石器、久米窪田Ⅴ遺跡出土の角錐状石器、あるいは平井町山田池で採集されたナイフ形石器などの数例が知られているのみで、いずれも後期旧石器時代のものと考えられている〔重松 1992〕。

この地区で、確実な遺構とともに遺物が出土するのは、縄文時代後期中頃以降である。この時期の良好な一括遺物としては、久米窪田町森元遺跡の土坑出土の土器群がある〔栗田 1989〕。この森元遺跡の近隣の久米窪田Ⅰ遺跡でも同様の時期の遺物を出土しており、これらの遺物は小型方形住居址に伴うものとされている〔吉本 他 1981〕。晩期では、近年になって来住台地上での遺構・遺物の検出が目立ってきている。特に久米高畑遺跡36次調査では、晩期前葉の土器群をともなう円形住居址１棟が検出されているほか、同エリア内の26次調査・35次調査でも同様の時期の土坑の検出をみており、該期の資料の希薄な当平野にあっては、貴重な例といえる〔小笠原 1998／小玉 2008／河野 2004〕。晩期末の比較的良好な例としては、南久米片廻り遺跡２次調査の土器群がある。斜面堆積で明確な遺構に伴うものではないが、層位・平面ともにまとまりがみられ、一括性の高い遺物群である〔松村 他 1996〕。また、平井町古市遺跡１区の自然流路内から晩期前葉、あるいは後葉の土器片が若干出土し〔栗田 他 2000〕、同遺跡２次調査地では晩期後葉の土坑１基が調査されている〔山之内 1997〕。

縄文時代には点的であった遺跡分布も弥生時代になると、面的なひろがりを持ち、その数も大幅に増大する。その中でも最も注目されるのが、やはり来住台地上に展開する前期末から中期初頭の集落である。このエリアの弥生遺跡は、前期末から後期まで継続してはいるが、その盛期は上述の前末～中初の段階にある。集落は、少数の円形竪穴住居と数多くの無柱長方形竪穴と土坑などによって構成されているが、近年の調査（久米高畑23・25・28・29次）や過去の来住Ⅴ遺跡などの調査成果をあわせると、同時期併存の環濠を複数ともなう可能性が高くなってきている〔橋本 1995／高尾 1996／小笠原 1997〕。そのほか、この時期の遺物を出土する遺跡には、小野158号線関連で調査された古市遺跡１区の調査がある。この調査では、検出された自然流路の10層と呼ばれる包含層からまとまった遺物の出土をみている〔河野 他 2000〕。中期の良好な資料は現在のところ少ないが、中期も後半あるいは後期初頭、凹線文の段階の遺物を出土する遺跡はいくつかある。来住廃寺15次調査では、台地の縁辺の落ち際に投棄された状況で多数の凹線文段階の遺物が出土し〔西尾 他 1993〕、また、久米窪田町古屋敷Ｃ遺跡では比較的規模の大きい溝からやはり該期の遺物が出土している〔梅木 他 1992〕。この両遺跡ともに、台地の縁辺部に位置することで共通しているが、台地上には現在のところこの時期に該当する遺構が希薄であり、この時期のこのエリアの集落展開についてはまだ不明な部分が多い。なお、この段階の住居址は鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査中に、低丘陵緩斜面で１棟検出されているが〔森 1978〕、平地部との比高差20m程度の緩傾斜面であり、高地性集落と言えるような立地ではない。後期の集落は、面としてのひろがりは把握されていないのが現状であるが、単発的に遺構が検出される例はいくつかある。南久米片廻り遺跡では円形住居址１棟から、終末期の土器とともに鉄鏃を



1. 二つ塚古墳
2. 南久米片鋤り遺跡
3. 南久米片鋤り遺跡2次調査
4. 久米高畑遺跡26次調査
5. 久米高畑遺跡35次調査
6. 久米高畑遺跡36次調査
7. 久米高畑遺跡23・25・28・29次調査
8. 来住廃寺跡
9. 久米窪田森元遺跡
10. 五郎兵衛谷古墳群
11. 素鷲神社古墳
12. 観音山古墳
13. 茨谷1号窯
14. 駄場姥ケ懐1・2号窯
15. 悪社谷1～3号窯
16. 桂朵下池2・3号窯
17. 桂朵下池1・4号窯
18. 葉佐池古墳
19. 播磨塚古墳
20. 播磨塚天神山古墳
21. 波賀部神社古墳
22. 開遺跡
23. 下河屋遺跡3次調査
24. 下河屋遺跡2次調査
25. 古市遺跡
26. 上河屋遺跡3次調査
27. 上河屋遺跡4次調査

図1　調査地と周辺の主要遺跡

1点出土している〔栗田 1987〕。その他、後期の遺構・遺物は主に久米窪田Ⅰ～Ⅴ遺跡や、平井遺跡〔豊田 他 1982〕など国道11号松山東道路関係の調査での出土が報告されている。

このエリアにおける古墳時代の集落は、6世紀代以降のものが主に確認されている。南土居町開遺跡では、比較的小規模な調査面積であったにもかかわらず、方形竪穴住居址5棟、掘立柱建物3棟などが検出され、出土遺物ならびに切り合いから、6世紀初頭から後半までの住居形態の変遷や竪穴から掘立への移行が検討されている〔宮内 1996〕。本改良路線の南西端に位置する下苅屋遺跡や下苅屋遺跡3次調査地で調査された集落も6世紀後半を主体とするもので、検出された方形竪穴住居址の一部から生焼け・焼け歪みの顕著な須恵器が出土してみたり、須恵器の集積土坑が検出されていたりするところから、遺跡北東の小野谷に分布する窯址群からの中継点あるいは集積地のような性格を推定されている集落である〔重松 1996／河野 2000〕。

調査地北方の丘陵上には松山峠古墳群、芝ケ峠古墳群、かいなご古墳群、久米大池古墳群、東方の低丘陵上には播磨塚古墳群など小規模な円墳あるいは方墳を主体とする古墳群が密集しており、そのほとんどが後期古墳と考えられているが、これらの古墳群の中には平井町の観音山古墳のように5世紀代の大規模な帆立貝形古墳と推定されているようなもの〔相田 1980〕、あるいは鷹子町素鷲神社古墳のような、当地では最大規模の円墳〔愛媛県教委 1991〕とされている古墳がある。また、平地部に眼を転ずると高井町波賀部神社古墳、北久米町二ツ塚古墳、播磨塚天神山古墳〔吉岡 2001〕や、現在では消滅してしまったが鷹子町タンチ山古墳など当平野では数少ない後期の前方後円墳が多く分布する地域である。また、平野最大級の後期前方後円墳とされていた北梅本町葉佐池古墳〔栗田 2003〕は、その後の調査により全長41mの長円墳ということが明らかとなったが〔栗田 2010〕、この時期の当平野の古墳として突出した存在であることにかわりはない。このような、後期の首長墳や大型墳がこのエリアに集中する背景のひとつには、後述するように、7世紀代になって来住台地上に展開する官衙遺跡群や古代寺院成立の基盤となった地方豪族の存在が挙げられよう。

さて古代では、本調査地南西直近の久米窪田Ⅱ遺跡において8世紀代を中心とする、官衙関連と目される遺構や遺物の出土があるが、官衙施設の中心はこれよりおよそ1.2km西方の来住地区にある。来住台地上での久米官衙遺跡群の調査は、白鳳寺院址来住廃寺の調査が契機となって始められ、その後の調査の進展とともに、寺院隣接部分の方一町規模の「回廊状遺構」をはじめとして、台地上に方一丁規模の区画割りが存在することが明らかとなった。台地北部の半町規模の方形区画域内部における近年の調査では、政庁としての姿を整えた建物配置が確認されている。以前より至近距離での「久米評」線刻須恵器の出土から推定されていたことであるが、この区画域が評衙政庁であることがより確定的なものとなった。そればかりではなく、さらにその成立が評制以前の7世紀前半の段階である可能性が高くなったことも注目される成果である。またその南西部では、8世紀以降の段階で成立した、濠で囲われた正倉域の発見等もあり、この台地上の官衙遺跡群はきわめて重要な遺跡群である〔橋本 2006・2007〕。先にも述べたように、区画割りを含めた台地上の施設の初現は現在のところ7世紀前葉の年代が推定されているが、この遺跡群に須恵器を供給した可能性の高い窯址群が先にもふれた小野谷に分布する松山平野東部古窯址群である。発掘調査が行われたものは7世紀前半の駄場姥ケ懐1号窯1基のみであるが、この地区では現在のところ駄場姥ケ懐、悪社谷、枝梁下池、茨谷など10数基の須恵器窯の存在が確認されている。最も古いもので6世紀後半、新しいものには8世紀後半のものがあり、操業の盛期を概ね7世紀代に持つ窯址群である〔栗田・岡根 1996〕。

【文献】

重松佳久「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』松山市埋蔵文化財センター 1992
『下苅屋遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
栗田茂敏「南久米片廻り遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会 1987
「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会 1989
栗田茂敏ほか『葉佐池古墳』松山市教育委員会 2003
「葉佐池古墳3・4・5次調査」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2010
栗田茂敏ほか『古市遺跡・下苅屋遺跡－2・3次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000
栗田茂敏・岡根なおみ「馬場姥ケ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
山之内志郎「古市遺跡2次調査地」『古市遺跡－2次調査－、五楽遺跡－1・3次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997
吉本　拡・阪本安光「来住Ⅴ遺跡、久米窪田Ⅲ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981
河野史知「久米高畑遺跡35次調査地」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2004
小笠原善治「久米高畑遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998
「久米高畑遺跡28次・29次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997
小玉奎紀子「久米高畑遺跡－26次調査－」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2008
檜木謙一「久米高畑遺跡23次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1995
『史跡久米官衙遺跡群』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2006
『史跡久米官衙遺跡群Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2007
高尾和長「久米高畑遺跡25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
西尾幸則ほか『来住廃寺遺跡－第15次調査報告書－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
梅木謙一・宮内慎一「久米窪田古屋敷C遺跡」『来住・久米地区の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1992
宮内慎一「開遺跡－1次調査地－」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
森　光晴『五郎兵衛谷古墳』松山市教育委員会 1978
豊田達雄ほか「平井遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター 1982
相川期美「4・5世紀伊予の首長墓」『社会科学研究第1号』1980
『愛媛県内古墳－分布調査報告－』愛媛県教育委員会 1991
吉岡和哉『播磨塚天神山古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2001

3．組　織

調査組織

松山市教育委員会	教育長	西原多喜男
文化教育課	課長	伊賀　俊輔
	課長補佐	坪内　晃幸
	第一係長	大西　輝昭
	主任	西尾　幸則
	調査員	栗田　茂敏

刊行組織

松山市教育委員会	教育長	山内　泰
事務局	局長	藤田　仁
	企画官	勝谷　雄三
	〃	青木　茂
文化財課	課長	駒澤　正憲
	主幹	森　止経
	副主幹	三好　博文
（財）松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	一色　哲昭
	事務局長	松澤　史夫
	事務局次長	砂野　元昭
施設利用推進部	部長	中越　敏彰
埋蔵文化財センター	所長	重松　佳久
	担当主査	栗田　茂敏

調査地　愛媛県松山市久米窪田町837－1，3、838－2、848－2，3、847－2
調査期間　1987（昭和62）年1月16日～1987（昭和62年）4月8日
調査面積　3,928.38㎡のうち約2,000㎡

第２章　調査の成果

先述のように、調査は４枚の水田のうち北側の東西に並ぶ２枚について実施した。東をＡ区、西をＢ区としているが、Ｂ区の水田面はＡ区に比べるとおよそ0.3m程低く、Ａ区で検出された弥生時代から古代・中世にかけての集落関連の遺構は、Ｂ区では削平されていて希薄であった。Ｂ区で検出された遺構の大部分は、Ａ区南半で検出された南東から北西方向に走る流路や溝のような、氾濫原上位の小規模な流路のようなもののみであった。２ヶ月あまりの予定調査期間のうち１／３以上を降雨にたたられ続け、部分的には不充分な調査とならざるをえなかった。なお、調査時土坑として扱ったＡ区ＳＫ８は、後日新しい撹乱と判明したので、欠番となっている。

１．Ａ区の調査

（１）調査地の区割りと層序

試掘調査の結果、申請された田の字状配置の４枚の水田のうち、特に北東の１枚に遺構・遺物が多く認められ、南側の小さい２枚については遺構は認められず、氾濫原の様相が濃いことがわかってい

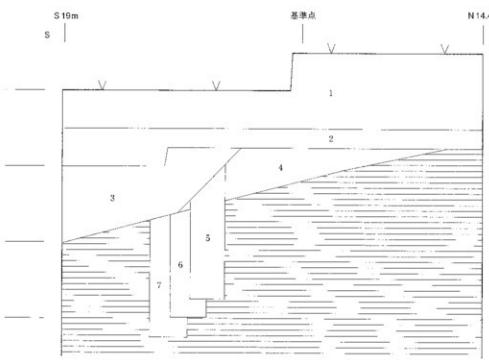


図２　調査地南北ライン土層模式図

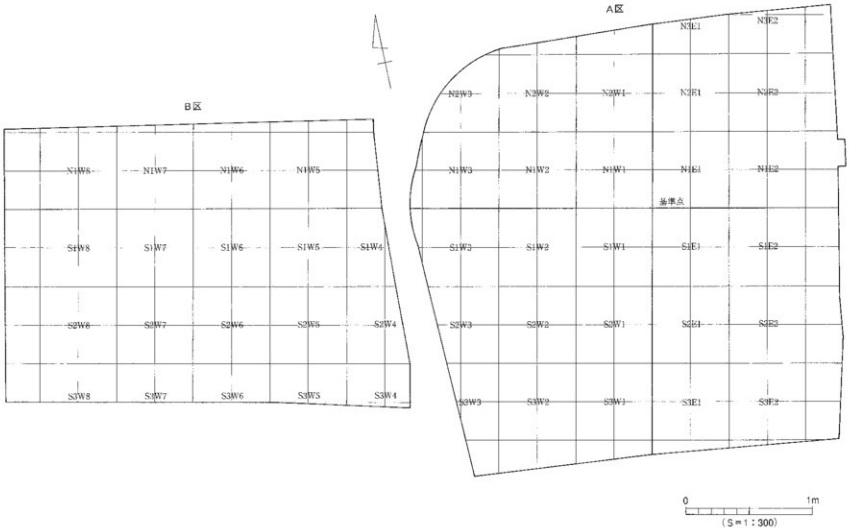

A区
B区
N1E1
N1E2
N2W3
N2W2
N2W1
N2E1
N2E2
N1W3
N1W2
N1W1
N1E1
N1E2
基準点
N1W8
N1W7
N1W6
N1W5
S1W8
S1W7
S1W6
S1W5
S1W4
S1W3
S1W2
S1W1
S1E1
S1E2
S2W8
S2W7
S2W6
S2W5
S2W4
S2W3
S2W2
S2W1
S2E1
S2E2
S3W8
S3W7
S3W6
S3W5
S3W4
S3W3
S3W2
S3W1
S3E1
S3E2
0
1m
(S=1:300)

図3 調査地の区割り

B区
SD105
SD104
SD103
SD102
SD101
A区
攪乱
P21
P30
SB1
SB10
SB2
P42
P53
P60
P66
SD4
SD5
SK7
SB13
P150
SB9
P152
P162
SK9
P64
SK5
SD7
SK11
SB5
P222
SB4
SB3
SK2
SK14
P101
SK10
SK12
P88
SB8
SB11
SB7
SB12
SK1
P122
SD1
SB6
P199
SK4
SD2
SK6
SD3
SK13
SD6
0
10m
(S=1:200)

図4　遺構全測図

るので、この2枚を排土置き場として調査を進めることとした。調査地の区割りは、水田の区画割り現況に即したかたちでA区ほぼ中央部に基準点を設け、図3のような3mメッシュを設定した。南北軸は、磁北から東へ9°30′50″振っている。

A区の南北ラインでの土層をみてみると、調査地の遺構面レベルは北より47.95～47.80mといった南下がりの傾斜をなし、南北軸33mあまりの間の地山面にはおよそ25cmのレベル差がある。上層より第1層は水田耕作土、第2層が床土で、その直下に遺物包含層がある。包含層には第3層の明灰褐色砂質土、第4層暗灰褐色シルトがあり、その下面の黄色シルト上面で遺構が検出されている。包含層のうち、第3層は中世の遺物を包含するもので、A区中ほど以南で消滅する弥生～古代の遺物包含層、第4層に代わってかぶるように存在している。第3層は、氾濫により第4層や時には地山を削りながら堆積した層と考えられる。中世の遺構は、第4層上面から掘り込まれ、第3層と同色系の第5層明灰褐色シルトを埋土としている。古墳時代・古代の遺構埋土は、基本的に第6層暗灰褐色粘質土であるが、柱穴には暗褐色系の土に地山の黄色シルトブロックを含んだ土が入れられている。弥生時代の遺構は、第6層よりも黒味の強い暗褐色粘質土で埋まっている。

（2）弥生時代の遺構と遺物

a．竪穴建物

ＳＢ7（図5）

調査地のほぼ中央で検出された円形竪穴建物である。古墳時代～古代の溝ＳＤ1や掘立柱建物ＳＢ11・12に切られている。削平が著しく、北側の立ち上がりの痕跡や周壁溝が確認されたのみで、平面プランの2/3は失われている。復元すれば、直径8mを越える大型建物となる。主柱穴構成は定かではないが、床面より石庖丁片や、床面検出の柱穴Ｐ183から中期の甕片を出土している。この柱穴がＳＢ7に伴うものであれば、中期中頃から後半の遺構となる。

ＳＢ7出土遺物（図5）

弥生土器

甕（1）　頸部に鈍い稜をなして水平に近く折り曲げられた口縁は端部に面を持って収められている。

石庖丁（2）　緑泥片岩を素材とする未製品。粗割素材に敲打を加え、周縁を長方形に成形した後の穿孔段階で折損したものである。

b．土坑

ＳＫ1（図6）

ＳＢ7との切り合いは明確ではないが、ＳＢ7プラン内の床面で検出された。長径2.25m、短径1.9mの不整楕円形プランをなす。深さは、最深部で18cm程度、坑底はおおよそフラットである。中期前葉の遺構である。

ＳＫ1出土遺物（図7）

弥生土器

甕（3～7）　3は、復元口径20.6cmを測るもので胴部下位～底部を欠く。貼り付けによる断面三

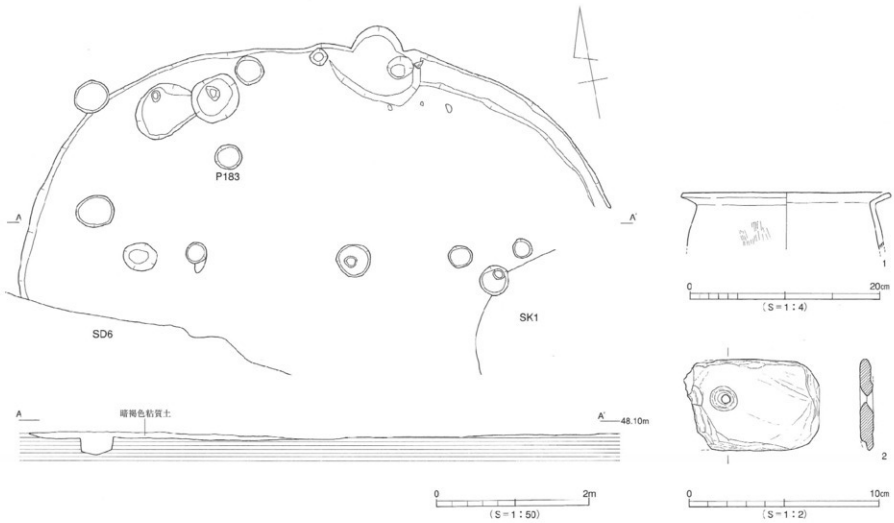


図5　竪穴建物ＳＢ７・出土遺物

図6　土坑ＳＫ１

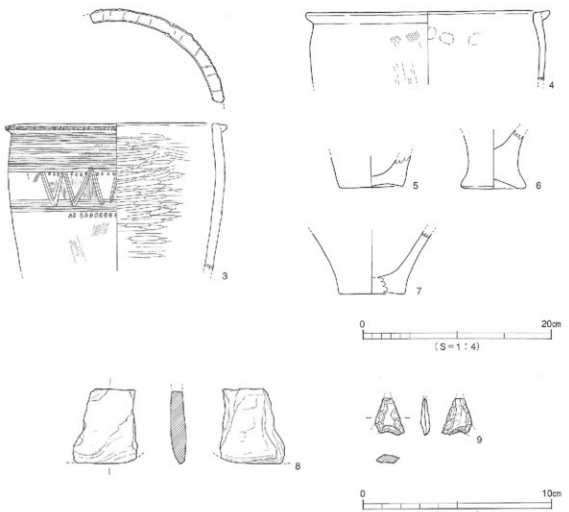


図7　ＳＫ１出土遺物

角形の口縁は端部を丸くおさめ刻み目を施し、また、やや下方に傾斜した上端面にも間隔のあいた刻みがある。口縁部直下に４本単位の櫛歯状工具による沈線を４単位とその直下に刺突列点文、その下位の施文帯に３本単位の櫛描山形文を挟んで、さらに２単位の沈線と刺突の組み合わせが施されている。内面は横方向よく磨かれている。４は無文の口頸部。断面三角形の貼り付けによる口縁部を持つもので、３と異なり上端面が水平になっている。底部には平底の５、７と、くびれたやや上げ底の６とがある。

石器

石庖丁（８）　緑泥片岩製石庖丁の刃部片。片面はよく磨かれているが、裏面は磨かれていない。

石鏃（９）　凹基無茎鏃の破損品。先端部と一方の逆刺端を欠く。現況重量1.15ｇのサヌカイトを素材とするものである。

ＳＫ２（図８）

古代の竪穴建物ＳＢ４に切られる直径0.6mの円形土坑で、深さは15cm程度の遺存である。中期前半の遺構であろう。

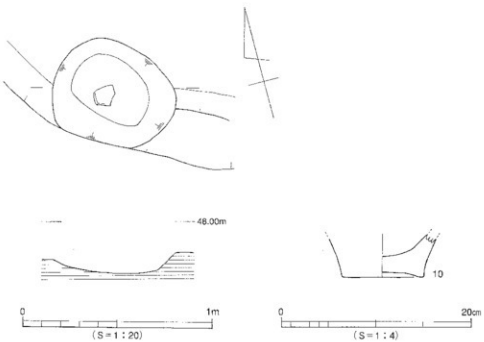


図8　土坑ＳＫ２・出土遺物

ＳＫ２出土遺物（図８）

弥生土器

甕（10）　やや窪み底の底部片。

ＳＫ３・４（図９）

深さ30cmを測る、1.6×1.0m規模の不整形土坑ＳＫ３の検出面上面に遺物がまとまって出土している。掘り方は残っていないが、これらの遺物が直径１ｍ程度の円形にまとまる範囲に土坑を想定し、ＳＫ４として扱った。前期末～中期初頭の遺構である。

ＳＫ４出土遺物（図10・11）

弥生土器

甕（11～14）　11は、復元口径31.4cmの大型品で、口縁は短く水平に折り曲げられている。頸部下の施文は、上から順に、４（１＋３）本沈線、刺突、４（１＋３）本沈線、２本沈線による山形文。４（３＋１）本沈線、刺突、１本沈線、刺突となっている。山形文に用いられる沈線は、他のものに比べて細く鋭いものとなっている。12も折り曲げ口縁を持つ上半部で、頸部内面には稜を持たない。口端部は丸く収めている。13は、復元口径22.0cmになる上半部で、薄い器壁に断面三角形のこれも薄い口縁部を貼り付けている。施文は口縁部直下から４本の沈線下に刺突、その下位の５本沈線下に刺突といった組み合わせである。なお、刺突は三角形状ものとなっている。14は、やや窪み底の底部である。

壺（15～17）　15は、頸部外面に刻み目突帯を持つ頸部～肩部の片で、この突帯上位の頸部に14条の沈線、また突帯をやや下った肩部に５条の沈線を持つ。また、内面口縁部には細い断面三角形の突帯が注口状に貼り付けられている。胎土、焼成、施文ともに11の甕によく似通った特徴を持っている。16は、張りのある胴部によく締まった短い口頸部といった単純な器形をなすものである。17は、窪み

底から大きく開く底部である。

石製品

台石（18）　砂岩を擦り石や台石として使用したもので、二次的に被熱して破損している。作業面は断面U字の溝状に窪み、その窪みの中の一部に敲打痕がある。

剥片（19）　一部自然面を有するサヌカイト片である。

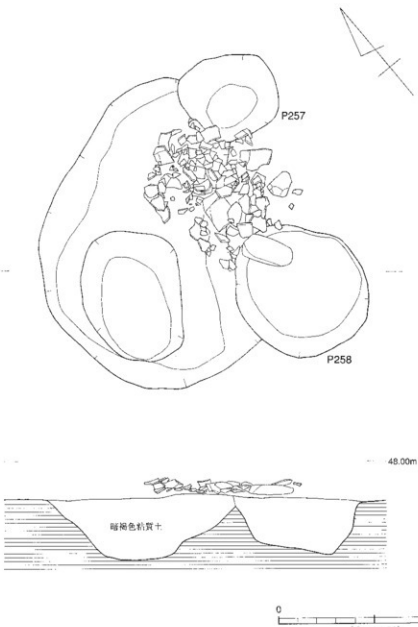


図9　土坑ＳＫ３・４

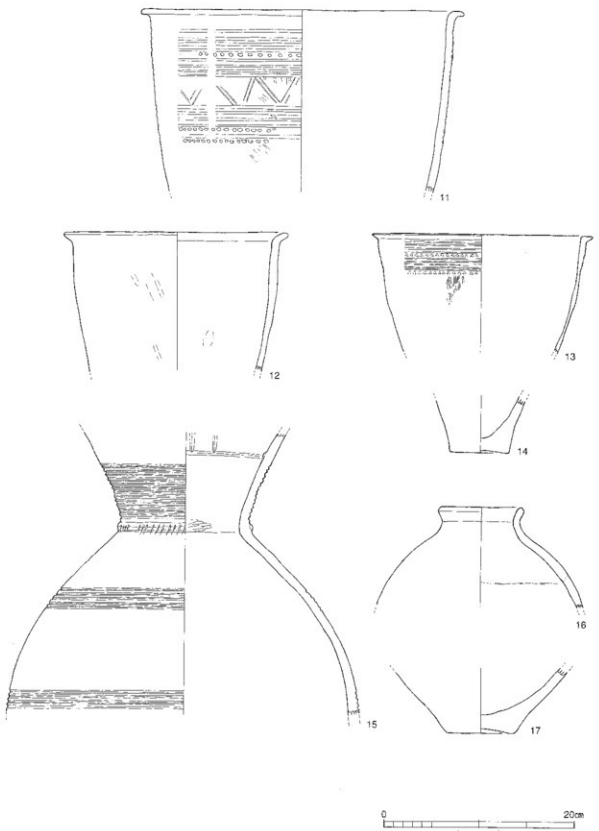


図10　ＳＫ４出土遺物（１）

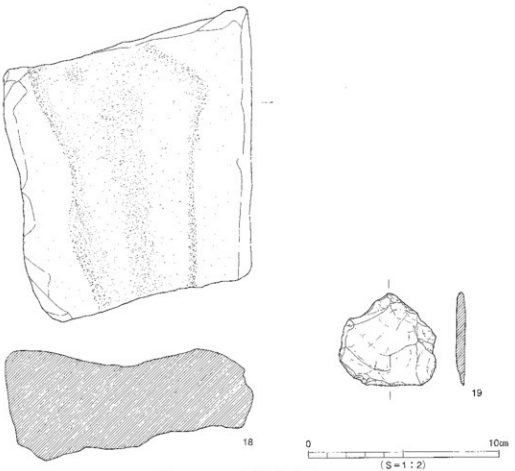


図11　ＳＫ４出土遺物（２）

ＳＫ５（図12）

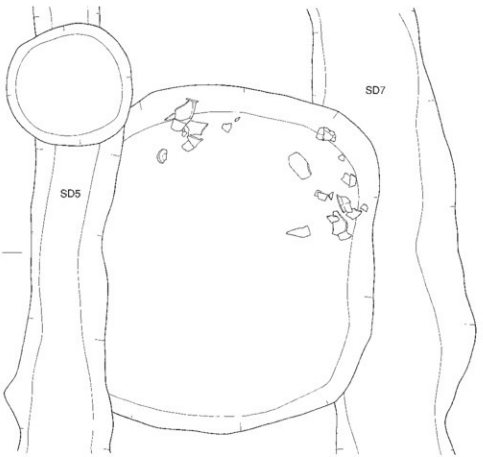
弥生時代中期前葉の溝ＳＤ７を切り、古代の溝ＳＤ５に切られるもので、直径1.8m程度の円形に近いプラン、深さは40cmを測る。坑底はフラットである。ＳＤ５からの混入須恵器や土師器が若干出土しているが、ＳＤ７と同じく中期前葉の遺構である。

ＳＫ５出土遺物（図13）

弥生土器

甕（20～26）　20は、復元口径19.2cmになるもので、口縁部は内面に稜を持って短く斜め上方に折り曲げられている。胴部上半の最大径部よりやや上位に横長楕円の刺突を施されている。21・22は貼り付け口縁になるもので、いずれも水平方向に断面三角形の口縁を貼り付けている。21では口縁部上端面に櫛描波状文を、また22では頸部外面に平行沈線が５条まで確認できる。23は、緩く口縁部を折り曲げる無文のもので、鉢である可能性が高い。24は、復元口径20.0cm、胴部最大径19.7cmを測るもので、上胴部の不明瞭な段を介して口頸部が緩やかに外反して広がる形態で、口端部は水平に近い面をなす。段の直下にはノの字状の刺突文が巡っている。外面の調整には、口頸部に刷毛目、胴部を縦方向のヘラ磨きを用い、口頸部内面を横方向にヘラ磨きしている。「土佐型」あるいは「西南四国型」と呼称されているタイプの甕である。25・26はやや窪み底の底部である。

壺（27～29）　27は、復元口径13.8cmの壺口頸部片である。ほぼ直上に立ち上がる筒状の頸部形態



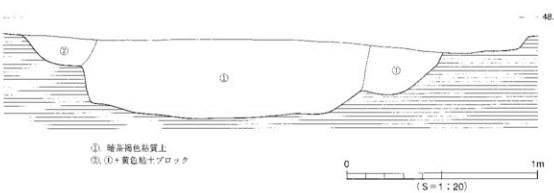


図12　土坑ＳＫ５

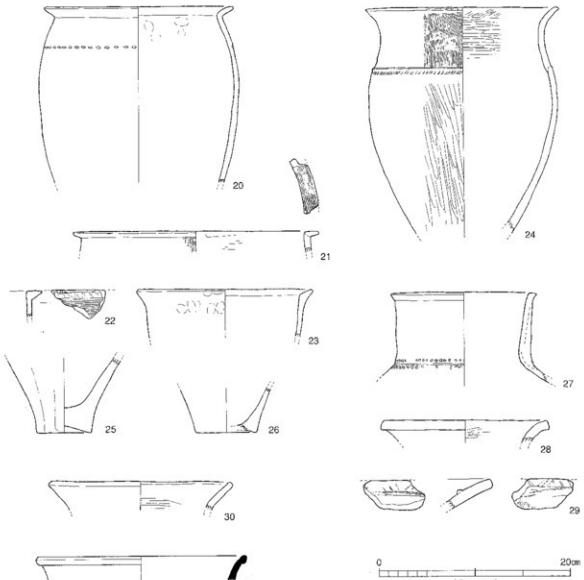


図13　ＳＫ５出土遺物

をなす。口端部は上面に水平な面をなし、やや外方に摘み出されるように断面三角形状に突出する。頸部と胴部の境に沈線が１条巡り、その上下位に刺突列点文が施されている。器面の各所に焼成剥離のような剥離痕がみられる。24の甕と同様、四国西南部で確認される形態的特徴を持つ壺である。28・29はラッパ状に開く口縁部の小破片、29の内面には細い突帯が貼られ、その外側に櫛歯状工具による３本単位の山形文と思われる刺突文がある。なお、口端面にも同様の施文が確認できる。

土師器

甕（30）　古墳時代中期頃の甕口縁部片である。

須恵器

甕（31）　口端部に接して断面蒲鉾状の突帯を持つ口縁部片。

ＳＫ６（図14）

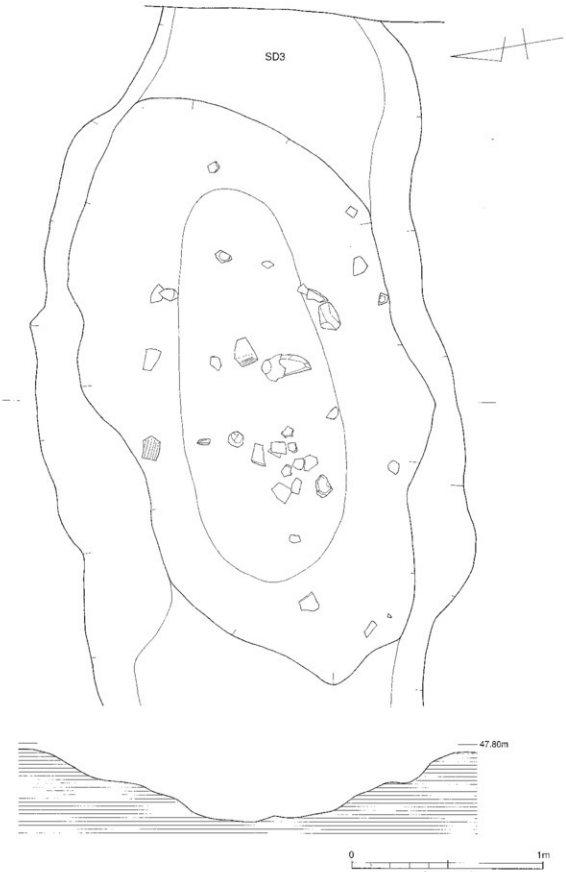


図14　土坑ＳＫ６

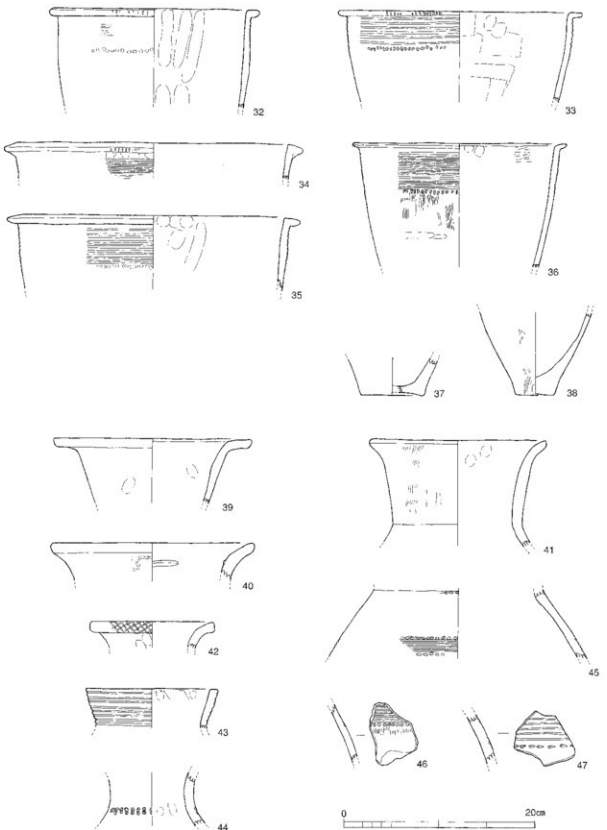


図15　ＳＫ６出土遺物（１）

中世の溝ＳＤ３に切られて検出された、3.2×1.7ｍの不整楕円形の舟形土坑である。ＳＤ３からの混入と思われる須恵器や、やや新しめの弥生土器を含むが、前期末の遺構である。

ＳＫ６出土遺物（図15～17）

弥生土器・土製品

甕（32～38）　32～36はいずれも口頸部から上胴部の片で、32、34、35が口縁部貼り付けによるもの、33、36が折り曲げによるものである。前者のうち、32は復元口径20.0cm、器面の摩滅のため確認しづらいが、端部を丸く仕上げられた貼り付け口縁端部に浅い刻み目を持つ。口縁部下に沈線が４条程度確認できる、その下位に連続刺突文が施されている。34の口径にはやや不安があるが、口縁部は断面三角形状に貼り付けられ、端面に刻み目、口縁部下に７条の沈線を持つ。復元口径27.4cmを測る35の口端面に刻み目はない。沈線は９条、その下位に刺突文が施されている。後者の折り曲げによるもののうち、33は復元口径23.0cm、口縁部は水平にまで折り曲げられ、面を持った端部を刻まれてい

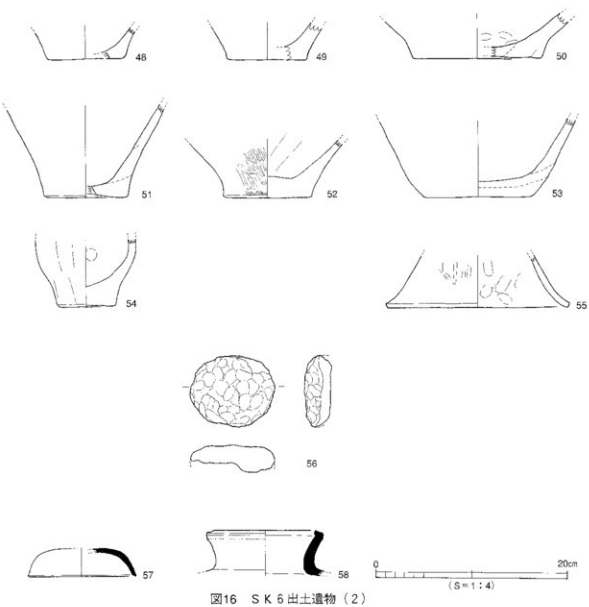


図16　ＳＫ６出土遺物（２）

る。沈線は6条、その下位に刺突を持つ。36は復元口径22.0cm、口端面の刻み目はない。沈線は14条でその下位には刺突文が施されている。底部37は、若干の窪み底、38は小型のものであるが、厚みのある平底となっている。

壺（39～54）　口頸部39は、やや外開き筒状の頸部から口端部が強く折り曲げられるもの、復元口径19.8cmを測る。40は、41と同様の器型もしくは、短頸になる口縁部と思われる。41は直立気味の長頸から口縁部が短く外に折り曲げられるもので、端部に面を持たず丸く収められている。42は開いた口縁形態で、面を持った口端面にヘラ描斜格子文を施されるもの、43は短い直口気味の口縁で、端部は水平な面をなす。外面に深いヘラ描沈線を8条施されている。いずれかからの搬入品であろう。44の胴頸界には相接した竹管文を8の字状に上下に配した施文がある。45の肩部には5条の沈線、その上下位に連続刺突文が、また胴頸界にも刺突文が確認できる。46・47も複数条の沈線と刺突とを組み合わせた肩部あるいは頸部下位の片である。48～54の底部は、大中小型品のいずれも平底もしくは僅かな窪み底になるものである。

蓋（55）　復元撮径18.6cmの、やや器高が高めの甕蓋裾部片である。外面の一部に煤の付着がある。

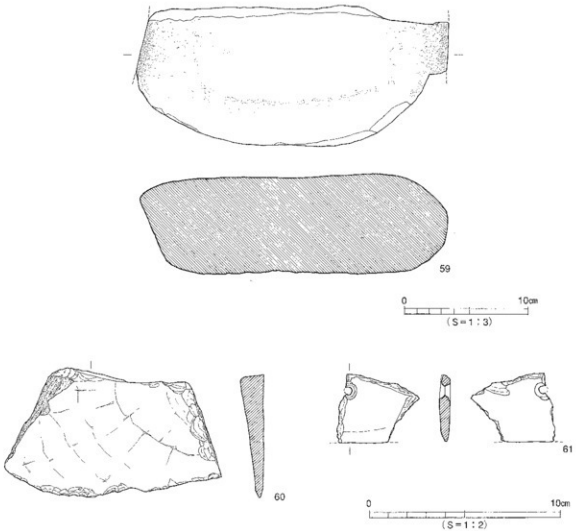


図17　ＳＫ６出土遺物（３）

不明土製品（56）　8.7×7.5cmの楕円形平面プランをなす土製品で、現状での最大厚2.8cm、重量168.1gを量る。生きている部分全面に指頭成形痕がある。片面は凸面となり、また破損している一方の面には指頭痕の付いた凹面がある。

須恵器

蓋（57）　二次的な被熱により酸化したものと思われる蓋で、復元口径11.4cmを測る。天井・口縁部界に稜を持たず、口端部は内面に鈍い稜を持って尖り気味に仕上げられている。

壺（58）　復元口径10.6cmを測る口頸部片。口端外面に稜を持って屈曲し、端部を断面三角形状に内面斜め上方に突出させている。

石器・石製品

台石（59）　破損品であるが、砂岩転石の片面に、擦り痕・敲打痕が残っている。

スクレーパー（60）　部分的に自然面の残るサヌカイトの横長剥片の長側辺に刃付けを行った剥片石器である。

石庖丁（61）　緑泥片岩製石庖丁の刃部片の片。

ＳＫ７（図18）

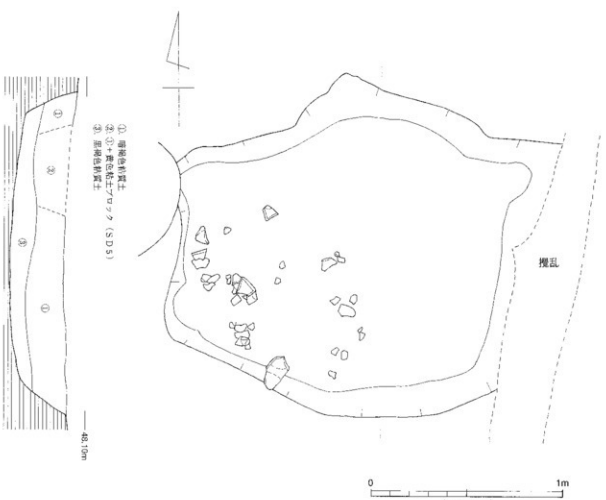


図18　土坑ＳＫ７

ＳＫ５の東直近で検出された不整形の土坑で、ＳＤ５に切られている。1.8×1.7m程度の隅丸方形に近いプランをなし、深さ30cmを測る。坑底はフラット、中期前半の遺構である。

ＳＫ７出土遺物（図19）

弥生土器

甕（62～66）　62～64は、口縁部折り曲げによる上半部、口頸部片である。62は口径20.4cm、胴部最大径もほぼ同じである。外上方に折り曲げられた口縁部は端部を丸く収める。頸部をやや下がった位置に、半裁竹管と思われる工具による斜め方向からの刺突文が施されている。63も同様の折り曲げ口縁、64は折り曲げが弱い。65は、端部に接して断面三角形の突帯を貼り付けた口縁部形態をなすもので、小片のためわかりづらいが口縁下に櫛描沈線と思われる浅い擦痕がある。66は平底の底部である。

壺（67・68）　67は、口端面に斜格子文を持つ口縁部小片。68は、短く折り曲げられた短頸壺の口頸部である。

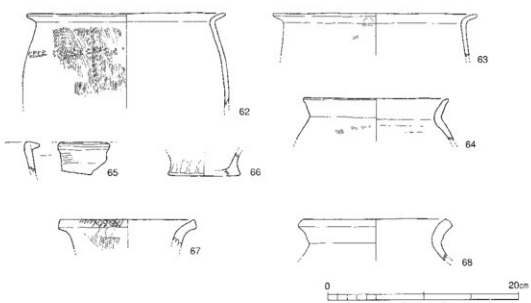


図19　ＳＫ７出土遺物

ＳＫ９（図20）

中期前葉の濃ＳＤ７に切られて検出された。1.3×1.0mの長方形プラン、深さ30cmのボウル状断面をなす。前期末～中期初頭の遺構である。

ＳＫ９出土遺物（図21・22）

弥生土器

甕（69～72）　69は口径23.5cm、口縁部貼り付けによるもの、口縁部下に５本単位の櫛描沈線文を４単位、その下位に刺突列点文を施している。70は、口縁部を欠く上胴部片で、上から順に沈線８条、横長の刺突、沈線１条を挟んで、横長の刺突、８条沈線の順で施文されるものである。底部71は僅かな窪み底、72は平底になるものである。

壺（73～77）　73は、復元口径13.4cmになる口頸部片、外反しながら緩く外に開いて端部を丸く収

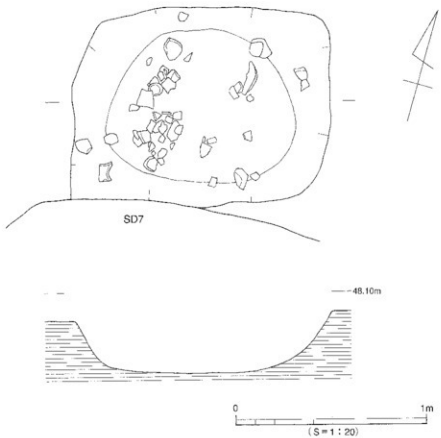


図20　土坑ＳＫ９

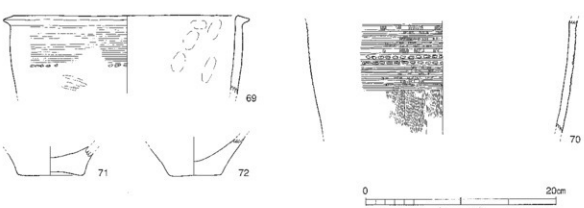


図21　ＳＫ９出土遺物（１）

めている。74は短頸壺の小片である。平底の底部３点のうち、大型の77の外底面には広葉樹の葉の圧痕が残っている。

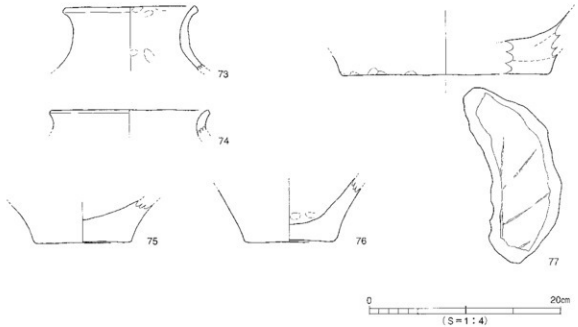


図22　ＳＫ９出土遺物（２）

ＳＫ10（図23）

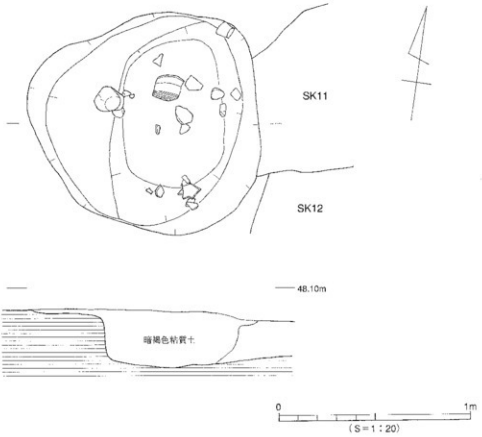


図23　土坑ＳＫ10

東に隣接する溝状の土坑ＳＫ11を切って検出されている。直径1.2ｍの円形に近い平面プランで検出されたが、西側にテラス状の部分がある二段掘りの形となっている。深さは25cm、前期末の遺構である。

ＳＫ10出土遺物（図24）

弥生土器

甕（78～81）　78は折り曲げ口縁で、口縁下に沈線３条と横長の刺突、その下位に沈線が１条確認

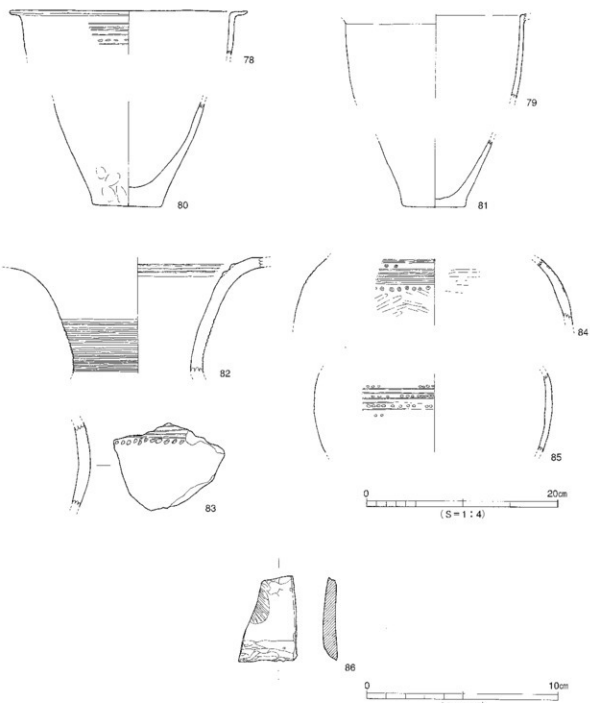


図24　ＳＫ10出土遺物

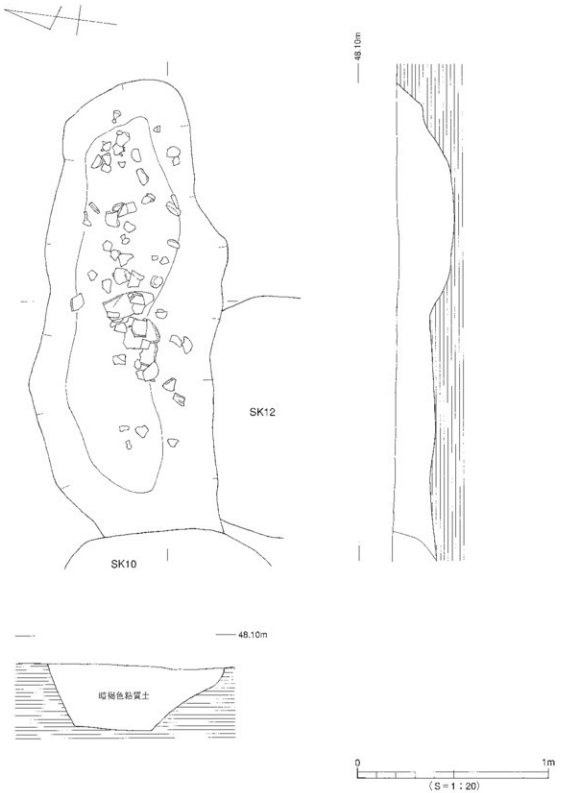


図25　土坑ＳＫ11

できる。79も折り曲げ口縁の無文の甕上半部であるが、口縁端部を欠いている。底部2点はいずれも平底となっている。

壺（82～85）　口頸部82は、口端部を僅かに欠いている。大きく開く口縁部内面には、断面蒲鉾状の低い突帯が2条巡っており、頸部外面にはヘラ描沈線が16条まで確認できる。胴部には、上位片84と中位の片83・85があり、いずれも複数条の沈線と刺突文を組み合わせた施文を持っている。

石器

剥片（86）　サヌカイトの不定形剥片の一短辺を片面から加工している。

ＳＫ11（図25）

長さ2.4m、幅1.0m、最深部での深さ30cmの舟形土坑で、前述のようにＳＫ10に切られ、後述するＳＫ12を切る。ＳＫ10と同様前期末の遺構である。

ＳＫ11出土遺物（図26・27）

弥生土器

壺（87～93）　83は、復元口径22.6cmを測る広口の短頸壺口縁部である。口端部はしっかりした面をなし、頸部にはヘラ描沈線が7条まで確認できる。88は頸部片、89は頸胴界と肩部に沈線と竹管文を組み合わせた文様を持つもので、頸部には竹管による刺突の上位に沈線が2条まで確認できる。肩部では上から、刺突、沈線3条、刺突、沈線4条、刺突の順となっている。90～93の底部はすべて平底である。

甕（94～98）　折り曲げ口縁の97を除いた4点は貼り付けによる口縁を持つものである。94は、復

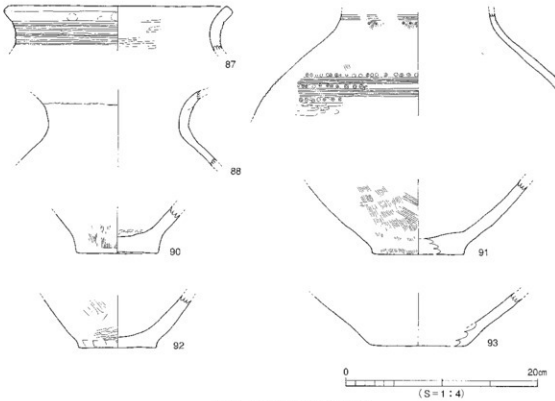


図26　ＳＫ11出土遺物（1）

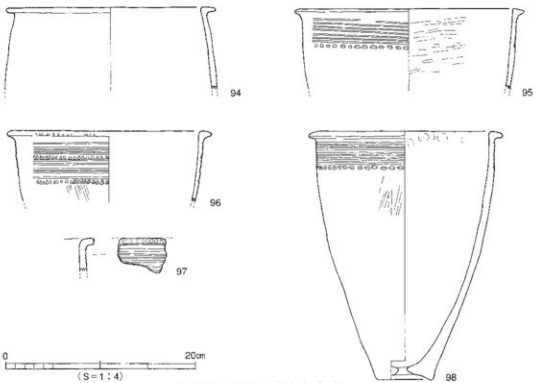


図27　ＳＫ11出土遺物（２）

元口径17.4cmの無文のもの。95、96、98は断面三角形の口縁を貼り付けられ、口縁部下に多条沈線と刺突による施文を施されるものである。95では７条沈線下位に刺突、96では上から順に４条沈線、刺突、５条沈線刺突となり、口端部に刻み目を施されている。98は、器高26.2cm、口径18.0cmを測るもので、直径5.6cmの穿み底には焼成後の穿孔が外底面から行われている。孔径は外面側1.8cm、内面側1.0cmとなっている。口縁部下に7条の沈線、その下位に連続刺突文を持つ。97は口縁部の小片、口端部に刻み目、口縁部下に沈線が４条まで確認できる。

ＳＫ12（図28）

直径１mの円形土坑、断面形は擂鉢状をなす。前期末のＳＫ11に切られる。やや古い様相の甕口縁部片の出土もあるが、中期中頃の遺構と考えられる。

ＳＫ12出土遺物（図28）

弥生土器

甕（99・100）　99は、水平に貼り付けられた口縁端部に刻み目を持つもの。口縁下には４条の沈線が確認できる。100は、くびれの上げ底の底部である。

壺（101）　平底の壺底部。胎土に角閃石を含んでおり、いずれかからの搬入品と考えられる。

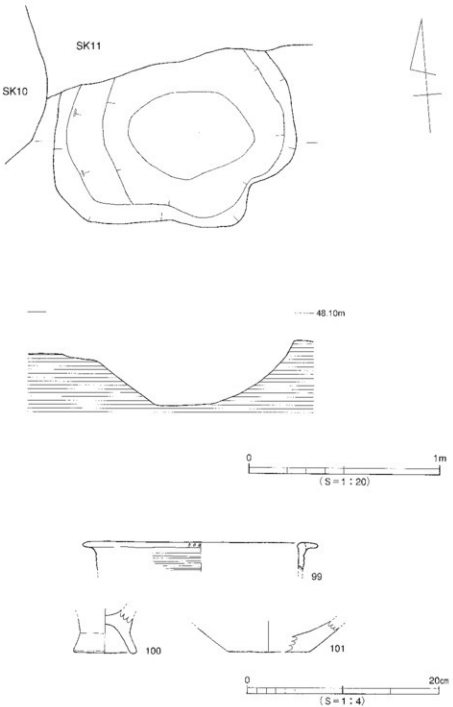


図28　土坑ＳＫ12・出土遺物

ＳＫ13（図29）

２×1.2mの長方形に近いプランで、深さ50cmを測るものである。底の西寄りに10cm程度の段掘りになる窪みがある。前期末の遺構である。

ＳＫ13出土遺物（図30～32）

弥生土器

甕（102～110）　口縁部貼り付けの102、103、105と折り曲げの104、106、108がある。貼り付けの

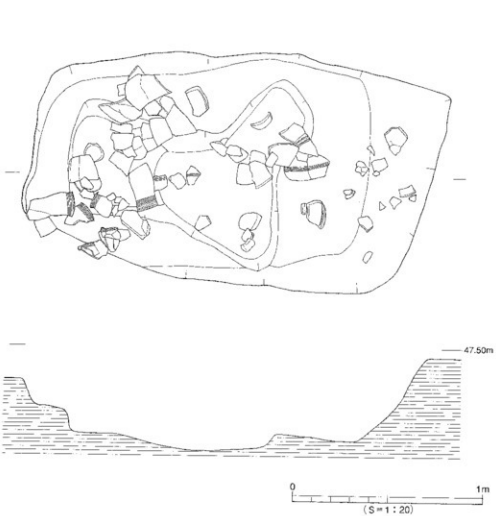


図29 土坑ＳＫ13

ものは、すべて多条沈線、口端部刻み目による施文を持つが、胴部の刺突はない。折り曲げのものもほぼ同様の施文であるが、108のように口端部刻み目のみで、胴部施文を持たないものがある。底部はすべて突出しない平底となっている。102は、口径21.4cm、断面三角形の突帯を貼り付けて上面が水平な口縁部とし、端部を刻んでいる。沈線は10条である。103も断面三角形突帯を貼り付けて口縁とするが、102に比べるとやや下方に傾いている。口径19.0cm、沈線は６条となっている。104は口径21.0～21.6cm、口縁部を短く折り曲げ端部を丸く収め、指押さえのような大きな刻み、口縁下には６条の沈線を施している。105は器高24.8cm、口径21.9cm、底径6.2cmを測るもので、胴部最大径を上端に持つ。貼り付けによる口縁部は、102・103に比べると薄い。端部に刻み目、沈線は11条である。106は器高33.0cm、口径23.9cm、底径8.5cm、胴部上位に口径とほぼ同サイズの最大径を持つ。折り曲げによる口縁部は端部に面を持ち、刻み目を施される。口縁下の沈線は９条である。107は口縁部を欠くもので、底径7.0cmを測る。胴部上位に４条の沈線が確認できる。208は器高28.1cm、口径22.5cm、底径6.4cmの胴部無文のものである。内面に鈍い稜を持って、外上方に短く折り曲げられた口縁部は端部を丸く収め、刻み目を施されている。胴部上位の内外面を横ないし斜め方向に磨かれている。

鉢（111）　器高13.4cm、復元口径16.6cmを測るもの、厚みのある突出した平底に、全体的に分厚い

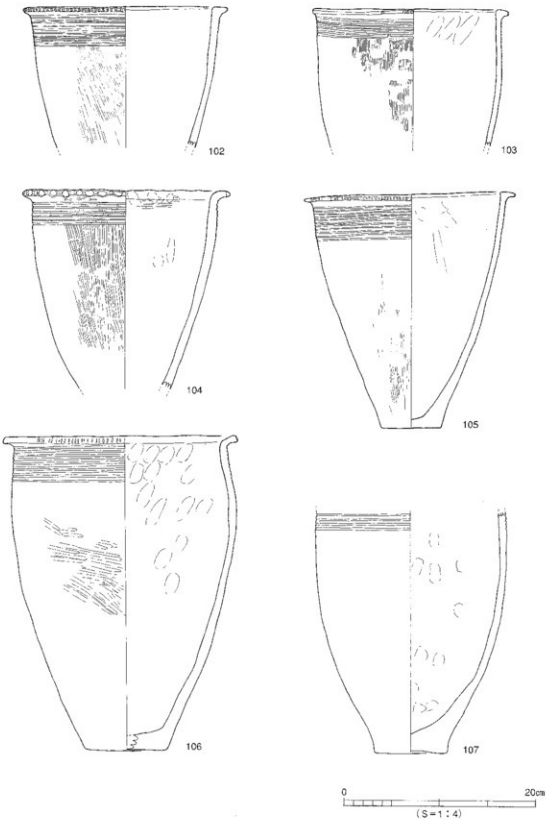


図30　ＳＫ13出土遺物（１）

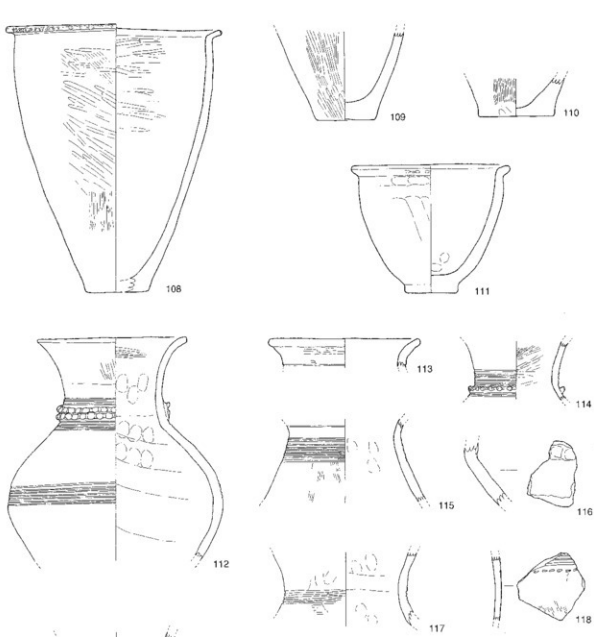


図31　ＳＫ13出土遺物（２）

器壁をなすものである。口端に断面蒲鉾状の突帯を貼り付けて口縁としている。

壺（112～122）　112は、外傾するやや長めの頸部から復元径15.5cmの口縁部が開くもので、胴張りの部分に７条のヘラ描沈線を持つ。頸部には２条の圧痕文突帯が貼り付けられ、その上位に３条、下位に４条のヘラ描沈線を施文され、胴部外面を横方向にヘラ磨きされている。113は、短く外に開

く口縁部の小片で、頸部の上端に1条の沈線が確認できる。114は、112と同種の壺の頸部片であるが、頸部突帯が1条となっている。突帯上位の沈線は6条、下位には2条まで確認できる。外傾する頸部片115の下端にはヘラ描沈線が2条まで確認でき、やや間隔をあけたその上位に9条の沈線がある。116は、薄い圧痕文突帯を貼り付けられた大型壺の頸部、117は、4条のヘラ描沈線を持つ頸部である。118は、刺突とその上位に沈線が3条確認できる壺胴部片もしくは、甕の上胴部である。119は壺肩部片、横方向のヘラ描沈線3条、沈線間に刻み目、その下位に櫛歯状工具を用いた斜線文を施している。底部は、すべて僅かな窪み底になるものとなっている。

図32　ＳＫ13出土遺物（３）

石製品

不明石製品（126）　緑泥片岩の剥離片で、生きている面を軽く磨き、稜を持って一方の側縁を磨いている。

ＳＫ14（図33）

古墳時代の竪穴建物ＳＢ４床面検出の楕円形土坑で、長径1.0m、短径0.8mを測る。東側の底が深く、およそ20cmの深さになる。中期初頭の遺構である。

ＳＫ14出土遺物（図34）

弥生土器

甕（124～130）　124は折り曲げ口縁の甕、復元口径29.6cmを測る。短く水平に折り曲げられた口縁部は端部に面を持ち、細かく刻まれている。口縁下には4本単位の櫛歯状工具による沈線。その下位に刺突が施される。125の口端部内面は、貼り付け口縁の上面と端部内面をつまむように横撫でした結果、内方に突出している。口端部は刻まれ、口縁下に8条の沈線、刺突、その下位に沈線が4条まで確認できる。126は、貼り付け口縁による無文の甕、上面を水平に短く貼り付けられた口縁は、

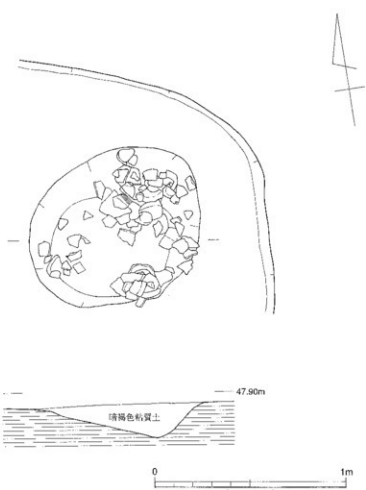


図33　土坑ＳＫ14

端部を丸く収められる。復元口径20.8cmを測る。外面上胴部は横方向に、以下は縦方向に磨かれている。127も貼り付け口縁、無文の甕で、口縁はやや下垂気味に貼り付けられている。底部には、平底、窪み底の両者がある。

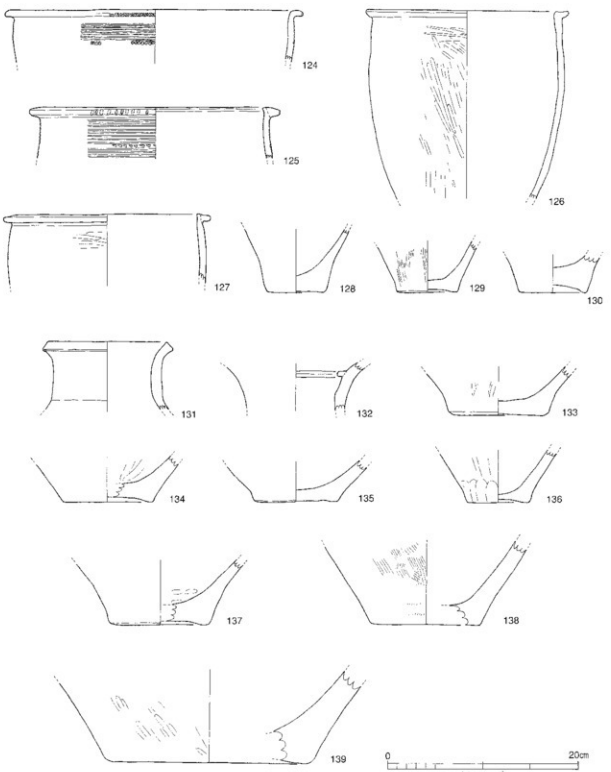


図34　ＳＫ14出土遺物

壺（131～139）　口頸部131は無文で、復元口径12.2cmを測るものである。筒状の頸部から口縁部が短く開き、端部に面を持つ。132は、内面突帯を持つ口縁部片で、水平方向に貼られた突帯の途切れの部分が確認できる。底部には中型品から大型品まであり、平底、若干の窪み底となるものがある。

c．溝

ＳＤ７（図35）

長さ8.1m、最大幅1.05mになる、断面Ｕ字形の東西を指向する溝状遺構で、東西両端に立ち上がりを持って収束する。溝とするよりは舟形土坑の一種と考えたほうがよいのかもしれない。中期前葉の遺構である。

ＳＤ７出土遺物（図36～38）

弥生土器

壺（140～150）　140・141ともに、胎土に１～３㎜大の黒色礫や長石粒を多量に含み、灰白色に焼成された粗製の壺である。140は、短い口縁部が胴部から直接強く屈曲するものである。口縁部外面や胴部内外面に指頭圧痕が多くみられる。141は、短い筒状の頸部から口縁部が短く開くもので口唇部に面を持つ。復元口径13.0cmを測る。胴部の張りは強い。142は、外反しながらほぼ直上に立ち上がる頸部から口縁部が開くもので、復元口径19.0cmの口縁端部に面を持つ。頸部に15条のヘラ描沈線が施されている。143は復元口径16.0cm、外反しながら開く口縁部内面の口端に接して幅広の粘土帯を貼り付け、内面に段を形づくるものである。口縁部内面突帯の変形か。頸部の外面には、不明確な沈線が１条確認で

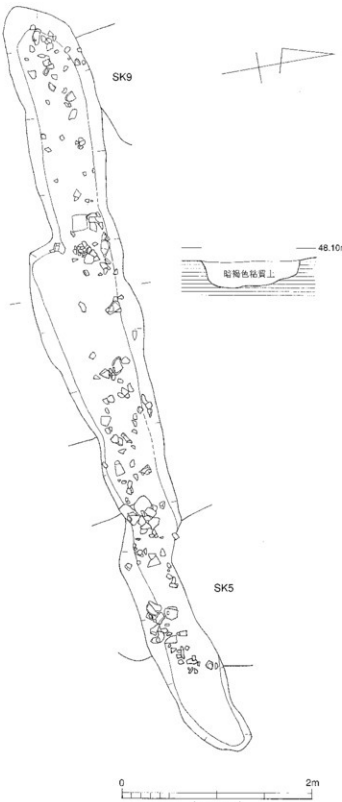


図35　溝ＳＤ７

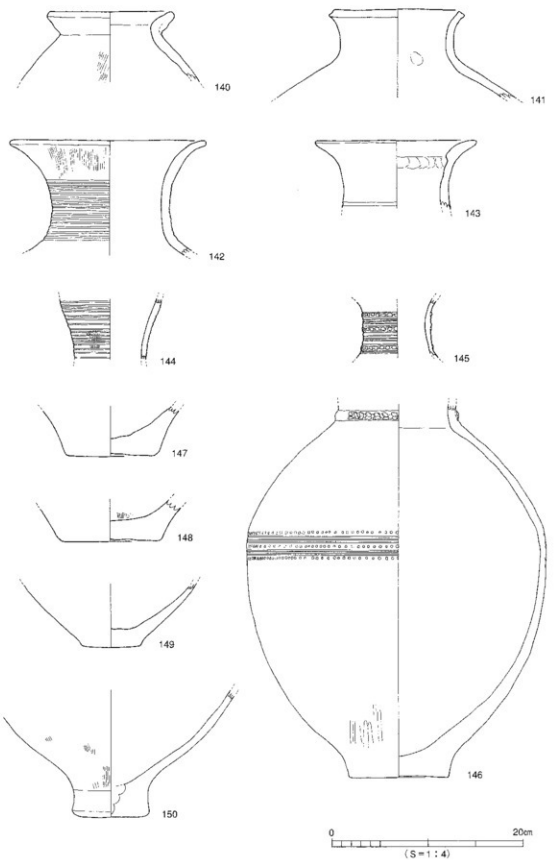


図36　ＳＤ７出土遺物（１）

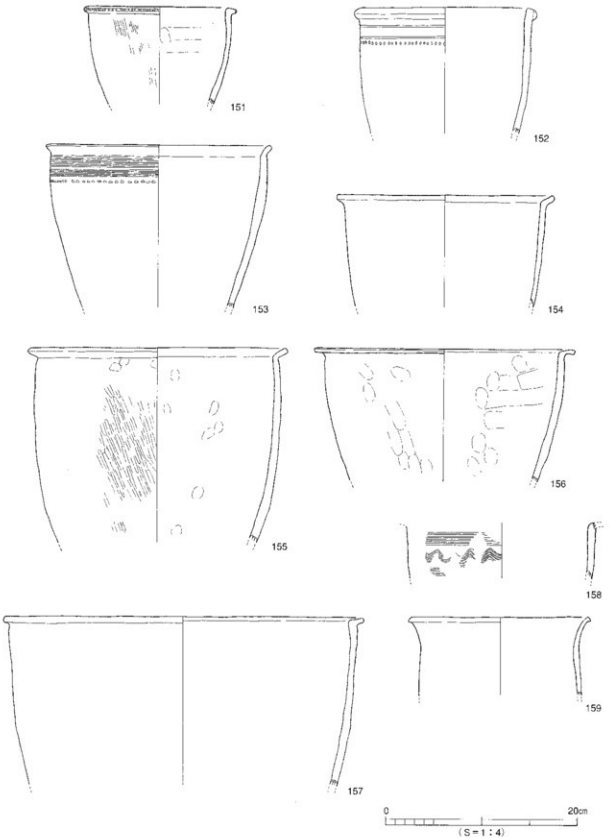


図37　ＳＤ７出土遺物（２）

きる。144は外傾する頸部、16条のヘラ描沈線を持つ。145は筒状の頸部、低く細い圧痕文突帯と沈線を組み合わせた施文を持つ。下から順に頸胴界の突帯、その上位の5条沈線、突帯、4条沈線、突帯の順となっている。この個体も胎土に1～3㎜大の黒色礫や長石粒を多量に含んでいる。146は、口頸部を欠くもので、安定感のある大きめの平底に長胴の胴部形態をなす。頸部下端には圧痕文突帯を1条貼り付けられ、胴部中位に刺突とヘラ描沈線を組み合わせた施文を持つ。構成は、3段の刺突間に3条単位の沈線文となっている。底部には147・148のように径の大きい平底と149・150のような径の小さいものとが

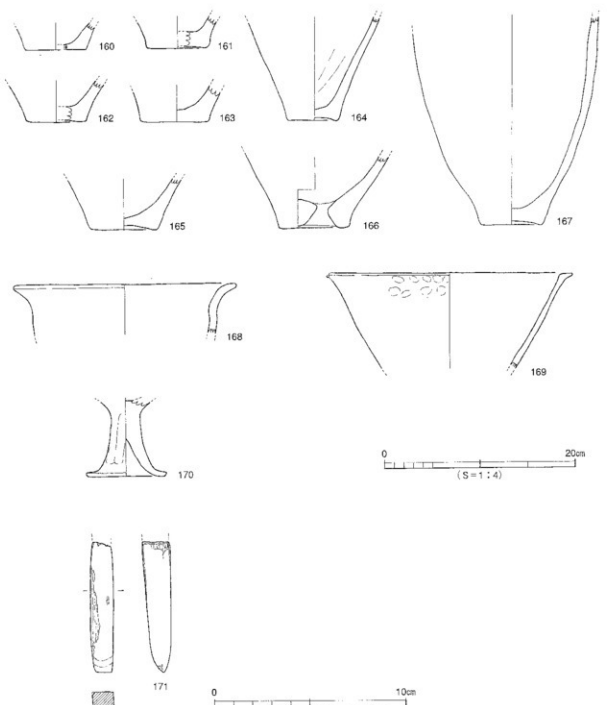


図38　ＳＤ７出土遺物（３）

あり、そのうち150は、蓋の天井部のよう、径の小さい突出した平底といった特異な形態のものである。

甕（151～167）　有文のもの151～153、158と、無文のもの155～157、159がある。151は口径14.4cm、貼り付け口縁の端部に細かい刻み目を施す。152は、断面薄鉾状の突帯を口端に貼り付けたもので、復元口径17.0cmを測る。端部の刻み目はない。口縁下の沈線は、摩滅のため２条しか確認できないが、本来もう少し多かったものと思われる。沈線下には刺突文が巡っている。153は、復元口径23.2cmの折り曲げ口縁のもので、外上方に短く折り曲げている。口縁下には９条の櫛描沈線とその下位に刺突がある。158は、有文の甕上胴部片で、２段のヘラ描沈線間に櫛描波状文を施すものである。上段の沈線は４条、下段には３条まで確認できる。波状文の櫛歯は５本である。無文のもののうち154は、胎土・焼成ともに壺140・141に似る折り曲げ口縁のものである。155も口縁部折り曲げによるもので、154同様、内面に稜を持って折り曲げられている。復元口径26.6cm、胴部外面の斜め方向の磨きが顕著である。156・157の口縁は、水平に近く短く貼り付けられている。復元口径は、156で26.0cm、157で37.4cmを測る。159は他の無文のものと異なり、緩く外反する頸部から口縁部が開くもので、口端部に面を持つ。西南四国型の甕である。底部には、平底と若干の窪み底になるものとがあり、うち166には外底面からの焼成後の穿孔が行われている。

鉢（168・169）　168は、外反しながら外上方に開くやや長めの口縁部形態をなすもの、169は、外上方に直線的に開く胴部と、上面に水平な面をなす断面三角形の口縁部を持つものである。

高坏（170）　裾径7.9cm、高さ6.8cmを測る脚部片である。およそ、その上位半分が中実となっている。

石器

石斧（171）　緑泥片岩を素材とした小型の柱状片刃石斧破損品である。

（３）古墳時代～古代、中世の遺構と遺物

ａ．竪穴建物

ＳＢ４（図39）

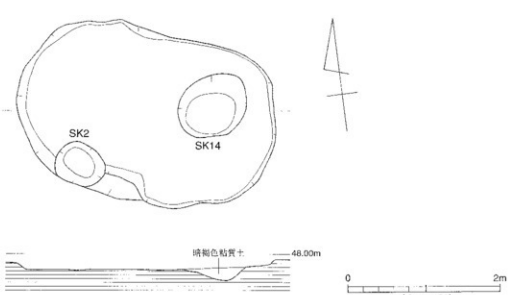


図39　竪穴建物ＳＢ４

3.5×2.2m規模の隅丸長方形に近いプランの竪穴で、立ち上がり10cm程度の遺存である。弥生時代の土坑ＳＫ２・４を切っている。床面に柱穴は検出されていない。削平されているので、周囲にも柱穴は検出されないが、叉首構造の簡易な建物であったのであろう。７世紀後半の遺構である。

ＳＢ４出土遺物（図40）

弥生土器

壺（172）　外反しながら直上に短く立ち上がる壺の口頸部片、端部を尖り気味に収める。

土師器

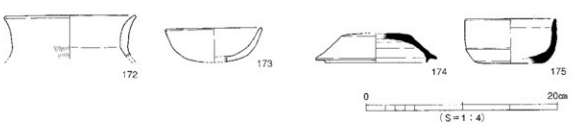
高坏（173）　古墳時代初頭の椀形高坏の坏部と考えられる破片である。

須恵器

坏（174・175）　174は蓋、復元口径（かえり径）10.4cmを測る。つまみを欠き、口縁下にかえりが延びるものである。天井の切り離し部分は、不定方向に撫でられている。175は椀形の身で、復元口径9.4cm、器高4.6cmとかなり深めのものである。外面の体部下位に浅い沈線が１条巡っている。

石製品

砥石（176）　砂岩を素材とした砥石の破損品。横断面形不定五角形の柱状石材の相接する２面を



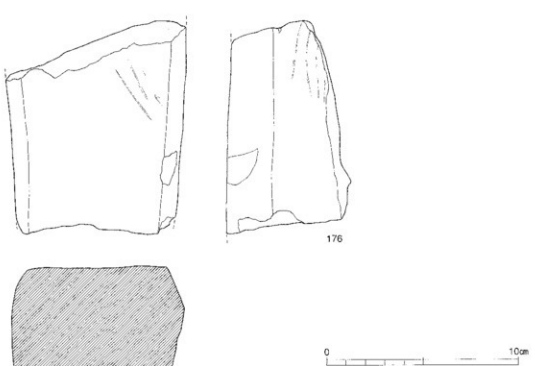


図40　ＳＢ４出土遺物

低面として用いている。

ＳＢ５（図41）

その南西隅をＳＢ４に切られて検出された。幅30～40cm、深さ20cm程度の溝が、南北4.9m、東西3.4mの隅丸長方形プランをなして周溝状に検出されているので、竪穴建物の壁体溝と判断した。溝は、南短辺の中央で70cmの間隔を空けて途切れている。入り口部分であろうか。床面に２基の柱穴、Ｐ171と174が芯々で２mの間隔をおいて南北軸方向に存在しているので２本柱の建物である。遺物は、

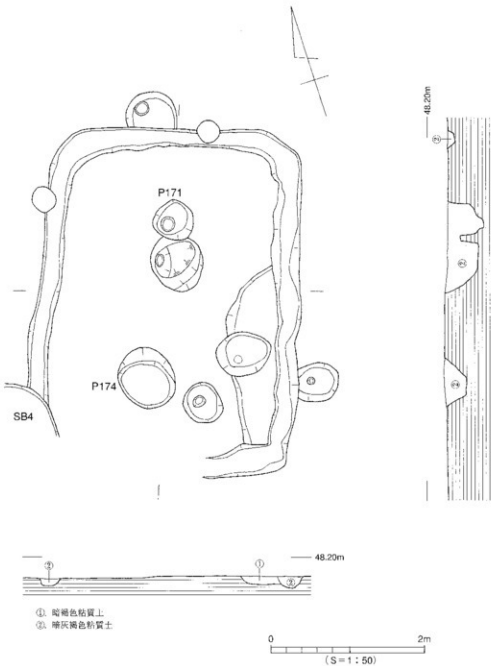


図41 竪穴建物ＳＢ５

溝から須恵器壺もしくは平瓶と思われる口縁部小片が採集されている。ＳＢ４との関係からいうと７世紀前葉～中頃の遺構であろう。

ＳＢ８（図42）

2.6×1.5ｍの、南北に長い隅丸方形竪穴で、南側短辺の両コーナー部に直径30cm、深さ25cmの２基の柱穴を持つ。壁面の立ち上がりは20cmの遺存となっている。須恵器坏蓋片１点のみの出土であるが、この遺物から、ＳＢ４同様７世紀後半の遺構としている。

ＳＢ８出土遺物（図42）

須恵器

坏（177）　内面にかえりを持つ蓋口縁部の小片で、口縁端よりかえりがやや突出する。天井部に自然釉がかかっている。

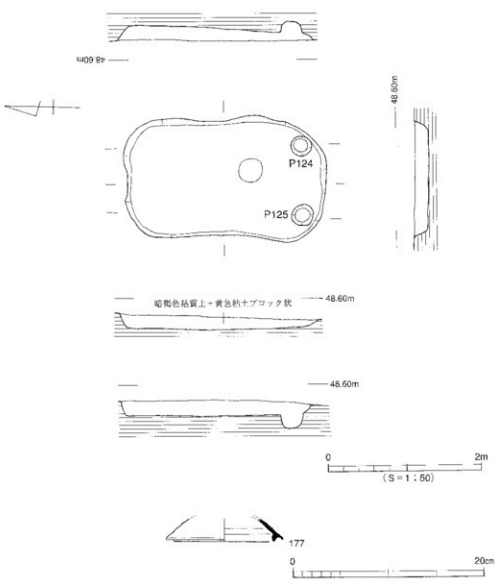


図42　竪穴建物ＳＢ８・出土遺物

b．掘立柱建物

ＳＢ１（図43）

調査地北東隅で検出された、２×３間の南北棟側柱建物である。その方位は、磁北から14°程度東

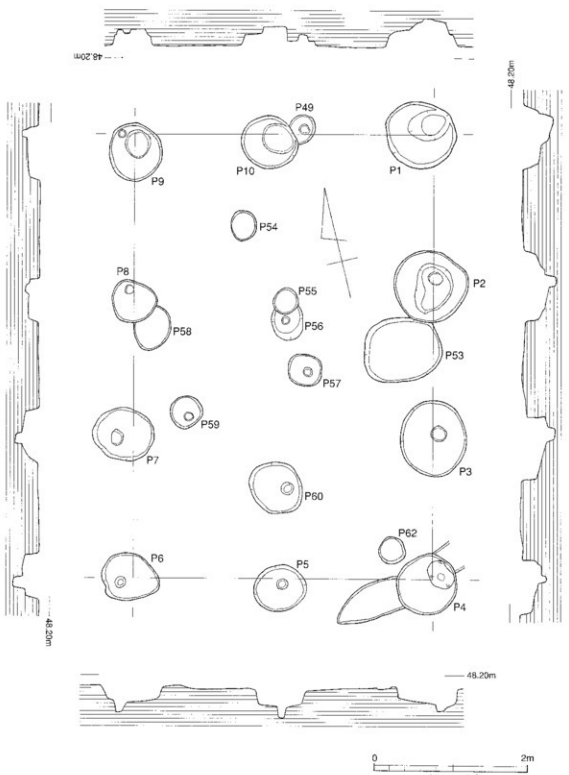


図43　掘立柱建物ＳＢ１

へ振っている。柱穴掘り方は円形、埋土から柱痕跡を確認することは難しかったが、結果的に柱穴底に柱痕の窪みが認められるものがいくつか存在する。これらから、桁行柱間およそ197cmの総長590cm、梁行柱間およそ207cmの総長415cm程度の建物に復元できる。

ＳＢ１出土遺物（図44）

弥生土器

壺（178・179）　178は、Ｐ７出土の大型短頸壺口縁部。外反しながら胴部から直上に立ち上がる短い口縁部で、端部を尖り気味に丸く収めている。胴部は長胴の形態になるものと思われる。前期末～中期初頭頃のもの。179は、Ｐ10出土の大きく開く口縁部で、端部を下方に拡張している。内面に円形の浮文を貼り付けている。中期中頃のもの。

土師器

甕（180）　Ｐ４出土。古墳時代中期頃の甕口頸部である。胴部からくの字状に屈曲して外上方に開き、端部を丸く収める。

須恵器

坏（181・182）　181はＰ４出土、182はＰ８出土の両者ともに身である。181は復元口径12.3cmになるもので、内傾する短い立ち上がりを持つ。182も同様の器型で、復元口径10.6cmを測る。いずれもＴＫ217段階のものである。

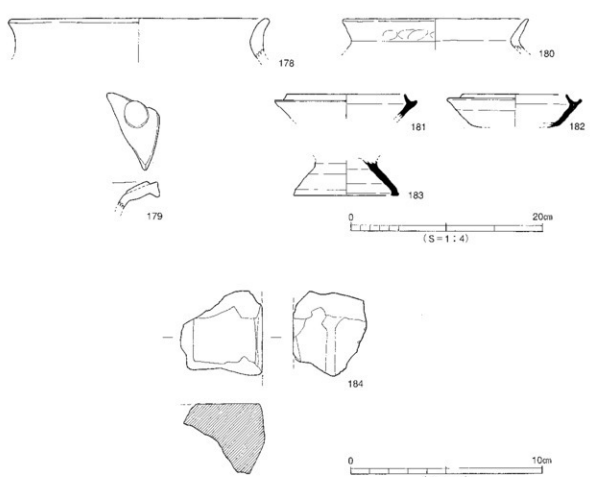


図44　ＳＢ１出土遺物

鉢（183）　Ｐ２出土の台付鉢もしくは高盤の脚台部分の片、裾径10.9cmを測る。端部付近で内湾、内方に突出した端部形態をなし、端面全体で接地する。乳灰色の色調を呈しているが、焼成は良好である。ＴＫ46段階のものか。

石製品

砥石（184）　陶石を素材とした砥石片、３面に使用痕がある。

ＳＢ２（図45）

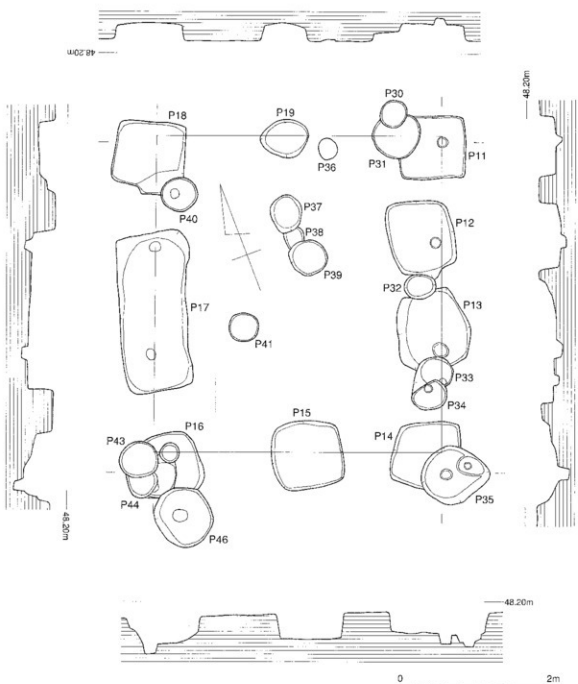


図45　掘立柱建物ＳＢ２

ＳＢ１の西直近で検出された南北棟側柱建物である。２×３間の南北棟側柱建物で、その方位は、磁北から20°程度東へ振っている。柱穴掘り方は一辺80cm程の方形が基本であるが、西側に部分的に柱穴２基分の長方形布掘りがある。部分的に確認できた柱痕跡や柱穴底の柱痕の窪みからすると、桁行柱間およそ140cmの総長420cm、梁行柱間およそ185cmの総長370cm程度の建物と推定できる。

ＳＢ２出土遺物（図46）

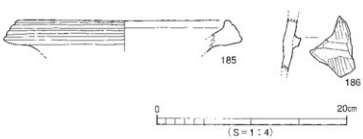


図46　ＳＢ２出土遺物

弥生土器

壺（185）　口端部を主に内側上方に拡張し、端面に３条の凹線を施したもの。復元口径20.6cmを測る。中期後葉。

埴輪

円筒埴輪（186）　須恵質に焼成された埴輪のタガ部分の破片である。P13の出土。タガは中窪みのM字形に近い断面形状で、器面には斜め方向の刷毛目調整が施され、二次調整は行われていない。５世紀代のものか。

ＳＢ３（図47）

調査地西部で検出された東西棟で、同じく東西棟のＳＢ９と重なっているが、柱穴どうしの切りあいはない。磁北から東へ97°程振れている。直径80～100cmの円形柱穴で構成される２×３間の側柱建物である。柱間にはややばらつく部分もあるが、桁行、梁行ともに柱間197cm程度で設計されたものと思われ、桁行総長590cm、梁行総長395cm程度の建物になる。

ＳＢ６（図47）

調査地中央付近で検出された東西棟で、後述する溝ＳＤ１や東西棟のＳＢ11に切られた状態で検出された。磁北から東へ112°程振れている。直径40～60cmの円形柱穴で構成される２×２間の側柱建物である。桁行柱間185cm、総長370cm、梁行柱間165cm、総長330cmを測る。

ＳＢ９（図48）

先述のＳＢ３と重なって検出された東西棟で、方位はＳＢ３と同様、磁北から東へ97°程度振っている。桁行１間、430cm、梁行２間345cmとなる変則的な建物である。桁行側に転ばし根太を併用した側柱建物である可能性も考えておきたい。

ＳＢ10（図49）

調査地北部で、ＳＢ２西側に接して検出された建物で、直径40～50cmの円形柱穴で構成されているが、北西コーナーの柱穴のみが確認できなかった。南北535cm、東西610cmと東西方向に少し長いので、桁行東西の建物と思われる。桁行柱間203cm、梁行柱間178cm、方位は磁北から東へ95°振っている。南東隅の柱穴Ｐ45が、ＳＢ２の南西コーナーの柱穴Ｐ16を切った円形柱穴Ｐ46をさらに切っているの

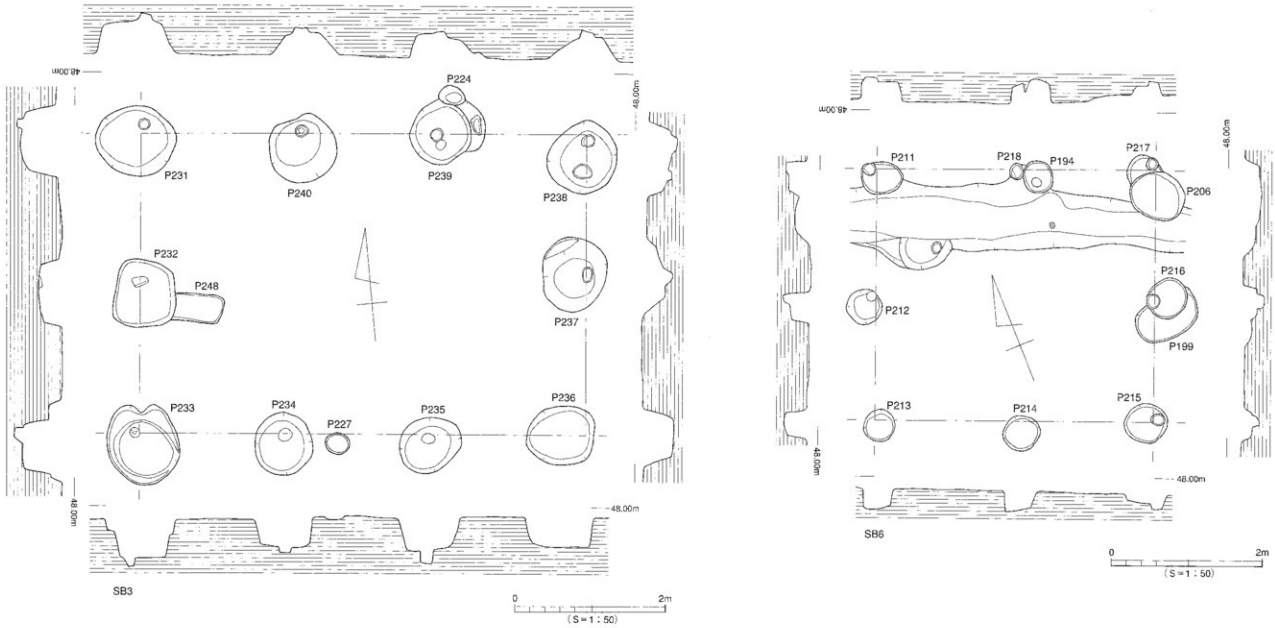


図47　掘立柱建物ＳＢ３・ＳＢ６

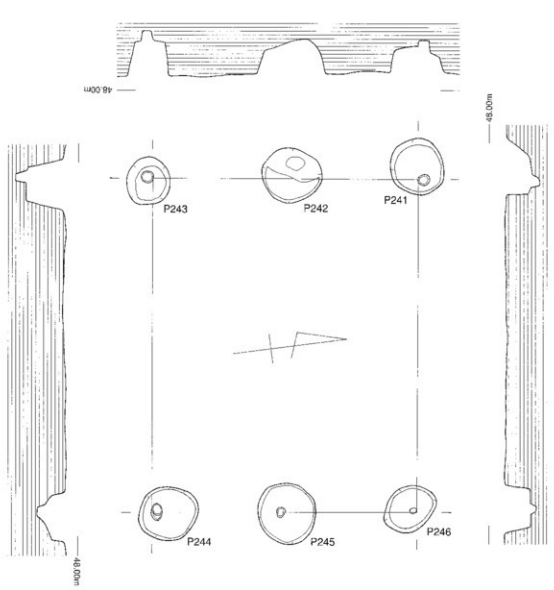


図48　掘立柱建物ＳＢ９

で、ＳＢ２よりは新しい建物である。柱穴埋土は、やや明るめではあるが、中世の建物のように灰茶褐色とまではならないので、古代に属する建物と判断した。

ＳＢ10出土遺物（図49）

土師器

椀（187）　復元口径12.6cmを測るボウル形の椀、古墳時代中期のものと思われる。

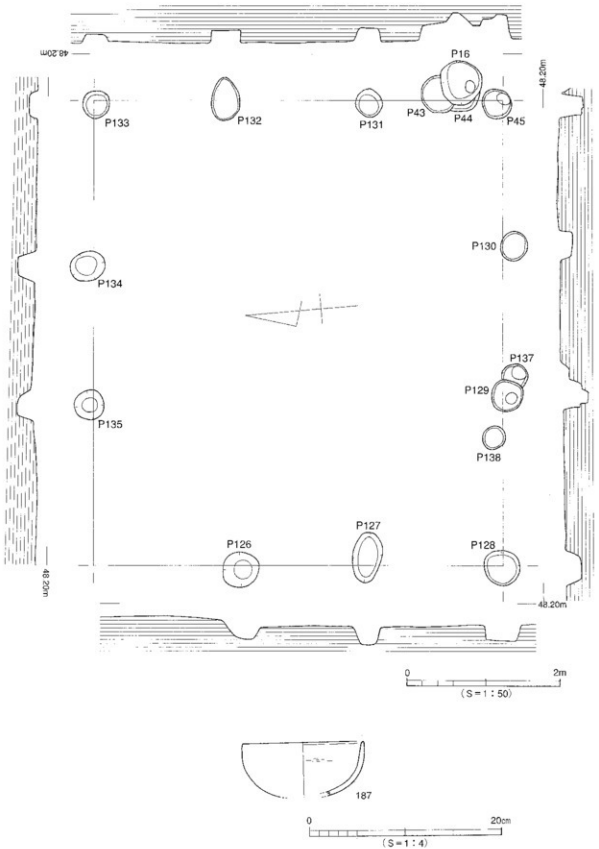


図49　掘立柱建物ＳＢ10・出土遺物

ＳＢ11（図50）

溝ＳＤ１に切られて検出されたもので、掘立ＳＢ６を切っている。西側梁行き柱間に長短があるが、２×３間の東西棟と認定した。桁行柱間150㎝、総長450㎝で、梁行の総長が280㎝程度の建物である。方位は磁北から東へ102°振る。

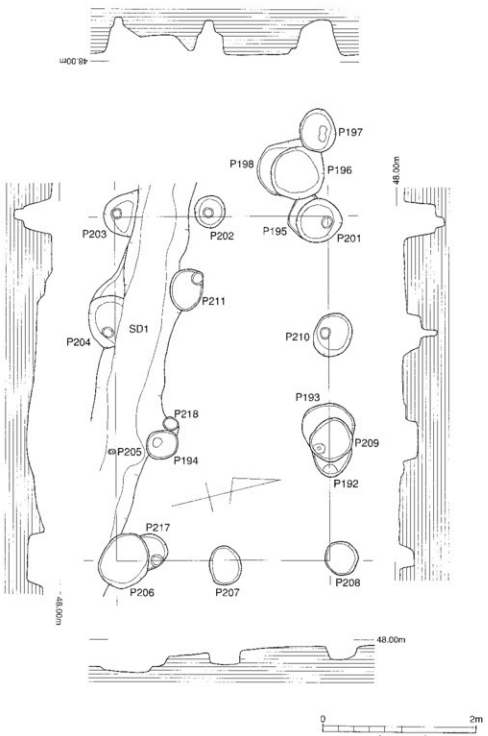


図50　掘立柱建物ＳＢ11

ＳＢ12（図51）

調査地西端で、溝ＳＤ１に切られて検出された東西棟、柱間や柱痕跡位置に若干のばらつきはあるが、480×280cm程度の２×３間の建物として認定した。北側桁行柱穴には、底面に礎盤石を数個置いたものもある。方位は、ＳＢ11と同じく磁北から東へ102°振っている。

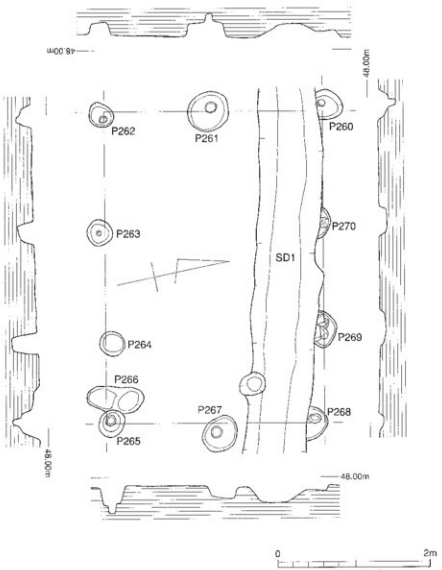


図51　掘立柱建物ＳＢ12

ＳＢ13（図52）

磁北とほぼ同じ方位をとる南北棟。柱穴にやや不ぞろいな部分があり、北辺中央の柱穴も未確認であるが、480×300cm程度の桁行３間の建物として認定した。梁行南辺中央の柱穴を建物に伴うものとすれば、梁行２間となるが、北辺に確認できない柱穴があることを問題にすれば、梁行柱間300cmの１間の建物となる。方位は、磁北から１°東へ振っている。

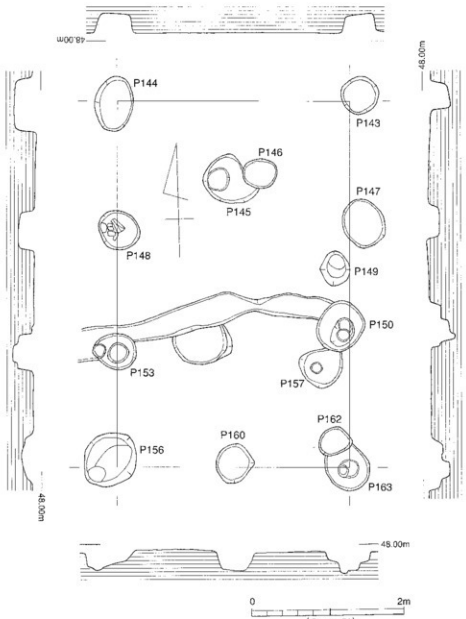


図52　掘立柱建物ＳＢ13

ｃ．溝

ＳＤ１（図４）

Ａ区のほぼ中央を北西から南東に横断するようなかたちで、約30ｍにわたって検出された。幅0.5～１ｍ、深さ20㎝程度、調査区東端近くで深さを減じ収束する。暗灰褐色の粘質土で埋まっており、砂層はみられない。

ＳＤ１出土遺物（図53）

弥生土器

壺（188・189）　両者ともにやや窪む壺底部である。

土師器

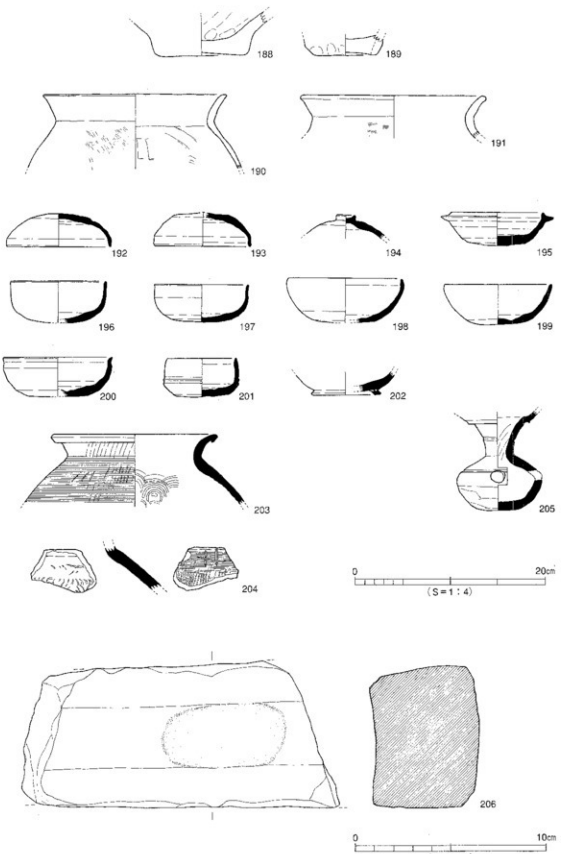

188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
0
20cm
(S=1:4)
0
10cm
(S=1:2)

図53　ＳＤ１出土遺物

甕（190・191）　190は、やや長胴気味になると考えられる甕上位の片。胎土は精良で、胴部外面に刷毛目が僅かに観察できる。191は、球形の胴部形態をなす甕の口頸部で、口縁部の外面には横撫でによる撫で窪みと、これに伴う隆起帯が巡っている。復元口径18.6cmを測る。

須恵器

坏（192～202）　192・193、195は古墳時代タイプの所謂、坏Ｈと呼称されているもので、蓋192の天井は丸みを帯びて仕上げられているが、193ではヘラ切り未調整で、扁平な天井部形態をなしている。192で口径10.8cm、193で10.1cmを測る。身195は復元口径9.8cm、内傾する非常に短い立ち上がりと水平に延びる受部を持つ。外底面はヘラ切り未調整である。194は、つまみの形態が小さな輪高台のような中窪みになるもので、異質ではあるがかえりを持つ蓋、坏Ｇの一種であると思われる。これに組み合う身が196～201で、口縁部が直線的な196・197、内湾気味の198～200、直線的にやや内傾する201とに分けられる。口径が非常に小さい201を除くと、口径は9.8～11.7cm、底部はすべて切り離し痕を撫で消されている。201は、器高4.0cm、口径7.2cm、体部下位に沈線２条を持つ。底部はヘラ切り未調整である。202は、有高台の坏身、高台径6.2cm、外にふんばる形の高台となっている。

甕（203・204）　203は口頸部～肩部の片で、強く外反して短く開いた口縁端部外面に扁平な突帯を貼り付けて肥厚している。胴部外面はタタキの後カキ目調整されている。なお、口縁部外面にも撫で消されてはいるが、タタキを施した痕跡が残っている。口径16.8cmを測る。204は肩部の小片、図示したようなヘラ記号がある。

甑（205）　口縁部を欠くもので、細い頸部から口縁部が大きく開くものである。頸部中位に１条、胴部穿孔部直上に１条の沈線を施される。胴部沈線以下の外面は、底部に至るまで横方向を主とした不定方向に撫でられている。穿孔による切り取り粘土が内部に残ったまま焼成され、溶着していないので、振ると鈴のような音がする。この甑を含めて、出土した須恵器類は、7世紀代のものである。

石製品

砥石（206）　方柱状の陶石の隣接する２面を砥面として用いているが、一面には筋砥石として使用した痕跡がある。また、使用されていない２面の一部には、工具による整形痕が観察できる。

ＳＤ２（図４）

Ａ区東端近くで、ＳＤ１の南に接するように東西長10m規模で検出された。溝とはしているが、幅３m、深さ20cm規模の、暗灰褐色シルトで埋まった窪みのようなもので、西端は自然消滅する。

ＳＤ２出土遺物（図54・55）

弥生土器

壺（207～210）　中・大型品の平底の底部４点の出土がある。

甕（211・212）　211は、底径5.4cmの若干凸状をなす平底の中央部を押圧によって窪ませる特異な形状の底部である。215は、復元口径22.0cmの折り曲げ口縁の甕で、端部に刻み目を持つ。口縁下の沈線は10条である。壺も含めてこれらの弥生土器は前期末頃のものであろう。

土師器

鉢（213）　復元口径28.8cmになるもので、器高の低い鉢状の器型になるものと思われる。胎土は精良である。

高坏（214）　復元口径13.3cmの椀形を呈する坏部片である。古墳時代中～後期のもの。

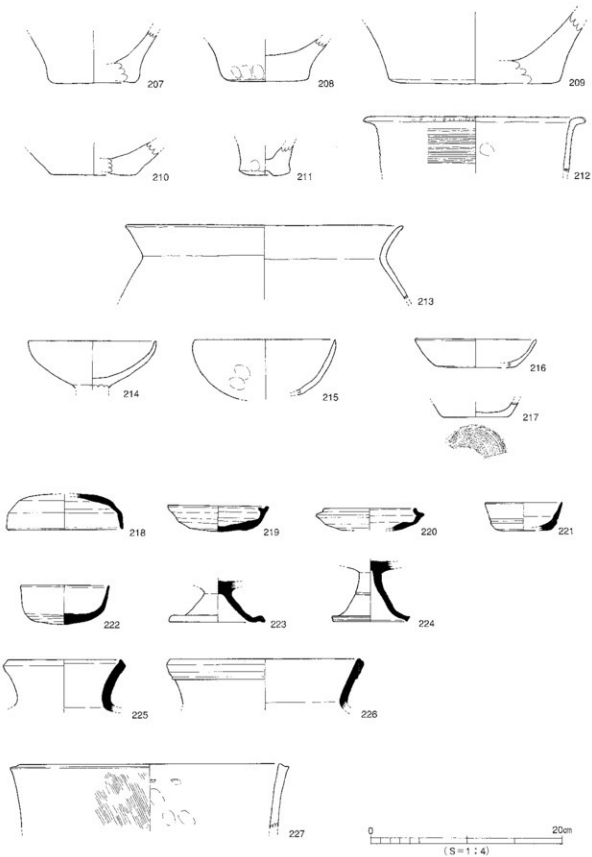


図54　ＳＤ２出土遺物（１）

椀（215）　高径14.6cmを測るボウル型の椀。器壁は薄く仕上げられている。詳細な年代は不明であるが、7世紀代のものか。

坏（216・217）　混入品と思われる小破片2点が出土している。底部片217の切り離しは、回転ヘラ切りによっている。

須恵器

坏（218～222）　218は、天井部と口縁部に稜などを持たない単純な器型の蓋で口端部を尖り気味に収めている。復元口径12.2cm、TK209型式相当。身219・220のうち、219は蓋になるかもしれが、つまみを持たないので、身として扱う。器高2.8cm、口径10.6cmの完形品で、受部よりも低い立ち上がりとなっている。外底面は切り離し後、雑な撫でを施されている。底部内面は縦撫でされている。220は、水平に延びる受部と内傾する短い立ち上がりを持つもの。両者ともにTK217型式相当のものである。221・222はTK46型式相当の身。221の体部下位には段が1条巡っている。小型の高坏の可能性もある。222は、やや丸身を帯びた、器高4.2cm、復元口径9.2cmになるもので、底部は軽く回転ヘラ削りされている。

高坏（223・224）　これらもTK46型式相当のもので、223は低脚、裾端部を強く折り返して突出させ、この端部と内面の折り返し部分で接地する。224は、脚部中位に1条の沈線を持つもの、裾径7.7cmを測る。

壺（225・226）　225は、直線的にやや外に開き、端部に外斜した面を持たせる口頸部。復元口径11.8cmを測る。226も同様、直線的に外開きになり、口端部外面に幅広で扁平な肥厚帯を形成するものである。

埴輪

円筒埴輪（227）　紫褐色の須恵質に焼成された口縁部片。口端部外面は横撫でされ、以下を斜め方向の刷毛目調整されている。

石器・石製品

石鏃（228）　緑泥片岩を素材とした、全長5.05cm、最大幅1.35cm、最大厚0.34cmの凹基式磨製石鏃である。不明瞭な稜が両側縁付近にある。重量3.40ｇを量る。

紡錘車（229）　陶石を素材としたもので、高さ2.9cm、上面径3.7cm、下面径4.4cm、孔径0.7cmを測るもの。現況で重量は27.20ｇである。

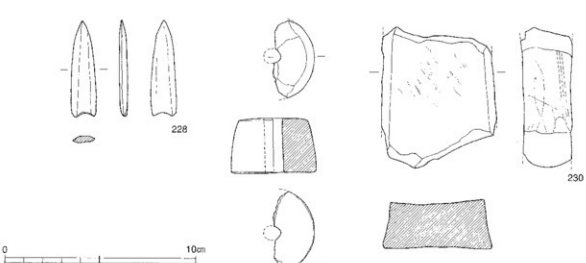


図55　ＳＤ２出土遺物（２）

砥石（230）　これも砂石を素材としたもので、幅6.0cm、厚さ2.6cmの方柱状の石材の、小口側は破損でわからないが、４面すべてを使っている。

ＳＤ３（図４）

ＳＤ１の南３～４ｍ付近で、ＳＤ１にほぼ平行に走る東西溝である。東端付近では、ちょうどＳＤ２を挟んで、北にＳＤ１、南にＳＤ３という配置になる。幅は1.5～３ｍと不整形で、深さは概ね25～30cmとなっている。東端で弥生時代の土坑ＳＫ６を切る。埋土は灰茶褐色系の砂質土で、底近くでは地山の黄色シルトをブロック状に取り込んでいる。氾濫により形成された小規模な流路のようなものであろう。建物ＳＢ11や12を切り、ＳＢ６に切られている。後述するように、縄文時代から中世に至るまでの遺物を出土しているが、中世の遺物264～269、334は、Ｓ12ｍＥ11ｍ直近の地点で折り重なるように出土しているので、明確に遺構として検出はできなかったが、本来この流路を切って上層から掘り込まれた柱穴内において行われた柱穴祭祀のような行為の痕跡と考えられる。

ＳＤ３出土遺物（図56～60）

縄文土器

深鉢（231）　緩く外反して、長めに延びる粗製深鉢の口頸部である。後～晩期のものであろう。

弥生土器

甕（232～247）　232は、断面三角形の突帯を口端に貼り付けて口縁とするもので、端面に刻み目を持つ。復元口径22.0cmを測る。口縁下には櫛描による沈線、その下位に刺突を施されている。233も232同様の貼り付け口縁を持つものであるが、無文で胴部の張りが大きい。234は、胴部上位から緩く外反しながら口頸部が立ち上がるもので、所謂西南四国型の甕であるが、胎土は在地のものに近い。復元口径25.6cmを測る。頸部下端に断面三角形の突帯が巡り、口端部の下面に刻み目を施されている。235は胴部上位、施文部の片で、上位に１条の沈線が確認でき、以下、刺突列点、４条沈線、２条単位の沈線で描かれた山形文、４条沈線の順となっている。これらはすべて中期初頭～前半のものである。なお、これらに近い時期の底部が、239～241の平底であると考えられる。236～238は後期の口頸部、238は口端部を僅かに欠くが、ほとんど端部に近いところまでの遺存である。242～247の底部が、これら後期のものと組み合う底部である。

壺（248～256）　248・249が中期初頭～前半のもの。248はラッパ状に開いた口縁の端面に沈線を１条施した後に端面を刻むもので、内面には口端に向かって弧状に延びる縦位の突帯と、これに行き当たる横位の突帯とがある。２条の横方向の半行突帯のうち、下位のものが方向を変え口端部に向かって注口状に開いた部分と思われる。249も端面に刻み目を持つ口縁部小片で、頸部に焼成前の２個一対の穿孔が施されるものである。250は、主に上方に拡張した口端面に浅い凹線を４条巡らせるもの。後期初頭頃の口縁部である。底部の大部分は中期初頭～前半頃のものと思われるが、234は凹線文系の壺と組み合っても違和感はない。

高坏（257）　脚部片であるが、裾が開き加減であるので、低い脚に深い鉢状の坏部が載るものと思われる。坏部との接合は充填である。前期末～中期初頭のものか。

土師器

鉢（258）　くの字状に開く口縁で、端部上面に面を持つ。器高の低い甕形の鉢になるものと思われる。復元口径27.0cmを測る。

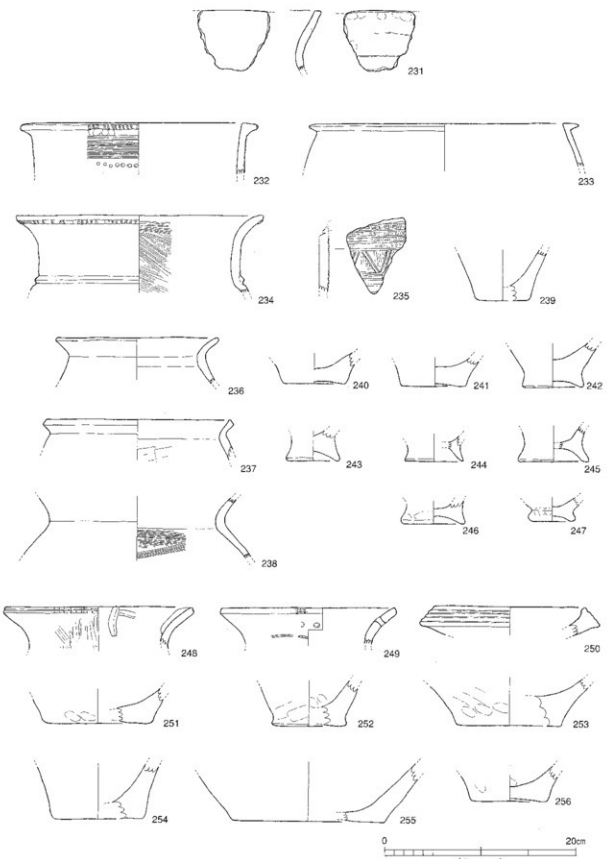


図56　ＳＤ３出土遺物（１）

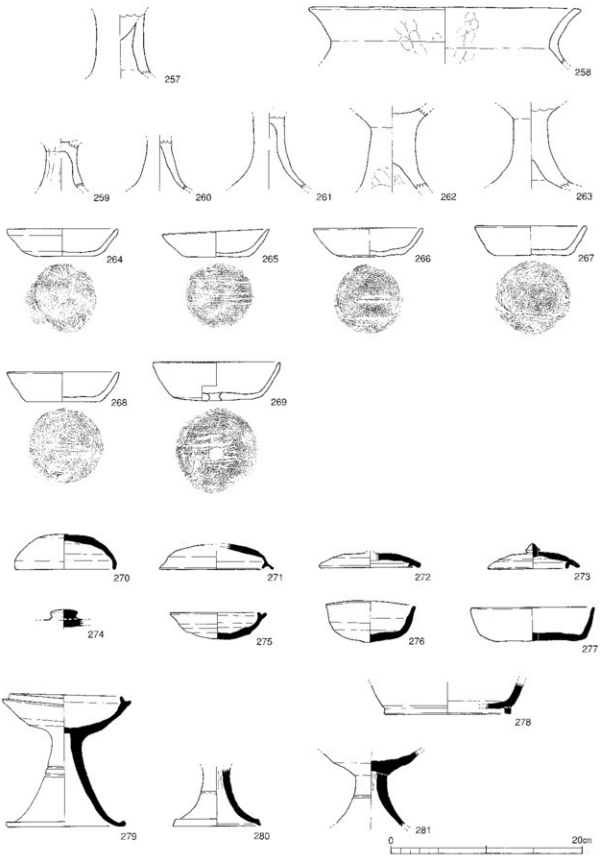


図57　ＳＤ３出土遺物（２）

高坏（259～263）　いずれも脚柱部の片である。中空で薄づくりの259～261と中実で大型の262・263がある。

坏（264～269）　後述の東播系須恵器捏ね鉢310とともに、溝内Ｓ４Ｅ３区の１ヶ所に折り重なった状態で出土しているので、溝を切った中世の遺構に伴っていた可能性が高い遺物群である。264～268は、器高2.9～3.1cm、口径11.0～11.4cmの間におさまる規格性のあるものである。底部は、回転糸切り離しで、板目圧痕が残るものが多い。269は、これらよりひとまわり大きく、器高4.0cm、口径13.2cmとなっているが、糸切り、板目圧痕といった特徴は他のものと同様である。底部中央に、焼成後の穿孔が両面から行われている。これら一群の坏は、14世紀代のものと考えられる。

須恵器

坏（270～278）　270の蓋は、器高3.7cm、口径10.3cm、椀を伏せた形態、ＴＫ217型式古段階相当のものである。271～273はＴＫ217型式新段階～ＴＫ46相当の蓋、271で復元口径12.0cm、272で10.2cmを測る。どちらもかえりが口縁端部よりも突出しないもので、特に272は天井が低い。273は、器高2.6cm、口径7.1cm、天井に宝珠形のつまみを持つ。かえりは、口縁端よりごく僅かに突出している。274は、蓋のhd平なつまみ部分の片、ＭＴ21型式相当のものである。身にはＴＫ217古～ＭＴ21型式くらいまでの間のものがある。275はかえりを持つ身で、器高2.8cm、口径8.2cm、非常に短い立ち上がり持つものである。276の身は、器高3.9～4.3cm、口径が7.7～9.2cmの間にあって焼け歪みが著しい。底部はヘラ切り未調整である。277もかなり歪んでおり、また底部も未調整のものである。278は、底部の最も外側に断面方形に近い中窪みの高台を貼り付けられるものである。

高坏（279～281）　279は有蓋高坏、器高14.0cm、口径11.6cm、脚裾径12.3cmを測る長脚のものである。脚部中位には２条の沈線を持つが、透孔はない。口縁部は短い立ち上がりが内傾して立ち上がり、脚裾端部は丸く収められている。ＴＫ209型式相当のものである。280・281は、ＴＫ217、あるいはＴＫ46くらいのもので、脚中位に１条の沈線がある。281は、二次的な被熱によるものか、淡い橙色の色調を呈している。

甕（282～285）　282は細頸の頸部～胴部上位の片、頸部中位と肩部に不明確な沈線が１条ずつ巡っている。283～285は胴部あるいは頸部～胴部である。283は、胴部から肩部が強く屈曲するもので、屈曲部に２条、胴部下位に１条の沈線を持ち、沈線間の施文帯に斜線文を施されている。284・285は283よりも屈曲が鈍く、肩部に１条の沈線のみが施されるものである。ＴＫ209～217型式相当のもの。

壺・甕（286～297）　口頸部片のうち、端部を単純に丸く収めるもの286、外面に肥厚し、玉縁状に仕上げるもの287、外面に薄い突帯を貼り付けるもの288～292や、その他の単純に面を持って収められるものがある。このうち289の外面突帯には沈線が２条巡っている。また、288・289、291～293の口端部は、内面に突出する形態となっている。292の頸部内面には、ノの字状のヘラ記号がある。296は、ヘラ切りの平底になる壺底部、297は高台もしくは脚台付の壺底部である。297の内底面には工具による押圧裏が顕著である。これらは、概ねＴＫ209型式以降、296は８世紀代まで降るものと考えられる。

鉢（298～300）　298・299ともに下膨れの器型の鉢、299で器高15.8cm、復元口径19.0cm、胴部最大径25.8cmを測る。胴部中位よりやや上位に１条の沈線が巡っている。口端部は内側に傾いた面をなす。灰白色の軟質な焼成である。298もやや小さいが同様の器型になる鉢の口縁部～胴部の片である。300は頸部でややくびれて外上方に短く開く口縁部を持つものである。これも外面は灰白色の色調を呈し

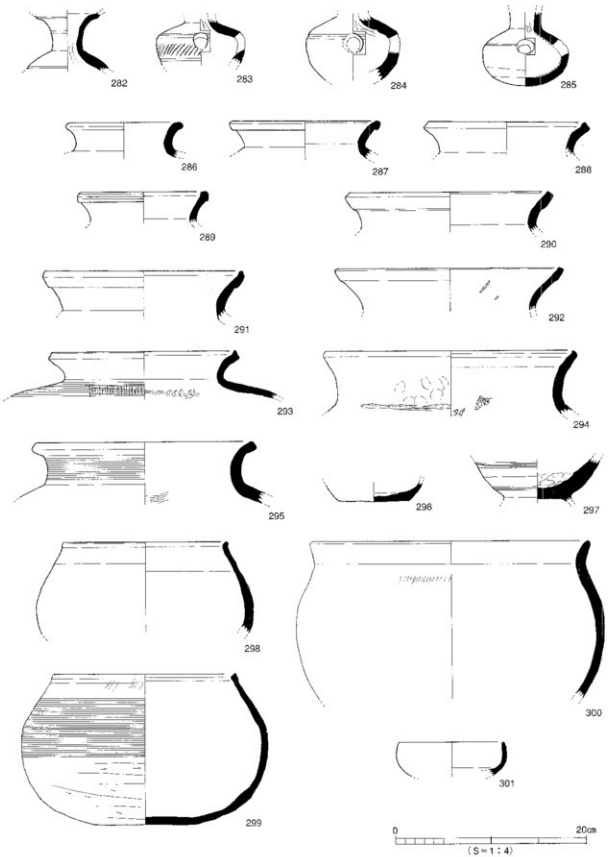


図58　ＳＤ３出土遺物（３）

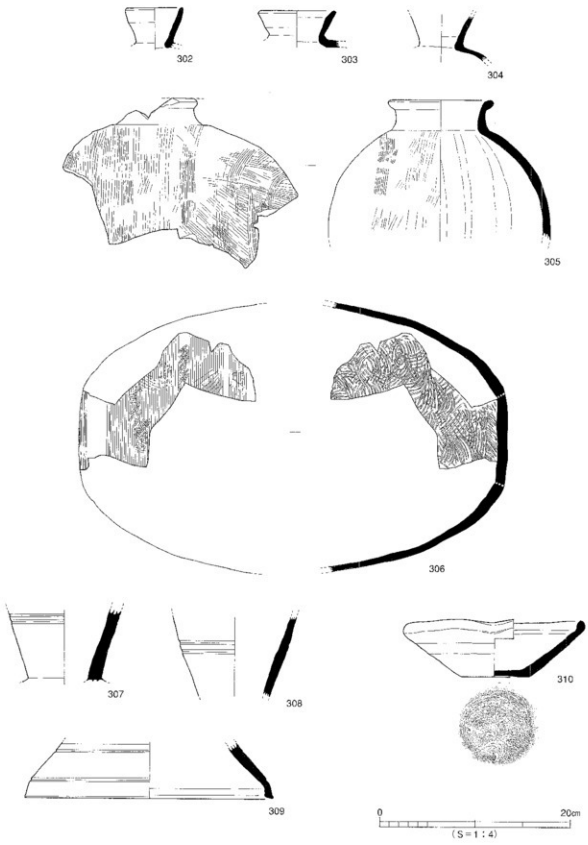


図59　ＳＤ３出土遺物（４）

ているが、内面は淡い橙色で、軟質の焼成である。これらの鉢はＴＫ217あるいはＭＴ21段階相当のものと思われる。

椀（301）　復元口径11.0cmを測る椀形のもの。

平瓶（302～304）　平瓶の口頸部３点。302は、若干内湾気味に外上方へ開くもの、提瓶であるかもしれない。303は、復元口径7.4cmとやや大ぶりなもので、短めの口縁部が直線的に開いている。304は口端部を欠くが、302同様内湾気味に開くものである。7世紀代のもの。

横瓶（305・306）　305は、復元口径10.2cmを測る上半部の片。口端部は玉縁状に丸く収めている。外面はタタキの後カキ目調整されており、内面は同心円タタキを工具により撫で消している。灰白色の軟質焼成である。306は、胴部の円板充填部分付近の片で、反転図化している。この個体の外面も、タタキの後カキ目調整されているが、内面のタタキはそのままである。７世紀前半のものか。

捏ね鉢（307・308）　307は、底部付近の片で、胴部から底部への屈曲が外面に、また内面底部への変換が僅かに見てとれる。外面に２条の沈線が確認できる。308も底部に近い胴部片で、307に比べて華奢なつくりである。外面にやはり沈線が２条巡っている。

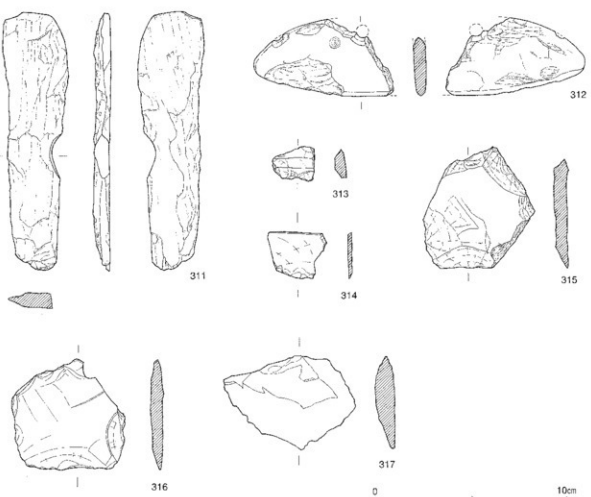


図60　ＳＤ３出土遺物（５）

脚台（309）　脚付壺、もしくは器台の脚端部片。端部近くで内湾し、外端部で接地する。外面に2条の沈線が確認できる。6世紀後半のもの。

片口鉢（310）　器高6.0cm、口径18.0cm、底径6.9cm、東播系の鉢である。回転糸切りによる平底から外上方に直線的に開く体部、口端部は外面に鈍い稜を持って内側に傾く面をなし、内面にも稜を持って上方に立ち上がっている。酸化炎焼成により灰黄色～橙色の色調を呈している。14世紀後半のものである。

石器・石製品

石斧（311）　抉入柱状片刃石斧の剥片で、基端部後主面寄りの一部、および抉りの部分が生きている。緑泥片岩を素材としている。

石庖丁（312）　緑泥片岩を素材とした杏仁形石庖丁、穿孔部で破損している。穿孔は両面から行われ、片面には未貫通の穿孔痕がある。

剥片（313～317）　313・314が赤色頁岩、315・316がサヌカイト、317は安山岩のそれぞれ剥片である。

ＳＤ４（図４）

A区北東部で、ＳＢ１の柱穴Ｐ４や後述する溝ＳＤ５に切られて検出された幅40～50cmの溝で、深さが4～5cmと浅く、途切れながら北東から南西方向に走るもので暗灰褐色の粘質土を埋土としている。

ＳＤ４出土遺物（図61）

須恵器

坏（318）　口径11.0cm、薄い立ち上がりが内傾して低く延びるもので、底部は回転ヘラ削りされている。ＴＫ209型式相当のものである。

図61　ＳＤ４出土遺物

ＳＤ５（図４）

ＳＤ４を切る東西溝で、A区東端から西へ32m分検出された。幅は40～50cm、深さは15cm程度のものである。弥生時代の土坑ＳＫ５やＳＫ７を切り、建物を構成しない柱穴群に切られている。

ＳＤ５出土遺物（図62）

図62　ＳＤ５出土遺物

土師器

甕（319）　復元口径20.0cmの口頸部片である。くの字状に折り曲げられた口縁部は、端部を尖り気味に丸く収められている。口縁部外面には、横撫でと押圧によって形成された鈍い高まりが巡っている。

椀（320）　手づくねで成形されたと思われるボウル状の椀。甕とともに古墳時代中期頃のものと考えられる。

須恵器

平瓶（321）　部分的な破片のため反転してシンメトリーに描いているが、形態からすると、平瓶の頸部～肩部であると思われる。

坏（322）　復元口径12.2cmの坏身片である。比較的分厚く短い立ち上がりが内傾して立ち上がっている。平瓶とともに、ＴＫ209型式相当のものであろう。

ＳＤ６（図４）

Ａ区南端付近で検出された幅１ｍの東西溝で、Ａ区東端から西へ16m付近で消滅する。ＳＤ３と同じ土で埋まっており、やはり氾濫に伴う小規模な流路であったものと思われる。

ＳＤ６出土遺物（図63）

弥生土器

壺（323・324）　323は有文壺の肩部片、櫛描により対向する斜線文で山形を描き、これらの山形の下端に横方向の施文を加え、三角形状の文様を描いている。工具は７本単位である。324は、比較的大型の壺底部である。

甕（325・326）　甕の底部には325のようなくびれを持った平底、326のような平底がある。

鉢（327）　脚裾径7.0cmを測る低脚の脚付鉢脚部である。高坏としてもよいかもしれない。脚裾部は手づくねで成形され、裾端部を下方にやや肥厚させている。これらの弥生土器は前期末～中期初頭のものである。

土師器

高坏（328～330）　脚部片３点がある。328では、裾径11.4cmの脚裾が明確な稜を持たずに広がる形態をなしている。柱部は中実となっている。同様に330の柱部も中実であるが、329では中空となっている。詳細な年代は決め難いが、概ね古墳時代前～中期のものであろう。

甕（331）　復元口径27.1cmとなっているが、破片のためやや数値は不明確である。内湾しながら立ち上がり、端部に丸みを帯びた面を持つものである。古墳時代中期のもの。

須恵器

坏（332～335）　蓋332は、口縁部と天井部の境に稜を持つもので、やや外開きになる口縁は、端部に僅かに傾いた中窪みの面をなす。復元口径13.4cmを測る。ＴＫ47型式相当のものである。333は、復元口径10.2cmを測る身の口縁部片で、内傾した短い立ち上がりを持つ。ＴＫ217型式相当。334・335は身、334で器高3.4cm、口径9.3cmを測る。外底面はヘラ切り後、切り離し痕を撫で消されている。335は器高3.0cm、口径8.5cm、これも切り離し痕を撫で消されている。底部と体部の境に沈線を１条施されている。ＴＫ46型式相当の遺物である。

高坏（336・337）　336は長脚、337が低脚のもの、337で裾径9.1cmを測る。裾端部は内側に傾いた

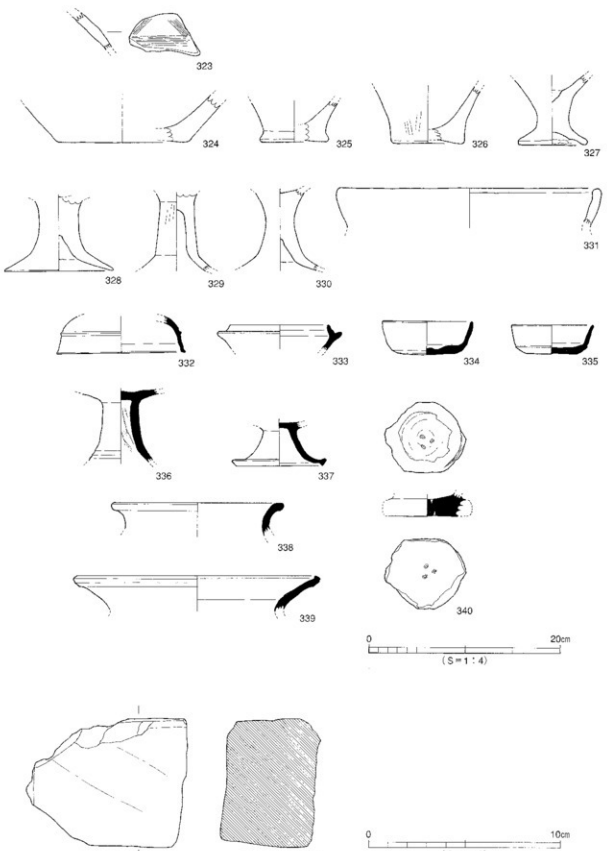

323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
0
20cm
(S=1:4)
341
0
10cm
(S=1:2)

図63　ＳＤ６出土遺物

面をなし、端部を下方に拡張している。これらもＴＫ46型式相当のものと考えられる。

甕（338・339）　両者ともに口縁部の小片、338は端部外面を玉縁状に肥厚するもので、乳白色に焼成されている。339は口端部外面に薄い突帯を貼りつけて肥厚するものである。

捏ね鉢（340）　底部の一部と考えられる片で、厚さおよそ２㎝の粘土板に内外面から３箇所ずつの貫通しない刺突を施している。内面には体部立ち上がりの痕跡が破損痕として残っている。

石製品

砥石（341）　陶石製の砥石、方柱状石材の３面を砥面として用いている。

ＳＤ７（図４）

ＳＤ３から南西へ分岐し、蛇行しながら一旦消滅したＳＤ６の西延長線上に８ｍ程度延びた後消滅する溝で、ＳＤ３・６と同様の埋土である。これらの溝は、本来一連の流路であったものと考えられる。遺物の出土はなかった。

（４）柱穴出土の遺物（図64・65）

建物を構成しない柱穴出土の遺物をここで扱っておく。

弥生土器

壺（342～344）　Ｐ60出土の口頸部片342は、筒状の短い頸部を経て、口縁部が短く開くもの。端部に外下方に傾いた平坦面を持つ。343・344は、Ｐ101出土。343は、胴部上位～頸部下位の片で、頸部には上から細く薄い突帯１条、４条の櫛描沈線、列点文が施され、やや間隔を空けた肩部に列点＋７条櫛描沈線＋列点、さらに間隔をおいた胴部上位に列点が２個だけ観察できる。344は、やや中窪みの底部片。これら３点の壺は前期末～中期初頭のものである。

甕（345・346）　Ｐ53出土の345は、復元口径17.6㎝を測る口頸部片、口径が胴部最大径を凌ぐ器型で、緩く折り曲げられた口縁を持つ。前期末のもの。346はＰ222出土。頸部に圧痕文突帯を持ち、内面に鈍い稜を持って口縁部が外上方に折り曲げられるものである。口端部は強く横撫でされて、中窪みの平坦面をなす。胴部外面はよく磨かれている。復元口径30.6㎝を測る。中期後葉のもの。

蓋（347）　器高8.4㎝、裾部径22.6㎝を測る甕蓋で、Ｐ199の出土である。比較的低い天井から外反しながら裾部が大きく開く。天井は、直径5.6㎝のやや突出した平坦面をなす。

須恵器

坏（348～350）　348はＰ101の出土の蓋、器高3.4㎝、口径9.6㎝を測る。天井部外面は、ヘラ切りの後撫でられた平坦面をなす。349はＰ88出土、器高3.6㎝、復元口径9.0㎝の身である。350はＰ21出土の身、器高3.3㎝、復元口径10.0㎝の図にしてあるが、若干歪んでいる。外底面はヘラ切り未調整である。これらは、およそＴＫ217型式相当のものである。

高坏（351）　Ｐ21出土の有蓋高坏坏部である。若干内傾気味の口縁部は、端部がやや外反し、端部は段を持った内傾する面をなす。脚部の透かしは３方向である。ＴＫ47型式段階相当。

蓋（352）　Ｐ162出土、短く外反する口縁部を持つ短頸壺蓋。

壺（353・354）　353は、Ｐ42出土の直口壺もしくは甕の口縁部小片、Ｐ42出土。口端部を少し下った外面に断面三角形の細い突帯が巡っている。354は、短頸壺口縁部、Ｐ68出土。小片のため、口

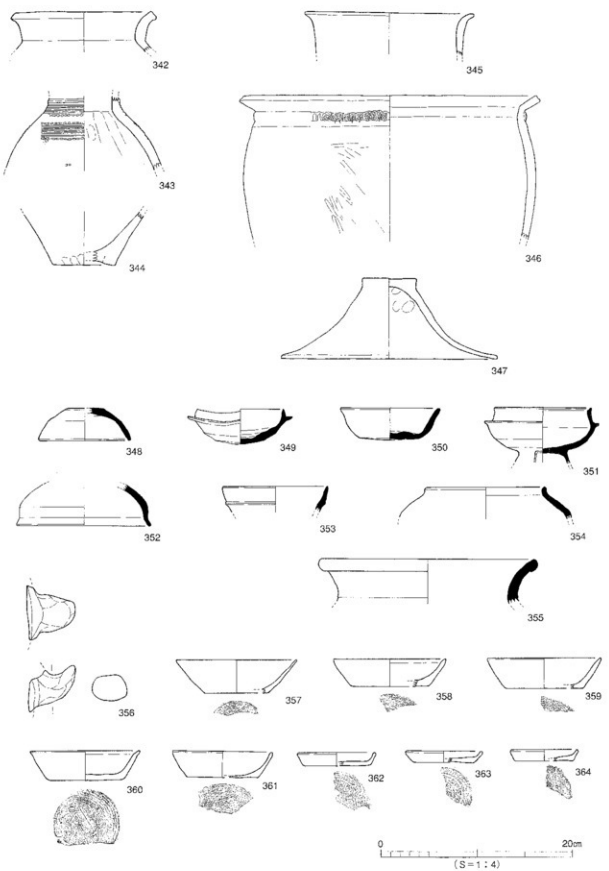

342
345
343
346
344
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
0
20cm
(S=1:4)

図64　柱穴出土遺物（1）

径には若干の不安がある。

壺（355）　P66出土口縁部片。口端部外面に突帯を貼り付け、下縁状に肥厚している。

土師器

甑（356）　P150出土の把手片。胴部側面に挿入して接合した痕跡がある。

坏（357～361）　後述の皿とともにP122でまとまって出土したもので、皿を含めていずれも精良な胎土を用いて硬質に焼成されている。切り離しの後撫でられているので不明瞭だが、最も残りのよい360を観察すると、底部回転糸切りのようである。357のみは、他に比べて体部の傾きが大きく、そのぶん口径が大きい。残りの4点は器高2.7～3.2cm、口径10.4cm～11.8cm、底径7.4～8.0cmの間にあって、体部が大きく傾かないものである。

皿（362～364）　器高1.2～1.4cm、口径7.0～7.9cm、底径6.0～6.7cm、底部回転糸切りと思われる皿、362は赤色塗彩されている。上述の坏とともに14世紀代のものであろう。

石器・石製品

敲石（365）　P125出土の破損品。横断面楕円形の安山岩転石を磨いたうえで、敲打に使用しており、側面を含めた各面に敲打痕がある。

石斧（366）　小型のノミ形石斧である。緑泥片岩を素材としており、一部破損しているが、刃部は生きており、均整に刃付けが行われていることがわかる。P88出土。

石鏃（367）　逆刺部の一部を欠く二等辺三角形鏃。僅かな凹基となっている。現況重量0.70ｇを量る。

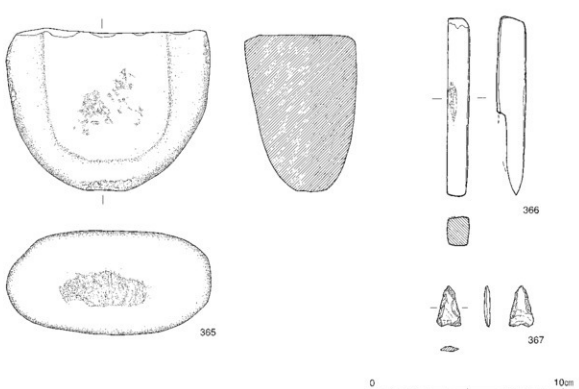


図65　柱穴出土遺物（2）

（5）包含層出土の遺物

A区包含層出土の遺物を、東西・南北の中軸ラインを基準に四分して記述する。

a．ＮＥ区出土遺物（図66・67）

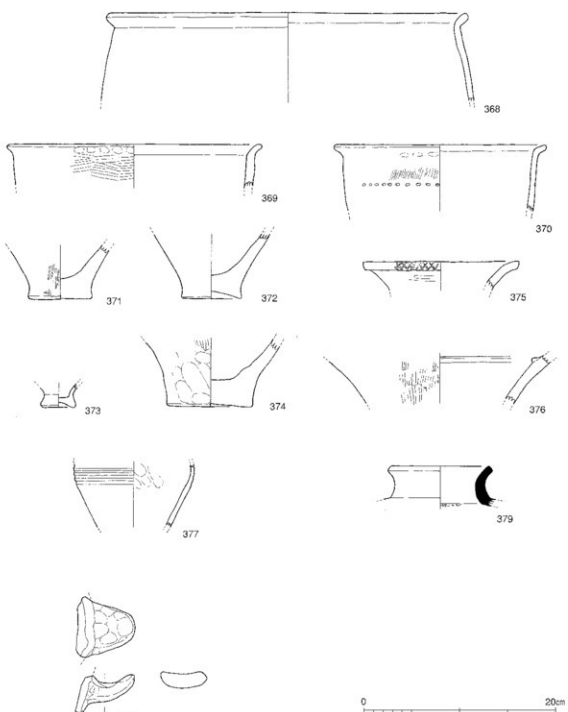


図66　ＮＥ区出土遺物（1）

弥生土器

甕（368～374）　口頸部３点ともに短い折り曲げ口縁を持つものである。368・369は、それぞれ復元口径37.2cm、25.9cmの無文のもので、369は外面を横方向の粗い刷毛目で調整されている。370は口径21.7cm、頸部下に横長の刺突が２段、胴部外面に板撫で調整が施されている。前期末～中期初頭のものである。底部には371や374のような平底、372のような窪み底、373のようなくびれの上げ底がある。373は鉢、374は壺底部になるかもしれない。

壺（375・376）　375は中期中葉の口縁部で、拡張しない口端面にヘラ描斜格子文を持つ。376はこれよりやや遡るもので、口縁部内面突帯を持っている。

高坏（377）　中期後葉の凹線文系深椀形の高坏片。

土師器

鍋（378）　板状に成形された把手片、７～８世紀代のものか。

須恵器

壺（379）　細めの頸部から口縁部が短く外反する口頸部片。口端面は平坦な面をなす。

石器・石製品

石庖丁（380）　穿孔部の破片、緑泥片岩製。

砥石（381）　陶石を素材とした方柱状の砥石片。傷面４面ともに使用されている。

磨石（382）　安山岩の転石の全面を磨いている。端部の一方は擦りに用い、もう一方の端部側面

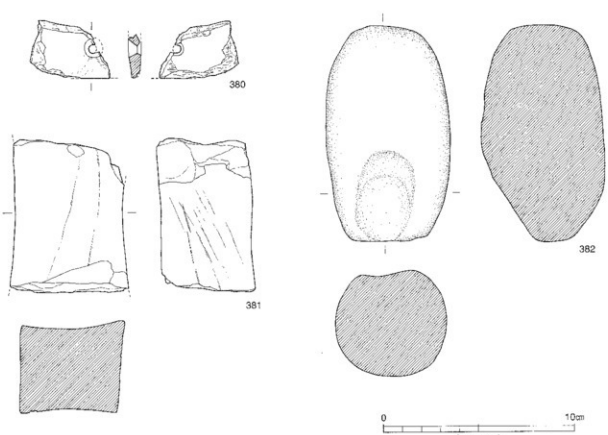


図67　ＮＥ区出土遺物（２）

には敲打痕がある。また、敲打痕の裏面には長軸方向の擦りによる窪みがある。

b．NW区出土遺物（図68）

弥生土器

甕（383・384）　383は、短く屈曲する口縁部を持つもので、口端部に平坦な面を持つ。後期のもの。384は、くびれの上げ底になる底部。中期後葉～後期前葉。

壺（385）　平底の底部、前期末～中期初頭頃のものか。

土師器

椀（386）　器高3.0cm、復元口径8.4cmの小型の椀である。

須恵器

坏（387～389）　身２点のうち、387は復元口径13.0cmになるもの、比較的短く内傾する立ち上がりを持つ。ＴＫ43型式併行。388は、復元口径10.2cm、非常に短い立ち上がりを持つもの、ＴＫ217型式併行。蓋389にはつまみの痕跡がある。内面のかえりは、犬井部よりも僅かに突出している。ＴＫ46併行。

高坏（390・391）　有蓋高坏390は、口径14.9cmを測るもの、坏387同様の立ち上がりを持つ。坏底

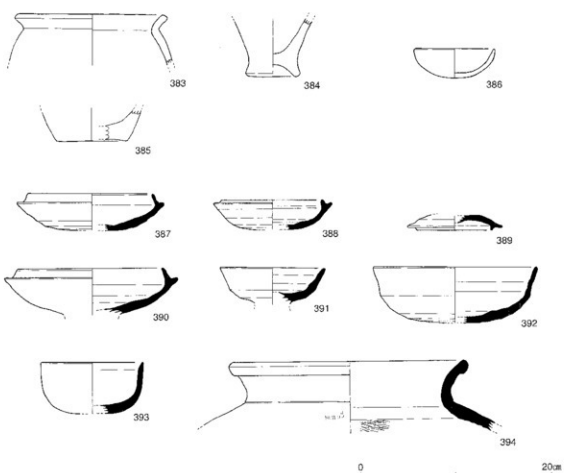


図68　ＮＷ区出土遺物

部には透孔の痕跡が１個所だけ確認できる。ＭＴ85型式併行。391は、復元口径10.8cmの無蓋高坏で、坏部が単純に開くもの。ＴＫ46併行。

椀（392・393）　392は、復元口径17.0cmの椀。外底部は全面削られている。393は、丸みをおびた底部に直上に立ち上がる体部を持つものである。

甕（394）　口端部を玉縁状に肥厚する口頸部片。

ｃ．ＳＥ区出土遺物（図69）

弥生Ⅰ器

壺（395・396）　395は胴部上位の片、横方向の沈線３条の上下に竹管文と複線鋸歯文を配したも

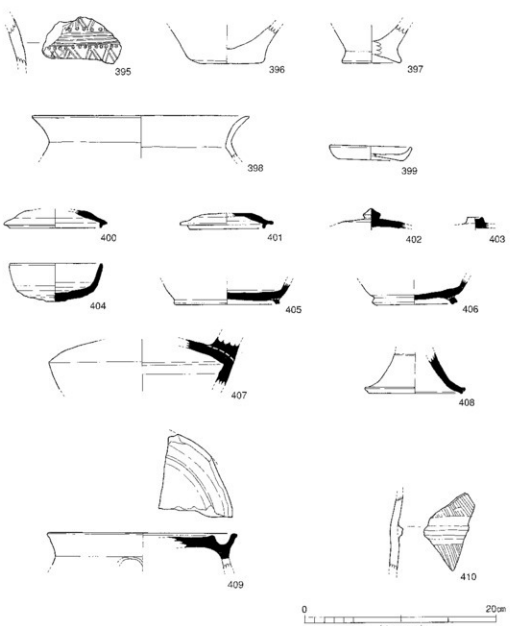


図69　ＳＥ区出土遺物

の。396は平底の底部、両者ともに前期末～中期初頭のものであろう。

甕（397）　くびれを持った、僅かな上げ底の底部。二次的に被熱している。後期前半のものか。

土師器

甕（398）　口頸部の小片であるので、口径にはやや不安がある。比較的薄いつくりで、単純に外反するものである。

皿（399）　底部回転糸切りと思われる皿、器高1.5cm、口径8.5cmを測る。

須恵器

坏（400～406）　400・401は、内面にかえりを持つ蓋でつまみを欠く。402は、宝珠形のつまみ部分で、いずれもＴＫ46併行のものである。403は、つまみとして図化しているが、正体不明の中窪みの突起を持つ破片。404は、器高4.0cm、口径9.5cmの身で、400～402に組み合うもの。外底面の切り離し痕は未調整である。405・406は、ＭＴ21以降の有高台坏身である。

平瓶（407）　把手を持つ平瓶の破片で、稜を持って屈曲する体部の稜に接して把手が貼り付けられている。８～９世紀のもの。

高坏（408）　端脚無蓋高坏の脚裾部。中位に１条の沈線を持つ。ＴＫ46併行。

硯（409）　復元硯面径19.2cmを測るもの。脚部上端に円孔の一部が観察できる。

埴輪（410）　明灰色の須恵質に焼成された埴輪片、円筒埴輪と思われる。幅狭の中窪み、断面台形状の突帯を持つ。外面の調整は粗い斜め方向刷毛目の一次調整のみである。

ｄ．ＳＷ区出土遺物（図70・71）

弥生土器

壺（411・412）　411は、直立気味に外反する短頸の口頸部、復元口径21.0cmを測る。412は、頸部に多条の沈線文、口縁部内面に圧痕文突帯が１条巡るものである。頸部沈線は８条まで数えることができる。前期末～中期初頭のものである。

甕（413）　窪みを持つ底部片。

土師器

甕（414・415）　414は、古墳時代中期以降の甕、胴部は球形に近いものと考えられる。415は、古代の長胴甕の口頸部片である。

甑（416・417）　２点ともに古墳時代中期頃のもの。416は、小型の甑もしくは鉢の口縁部と思われもので、内面に塗り土による橙色の塗彩がある。417は甑の把手である。

椀（418）　これも古墳時代中期頃と思われる椀の破片である。

坏（419）　平安時代の円板高台坏の底部片。

埴輪（420）　円筒と思われる須恵質埴輪の片。外面は紫を帯びた灰色の色調を呈する。突帯の形状は410と同様であるが、部分的に潰れているところもある。外面の刷毛目も410同様に粗い。円孔が一部確認できる。

須恵器

坏（421～433）　421～423は身を伏せたかたちの蓋、復元口径9.6から12.6cmになるものである。421・422では天井部ヘラ切り未調整であるが、423では天井部の周縁を軽く削っている。概ねＴＫ217併行のものである。424～426は内面にかえりを持つ蓋で、426では不明であるが、424が宝珠形、425

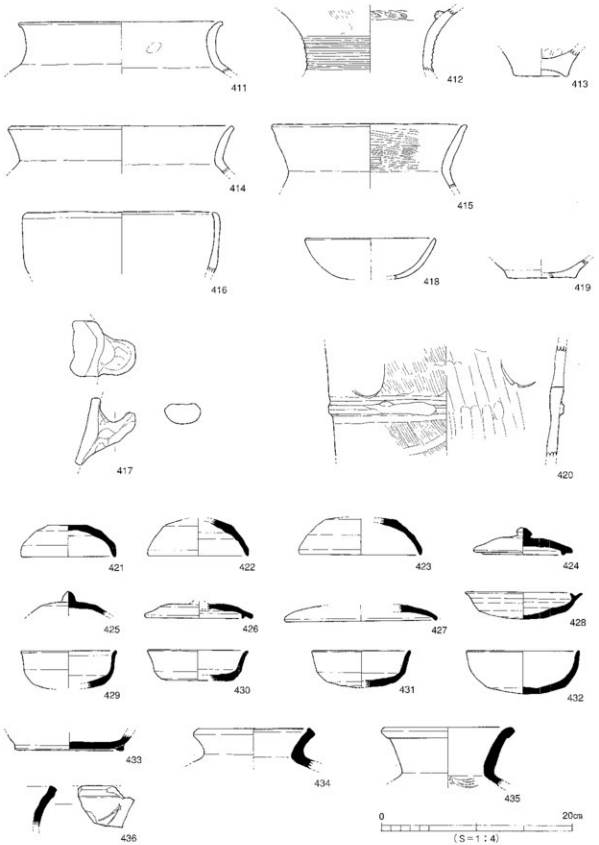


図70　SW区出土遺物（1）

が乳頭状のつまみを有するものである。ＴＫ46併行のもの。427はかえりを持たない壺である。428は、非常に短いかえりを持つ身。429～431の身はかえりを持たないもので、いずれもＴＫ217～46併行のものである。433は、高台を持つ身の底部ＴＫ21以降のもの。

壺（434～439）　434は口端部が内方にやや突出する短い口頸部、435・436は外面に薄い肥厚帯を持つ口頸部で、436の外面には松葉状のヘラ記号がある。長頸壺437は貼り付け高台を持ち、肩部に稜

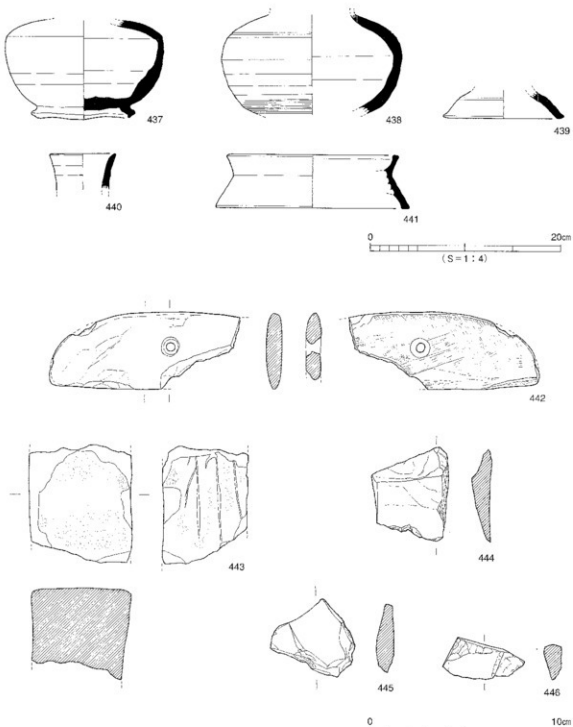


図71　ＳＷ区出土遺物（２）

を持って屈曲するものである。438は短頸壺胴部、肩部に1条の沈線が施されている。439は脚台付の壺脚端部で、ハの字状に開き、端面全体で接地する。屈曲部に1条の沈線を持つ。

瓶（440）　提瓶もしくは平瓶のものと思われる口頸部片、復元口径6.6cmを測る。

硯（441）　器高5.6cm、復元硯面径17.2cmを測る円面硯。外縁のみで、磨墨部は剥離欠損している。

石器・石製品

石庖丁（442）　緑泥片岩を素材とした直線刃半月形の石庖丁。穿孔は両面から行われ、刃部も両面から均等に研ぎ出されている。

砥石（443）　陶石製の方柱状砥石片。生きている3面はすべて使用されており、うち1面には鋭い尖端部を研いだ痕跡が3条認められる。

剥片（444～446）　すべてサヌカイトの剥片である。

（6）攪乱出土および表採遺物

a．攪乱出土遺物（図72）

N 4 mW15.5mで検出され、調査当初ＳＫ８と遺構番号を振られていた穴は、新しい段階で掘り込まれた攪乱であることがわかり、土坑番号として欠番になっている。この攪乱に投げ込まれたような状況で、須恵器の甕が出土、また、攪乱埋土から弥生土器の小片が出土しているので、ここで扱う。

弥生土器

壺（447・448）　447は、沈線と刺突を組み合わせた施文を持つ胴部小片。ヘラ描沈線が5条まで、その下位に横長の刺突が1段確認できる。448は、平底の底部小片、いずれも前期末頃のものである。

須恵器

甕（449）　上半部を欠くもので、底部に歪みがみられる。外面には叩き目の後、横方向のカキ目を施している。

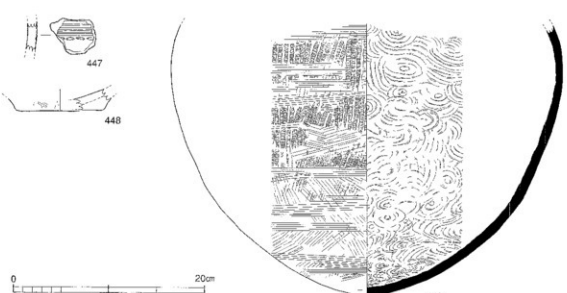


図72　攪乱出土遺物

b．表採遺物（図73）

弥生土器

甕（450）　平底で、比較的薄くつくられた底部。中期のものである。

須恵器

坏（451～455）　451・452は、古墳時代タイプの身で、いずれも口端部に段を持つ。ＴＫ10型式併

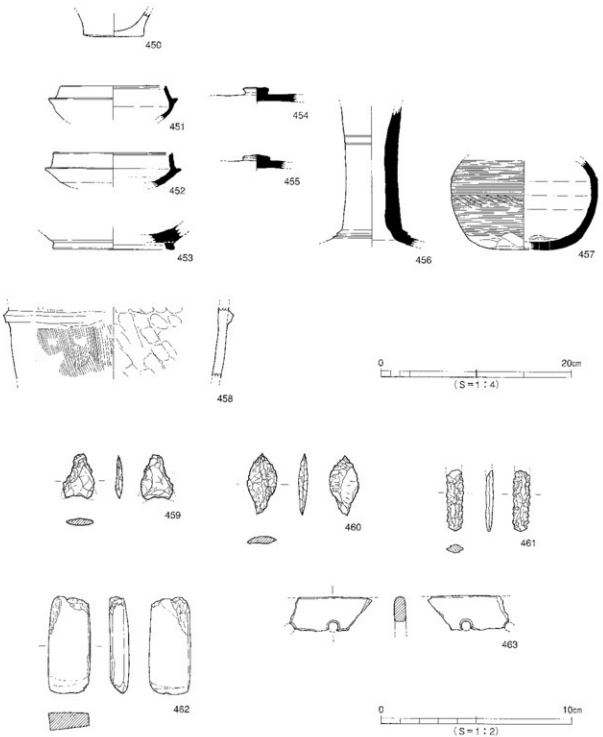


図73　表採遺物

行。453は、貼り付けの輪高台を持つ身で、454・455はこれと組み合う段附の蓋である。

壺（456・457）　456は、大型の長頸壺頸部中位～基部の片で、頸部に２条の沈線、基部には削り出しによる２段の段を持つ。457も長頸壺と思われるものの胴部片で、中位に２条の沈線、これからやや離れた下方にヘラ描斜線文が施されている。外面底部を除いてカキ目調整が顕著である。

埴輪（458）　須恵質に焼成されたもので、外面が淡い赤褐色、内面や断面は灰色の色調を呈している。突帯はやや中窪みの低い台形断面をなす。調整は、斜め方向の一次調整のみである。

石器

石鏃（459・460）　２点ともにサヌカイト製。459は凹基無茎式で、両端の逆刺部ともに一部欠損している。全長2.3cm、現況での重量1.48ｇとなっている。460は、平面径木の葉形の凸基無茎式鏃、全長3.3cm、最大幅1.6cm、重量1.8ｇを測る。

石錐（461）　サヌカイト製の錐部片で、横断面菱形をなす。

石斧（462）　緑泥片岩を素材とする扁平小型の加工斧。基部を破損しているが、僅かに基端部が生きている。刃部は、片面に偏って作り出されている。全長5.1cm、幅2.2cm、厚さ9.0cm、重量20.4ｇ。

石庖丁（463）　直線的な形態の背部片で、穿孔が１ヶ所確認できる。緑泥片岩。

２．B区の調査

冒頭でも述べたように、B区はA区の西に隣接した水田で、A区水田より約0.3m低くなっている。このため、A区北半で検出されたような土坑、建物等の遺構は既に削平されているものと思われ、検出されることなく、この調査区で検出されたのはA区南半と同様の、古代の氾濫により形成された流路と考えられる溝状遺構のみであった。

（１）溝

ＳＤ101・102・103（図４）

A区のＳＤ３に続く流路と考えられる溝であるが、削平され不整形の底近くのみしか残っていないため、幅の狭い３本の溝として検出された。灰茶褐色の砂質土で後述する南北方向の溝ＳＤ104に合流するように消滅する。遺物はそれぞれの溝ごとに採りあげたが、ＳＤ102からの出土はなかった。

ＳＤ101出土遺物（図74）

弥生土器

甕（464）　くびれの上げ底の底部片、中期後半のもの。

須恵器

壺（465）　脚台付壺の底部と脚台の接合部片で、脚台内面に「＋」字状のヘラ記号がある。

甕（466）　長頸細頸の甕、胴部下半と口縁部を欠く。胴部中位の上段に２条、下段に１条の沈線、沈線間の施文帯に櫛状工具の先端による列点文を施されている。ＴＫ43～209併行のもの。

石製品

剥片（467）　赤色チャートの剥片。

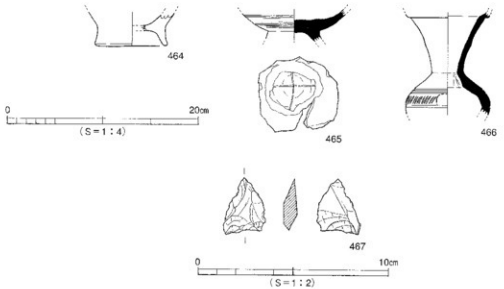


図74　ＳＤ101出土遺物

ＳＤ103出土遺物（図75）

須恵器

坏（468・469）　宝珠つまみを持つ蓋468は、器高2.8cm、天井部径10.4cmを測る。直径8.0cmのかえりは下方に突出している。身469はかなり歪んだもので、底部ヘラ切り後軽く撫で調整されている。両者ともにＴＫ46型式併行のものである。

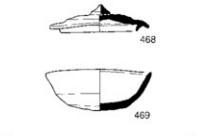


図75　ＳＤ103出土遺物

ＳＤ104（図４）

先述の３条の溝と合流する南北溝で、灰茶褐色の砂質土で埋まっている。

ＳＤ104出土遺物（図76）

土師器

ミニチュア土器（470）　手づくねによる椀形土器で、器高3.1cm、口径3.5cmを測るもの。

須恵器

坏（471～474）　蓋471は、器高4.3cm、復元口径13.4cm、天井部、口縁部境に沈線を持つものである。口縁面に段を持ち、天井部の３/４を回転ヘラ削りされている。ＴＫ10型式併行。472は復元口径10.3cmを測る蓋、473は復元口径10.0cmの身、いずれもＴＫ217型式併行のものである。474には歪みがみられる。底部は未調整、ＴＫ46型式併行の身。

高坏（475）　器高8.2cm、口径10.9cm、脚裾径6.9cmを測る完形品で、低い脚に大きめの坏部を有するものである。坏部には沈線を１条持つ。

甕（476）　長頸細頸の甕、底部はヘラ切り後撫でられた平底で、「Ｘ」字状のヘラ記号が施されている。胴部には上下１条ずつの沈線間に斜線文、また頸部にも基部の２条沈線の上位に斜線文が施さ

れている。

壺（477）　肩部に稜を持って屈曲し、口頸部が外上方に開く広口壺。底部には輪高台が貼り付けられている。頸部には１条の沈線が巡っている。８世紀代のもの。

甕（478）　器高45.2cm、復元口径18.0cmの甕である。底部が大きく歪んでいるが、ほぼ球形に近い

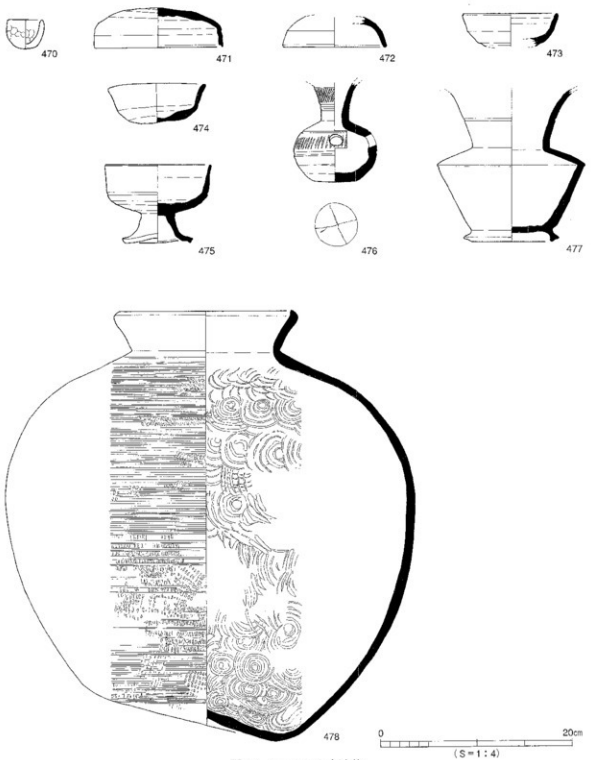


図76　ＳＤ104出土遺物

胴部と、短く直線的に外開きになる口縁部形態をなす。口端部は上方に引き上げるように処理されている。

ＳＤ105（図４）

ＳＤ104の西で検出された幅広の流路で、上層に灰茶褐色砂質土、下層に灰黄色の砂が堆積している。北から南へ流れた後、調査区南部で西方向へ屈曲している。

ＳＤ５出土遺物（図77・78）

弥生土器

甕（479～484）　479は、貼り付け口縁の甕口頸部で、頸部に沈線が７条まで確認できる。口端部に刻み目はない。前期末～中期初頭のもの。480は、凹線文系の甕口頸部、水平に近く屈曲した口縁部は口端部をつまみあげて上方に拡張し、端面に１条の凹線を施されている。中期後半。481は、水平に貼り付けた断面三角形の口縁とその直下に断面三角形の突帯を持つ小片、中期中葉のもの。482は、緩く折り曲げた頸部に圧痕文突帯を貼り付けられるもの、後期初頭のものである。485は、単純に折り曲げた口縁で、無文のもので、後期後半の甕。483・484は、前期末～中期初頭の平底の底部である。

壺（486～492）　486はラッパ状に大きく開く口縁部片、胎土に大きめの長石粒を多く含むところからすると、前期末～中期初頭のものか。487は、器型のわりに大きな平底、砲弾形の胴部に短い直口縁を持つ小型品である。頸部直下から胴部中位にかけて櫛描による３段の沈線を施し、その間の２区の施文帯に波状文を描いている。また、これらの施文の下位に刺突列点文が巡る。口縁部中位には１ヶ所だけに焼成前の穿孔が行われている。中期初頭のもの。488～491は、前期末～中期初頭の平底の底部、492は後期のもの。

高坏（493）　坏口縁部片。水平な面をなす口端部は内外面、特に内面に肥厚する。中期中葉。

土師器

甕（494）　復元口径21.4cmを測る口頸部。口縁部外面に横撫でによる膨らみがある。口端部は外反り気味に丸く収めている。５世紀代のもの。

壺（495）　口頸部片、494の甕同様の横撫でによる膨らみが外面にある。口端部は僅かに内面に肥厚し、端面には横撫でによる窪みがある。５世紀代のものであろう。

高坏（496）　低脚高坏の脚部片。

甑（497～500）　497は、直上に立ち上がる口縁部。498は単孔平底の底部で、端部は内外面から斜めに面取りされている。499・500は把手である。いずれも５世紀。

鉢（501）　手づくねの椀形を呈するもの、器高4.0cm、口径7.0cmを測る完形品。

土製品

土錘（502）　棒状土錘の半裁品で、一方の穿孔だけが確認できる。現況重量8.5ｇを量る。須恵器

坏（503～507）　503は、復元11.2口径cmを測る蓋で、口縁、天井部境に稜を持つもの。口端部は内面に段を持つ。ＴＫ47型式併行。504は短いかえりを持つ蓋、天井部径10.0cmを測る。つまみは剥離欠損している。ＴＫ46型式併行。505～507は、ＴＫ209型式併行の内傾する短めのかえりを持つ身である。ほぼ完形の505は、器高4.0cm、口径11.6cmを測るもので、底部はヘラ削りされ平底に近くなっている。

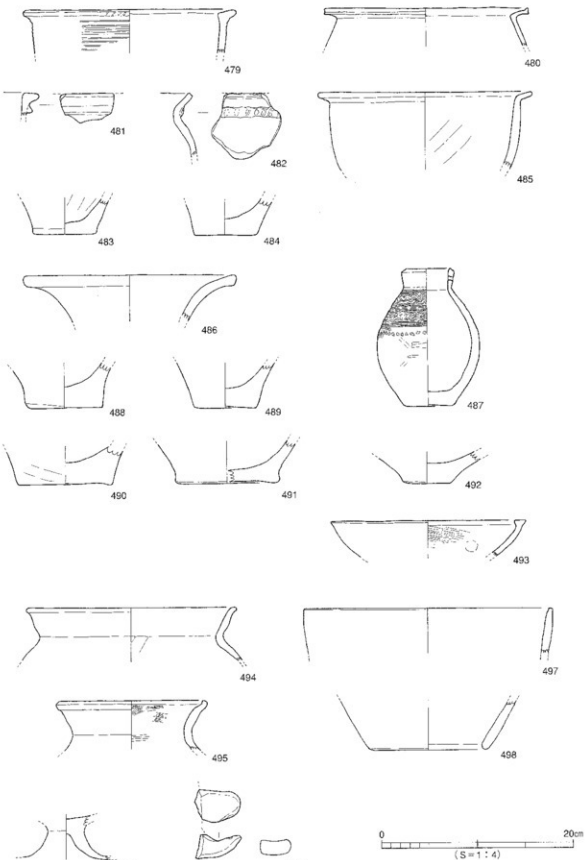


図77　ＳＤ105出土遺物（１）

壺（508）　復元口径13.0cmを測る口頸部。端部を玉縁状に肥厚して丸く収めている。

高坏（509～511）　509・510は、短脚有蓋高坏の脚部片で、510の裾端部外面には1条の沈線が巡る。510の透孔は3方向に施されている。509の片の両端縁にも透孔の痕跡があるが、その方向は確定できない。ＴＫ47型式併行のもの。511は、復元口径16.2cmを測る脚台付きの鉢状を呈するもので、口端部を水平よりやや下方に折り曲げている。イレギュラーな形態で、年代不詳のものである。

甕（512～514）　口頸部片3点、513・514は口端部に接して外面に突帯を貼り付け、丸み帯びた肥厚帯を持っている。

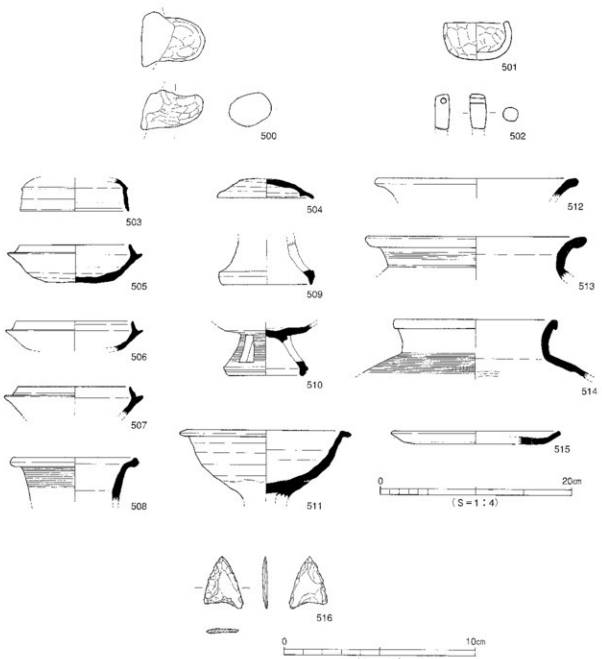


図78　ＳＤ105出土遺物（2）

皿（515）　灰白色に焼成され非常に浅い皿で、口端部に平坦な面を持っている。

石器

石鏃（516）　赤色チャートを素材とした凹基無茎鏃、重量1.13ｇを量る。

（２）表採遺物（図79・80）

弥生土器

ミニチュア土器（517）　ミニチュアの無頸壺である。突出した底部は欠けているので、平底になるのかどうかは不明、口縁部の対向する２ヶ所に焼成前の穿孔がある。

壺（518）　僅かな窪み底の底部。

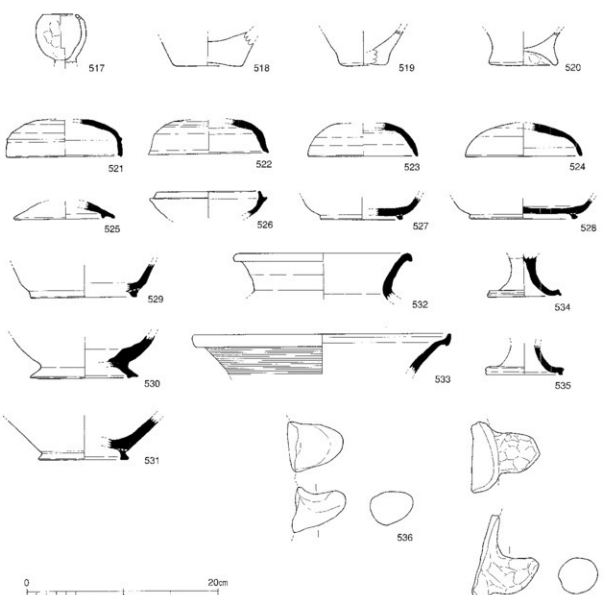


図79　表採遺物（１）

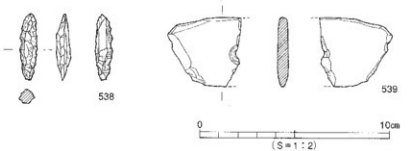


図80　表採遺物（2）

甕（519・520）　519は、やや突出した平底、520は窪みの上げ底となる底部である。

須恵器

坏（521～529）　521～524は、古墳時代タイプの蓋である。521は、復元口径11.8cmで、口縁部・天井部境に低く突出した弱い稜を持つ。口縁部比較的短く、端部には中窪みの面を持っている。MT15型式併行のもの。522は、やや外反気味の口縁部形態をなし、端部内面に段を持っており口縁部・天井部境に鈍く屈曲した稜がある。TK10型式併行のもの。523・524は、椀を伏せた形態の蓋片で、TK43～209型式併行のものである。525は、短いかえりを持つ蓋片、TK46併行。526は、短い立ち上がりを持つ身で、立ち上がりの復元径10.8cmを測るものである。TK217型式併行。527～529は、8世紀以降の貼り付け高台を持つものである。

壺（530・531）　貼り付け高台を持つ壺底部2点。

甕（532・533）　口頸部片2点のうち、532は端部を僅かに下方に引き出し、533は上下方に拡張するものである。

高坏（534・535）　TK46型式併行と思われる小型、低脚の脚部。

土師器

甑（536・537）　把手部分の片である。

石器

石錐（538）　サヌカイトを素材とする打製の石錐、全長3.5cmを測る。

石庖丁（539）　緑泥片岩を素材とする磨製石庖丁、穿孔が1ヶ所だけ確認できる。外湾刃半月形をなすものと思われる。

（3）出土地点不明の遺物（図81）

弥生土器

甕（540～542）　540は、口径21.4cmを測る甕で、底部を欠く。口端部をやや下った外面に、断面三角形、無刻み目の突帯が貼り付けられている。突帯直下には3条の沈線、その下位に刺突列点文が施されている。541はくびれた平底の底部、542の平底の底部では、焼成後の外底面からの穿孔が2ヶ所において試みられ、中央部のもののみが貫通し、一方のものは穿孔途中で放棄されている。

須恵器

甕（543・544）　543は、復元口径22.4cmを測る口頸部で、口端部内面を断面三角形状に突出させ

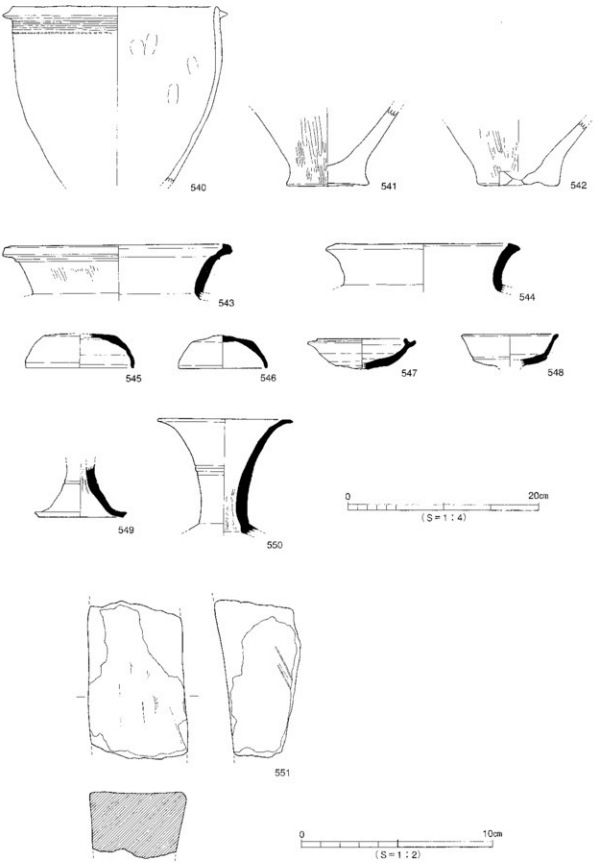


図81　出土地点不明遺物

ている。口端をやや下った位置に、これも断面三角形の細い突帯を1条巡らせている。頸部外面は無文であるが、撫で消した縦方向の細かい半行叩きの痕跡が暗文状に残っている。TK47型式併行くらいのものであろう。544は、9世紀代と思われる口頸部片で、口端部はやや外に傾いた平坦面をなし、内面に僅かに突出している。内外面、特に外面に多く釉がかかっている。

坏（545～547）　545・546は蓋で、灰白色の甘い焼成のもの。546の天井部は、ヘラ切り未調整である。547の身は非常に短い立ち上がりを持つもので、これら3点ともにTK217型式併行のものである。

高坏（548・549）　両者ともにTK217型式併行のもので、548の坏部は、口縁部と坏底部との境に1条の沈線を持つ。脚部片549の中位にも1条の沈線がある。

長頸壺（550）　比較的大きく開く長頸壺の口頸部である。撫で肩ではなく、大きく開く肩部になりそうである。頸部中位には2条の沈線を持つ。TK46型式併行あるいはこれに後続する段階のものであろう。

石製品

砥石（551）　陶石を素材とした砥石片で、使用面は3面まで確認できる。被熱の痕跡がある。

第3章　まとめ

調査では、主に弥生時代の遺構と古墳時代、古代の遺構が検出されている。調査地は、北から南へ広がる来住舌状台地の南端に位置しており、調査地近辺にその落ち際が存在するような部分にあたる。各時代の住居や建物、あるいは土坑・溝といった遺構は、A区北半の台地端部上で検出されている。その他のA区南半や、A区東側のB区は台地の落ち際に近い部分で、検出された東西方向の数条の溝ＳＤ１～３・６・８や、B区ＳＤ101～104、ＳＲ１などは、氾濫によって遺構を削りながら形成された小規模な流路の一部と考えられる。

検出された弥生時代の遺構には、竪穴建物、土坑、溝があるが、竪穴建物を除いて、そのほとんどが前期末～中期初頭、あるいは中期前半のものであった。調査地近隣には、来住・遺跡や来住廃寺20次調査によって確認されたような環濠集落をはじめとして、環濠内外に該期の集落関連遺構が色濃く分布していることがわかっている。この傾向は、来住台地上でも同様で、北東約1.2kmの台地上にもいまひとつの環濠集落が存在することが久米高畑遺跡24・25次調査をはじめとする調査で把握されている。このように、来住台地周辺の弥生時代としては前期末～中期初頭段階で遺跡分布のピークを迎えるという状況である。ただ、環濠集落内部も含めて、検出されるのは、現在のところ貯蔵施設あるいは簡易な作業小屋的施設と推定される長方形土坑や溝のみで、居住施設とみられる遺構の検出がほとんどないことが課題とされているところである。本調査でも、この例に漏れず土坑と溝のみの検出であった。唯一、弥生時代の竪穴建物として認定したＳＢ７は、ほとんど削平されていることもあって確実にこれに伴う遺物の出土がない。上柱穴配置も不詳であるが、柱穴候補として挙げた１基からの土器は、中期中頃～後半と考えられる甕口頸部であった。一方、前期末～中期初頭段階の土坑や溝からの遺物は豊富で、特に当平野における検出としては初例といってよい舟形土坑ＳＤ７やＳＫ11からも多くの遺物が出土した。このような遺構は、さほど多くはないが、西日本では弥生時代前期～中期前葉に類例がみられ、墓制のひとつという見解もあるようではあるが、その機能や性格について定まった見解はいまだみられていない。遺物の出土状況をみるかぎり、本調査の例では墓といえるような状況ではない。初例というのも、もちろん認定の問題もあるであろうし、既往の調査からの掘り起こしも含め、今後当平野においてもこの種の遺構に注意を払っておき、その機能や性格を明らかにしていく必要があろう。また現在、土佐型あるいは西南四国型甕・壺という認識が普遍化し、その動態に関する研究も盛んになりつつあるが、そのきっかけとなったのが、この遺跡の調査であったことも付け加えておく。

古墳時代以降の遺構には、竪穴建物と掘立柱建物がある。これらは７世紀代と考えられるもので、そのうち小型隅丸方形のＳＢ４や８には屋内に上柱穴がみられないところから、簡易な小屋のようなものであったものと思われる。ＳＢ４に切られるＳＢ５は７世紀前半代としているが、周壁溝や２本の屋内柱穴と認定した柱穴があるものの、ほとんど削平されており、年代も含めて不明確な部分が多い。掘立柱建物と認定した９棟は、７世紀代以降のもので、方形柱穴や布掘りによって構成されるＳＢ２を除くと、他は円形柱穴によるもの、東西棟、南北棟のいずれも２×３間のものが多い。２×２間になるものは、東西棟のＳＢ６が１棟のみ、また、２×１間の東西棟で、東西の桁行１間が非常に

長いＳＢ９といったものもあり、これについては桁行に転ばし根太を採用した掘立柱建物である可能性を指摘した。その他、３×３間で、比較的小さな柱穴で構成される掘立柱建物ＳＢ10が１棟みられた。

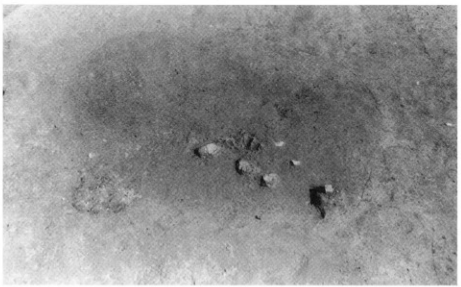
ここで、建物の方位をみると、ほぼ磁北と同じ方位をとるＳＢ13（Ａ群）、磁北から東へ５～７°振るＳＢ９・10・13（Ｂ群）、東へ12°程度と、これらよりやや東へ偏したＳＢ１・11・12（Ｃ群）、東へ20°前後と大きく東へ振るＳＢ２・６（Ｄ群）がある。当地の座標北が磁北から７°弱東偏していることを考えると、Ｂ群は座標北を意識した建物群、これに対して、Ａ群、といってもＳＢ13の１棟のみであるが、これは磁北を意識した建物ということができよう。Ｃ群は座標北から東へ５°程度振る建物群。Ｄ群は東へ大きく振ることから、これらの方位による規制を受けないものとして扱える建物群である。ところで、調査地西方1.2kmの来住台地上に展開する官衙遺跡群を構成する建物は、７世紀中葉以降、８世紀代まで座標から東へ４～５°程度振った方位をとり、不規則な方位をとるこれ以前の建物と区別の区別は容易であるが、これはこの台地上に存在する方１町の区画割の中で計画的に配置された結果とわかっている。本調査でいえばＣ群の建物がこれに近い方位をとっているが、官衙遺跡群のような方格地割そのものが存在しない調査地周辺においては、方位は建物の年代を示す指標とは必ずしもなり得ないであろう。ただ、近接した場所に同じ方位で設けられた建物には、同時性ないしはきわめて近い時期を想定してもよいものと考える。こういったことを念頭に置きながらみていくと、Ｄ群のＳＢ６はＣ群のＳＢ11の柱穴を切っており、このことからＳＢ11はＳＢ６に先行する建物である。また、ＳＢ６が溝ＳＤ１を切り、ＳＢ11や同じＣ群で同規模のＳＢ12がＳＤ１に切られていることから、ＳＢ６と11・12にはＳＤ１の時期を境に時間差がある。ＳＤ１からの出土遺物で最も新しいものがＴＫ46併行の須恵器であることから、この時期を挟んだ前後にこれらの建物の時期がある。したがって、Ｃ群ＳＢ１・11・12を７世紀前半～中葉とし、Ｄ群ＳＢ２・６を７世紀後半以降とするが、ＳＢ２の柱穴が布掘りを含めた方形であることからすると、調査された掘立柱建物群のうちでも新しい特徴としてとらえ、７世紀後半以降でも８世紀代の建物である可能性を考えておいたほうがよい。Ｂ群としたもののうち、ＳＢ３とＳＢ９には切り合いがあるが、その新古は不明である。ＳＢ３のような円形柱穴の２×３間の建物は古墳時代後期頃に一般的にみられる掘立の特徴とみてよい。切り合ってはいるものの、同じような位置に同じ方向で建てられたＳＢ９も近い時期のもので、どちらかが同じような機能を持って建て替えられたものと考えられる。方位は若干異なるが、Ａ群のＳＢ13もその柱穴配置などの特徴から、Ｂ群のＳＢ３・９と同じような時期のものと考えたい。ただ、同じような方位をとっていてＢ群として扱っていても、ＳＢ10については、隣接するＳＢ２よりも新しいこと、ＳＢ２が少なくとも７世紀後半以降、８世紀にまで降る可能性が高い建物であることを考えると、これについては、たまたま方向が一致するだけで、全くの別ものと考えなければならない。ただ、本文中でも述べたように、柱穴埋土に中世まで降るような色調が認められなかったことから、古代の範疇におさめておく。

ところで、調査地南方直近で1977（昭和52）年、国道11号建設に先立って行われた「久米窪田Ⅱ遺跡」では、弥生時代に関する目立った成果は報告されていないが、古墳時代～古代の掘立柱建物数棟の調査が行われ、本調査同様、２×３間を主とした円形柱穴による建物、方形柱穴で構成される建物が検出されている。後者はみな南北棟、方位を磁北にとるもので、一方、前者の建物群は東西棟が多く方位にばらつきがあることから、後者を７～８世紀頃に計画的に配置された建物群、前者はこれに遡るものとしている。出土遺物に木簡や削りかけ、斎串、墨書土器、円面硯などがあることから、一

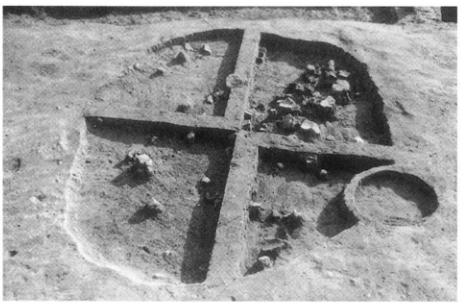
時は久米郡衙の有力候補とみられていたが、近年の久米官衙遺跡群の調査の目ざましい進展によって、評段階のみではなく郡段階でも役所の中心施設は官衙遺跡群の中にあることが判明し、久米窪田Ⅱ遺跡で検出された遺構群は、官衙周辺の施設群の一部ではないかといった見方に修正されつつある。本調査における掘立群にしても、おおよそ2×3間を主体とした、2～3期にわたる小規模建物群といったもので、やはりこの考え方の一角をなす調査結果として現在に至っている。

写　真　図　版

調査前全景
（西より）



ＳＫ１検出状況
（西より）



ＳＫ１遺物検出状況
（北より）

ＳＫ２遺物出土状況（東より）

ＳＫ６遺物出土状況（東より）

ＳＫ４遺物出土状況（南東より）

ＳＫ７遺物出土状況（北より）

ＳＫ９遺物出土状況（南より）

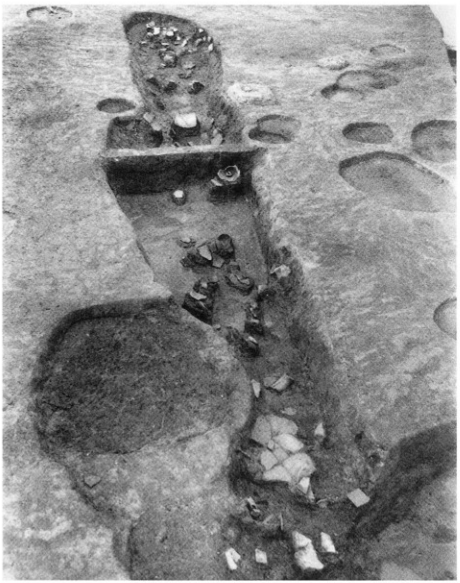
ＳＫ11遺物出土状況
（東より）

ＳＢ4床面、ＳＫ2・14
調査状況　（北より）

SK 14遺物出土状況
（南より）

SK 13遺物出土状況
（西より）

SK 13遺物出土状況近景
（南より）

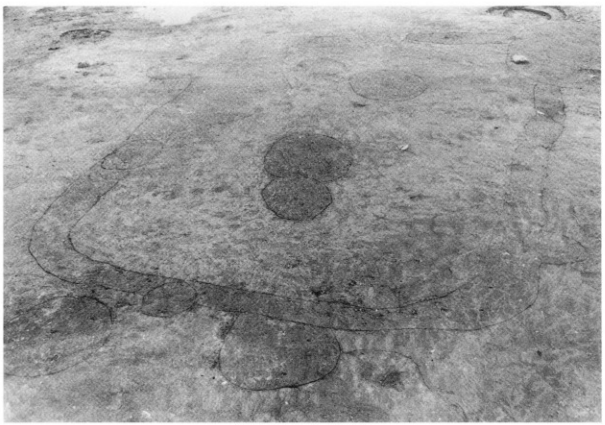


ＳＤ７遺物出土状況
（東より）

ＳＤ７遺物出土状況近景
（北西より）

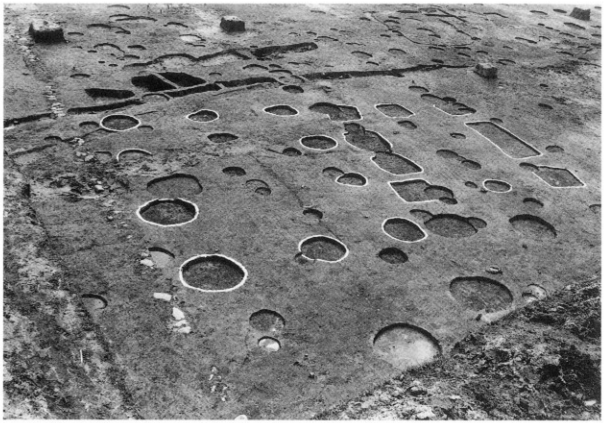
ＳＢ４検出状況（西より）

ＳＢ４調査状況（南東より）

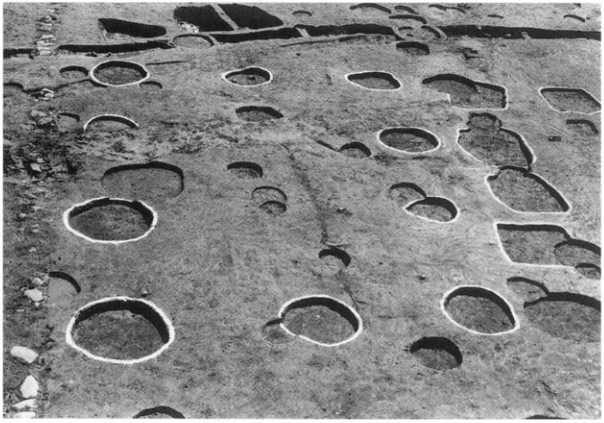


ＳＢ５検出状況（北より）

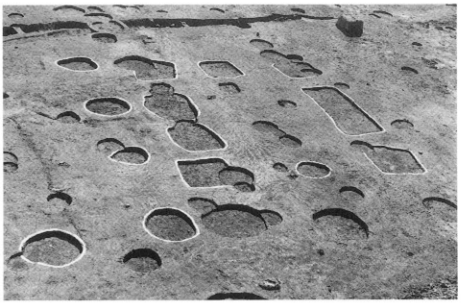
ＳＢ５完掘状況（南より）



SB1・2（北東より）

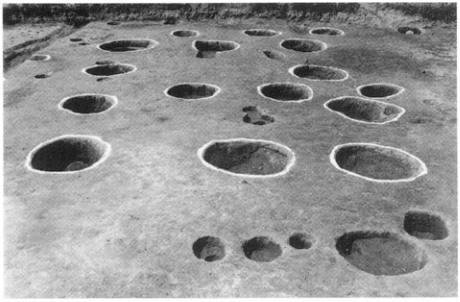


SB1（北より）

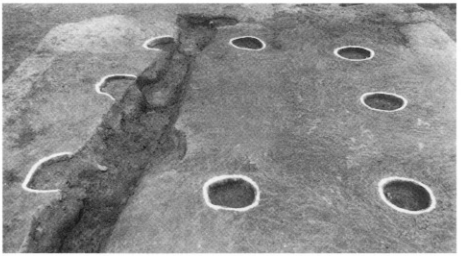


SB2
（北東より）

SB3
（西より）

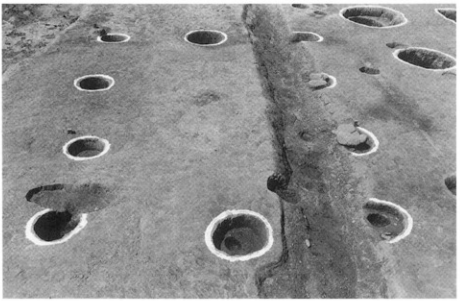


SB3・9
（東より）

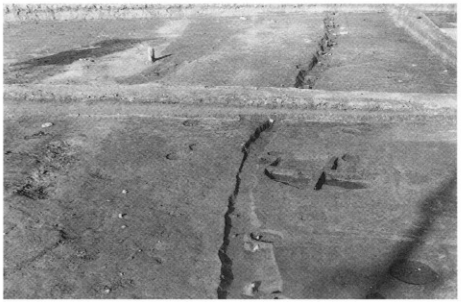


SB 6 完掘状況
（西より）

SB 11 完掘状況
（東より）



SB 12 完掘状況
（東より）



SD１調査状況
（東より）

SD２遺物出土状況
（東より）

ＳＤ３遺物出土状況
（東より）

ＳＤ３内土師器坏集積状況
（北より）

SD4・5調査状況
（東より）

SD6調査状況
（東より）

A区中央部周辺の状況（東より）

A区全景（1）（北東より）

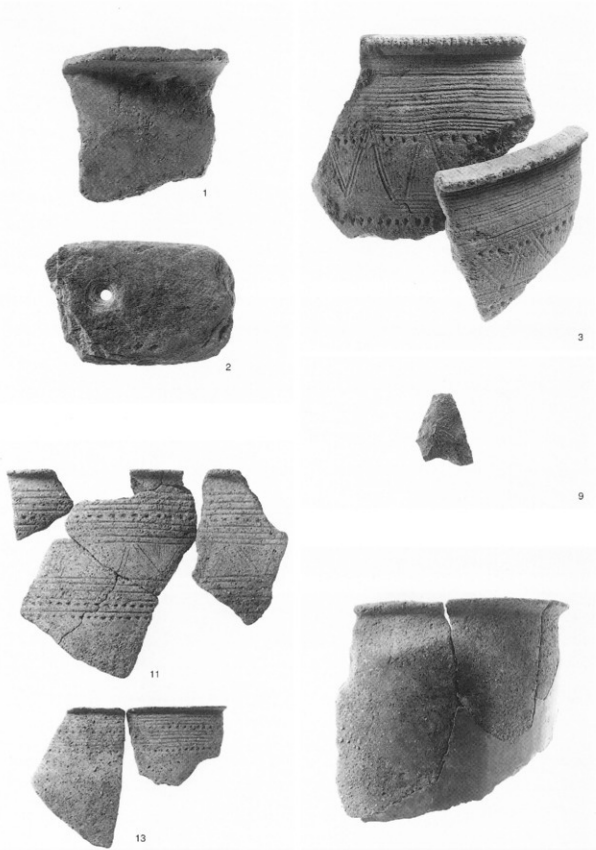
A区全景（2）（南東より）

A・B区全景（南東より）

SD 101～104
（東より）

SD 104
（南より）

SD 105
（北より）



ＳＢ８・ＳＫ１出土遺物、ＳＫ４出土遺物（１）

15

16

18

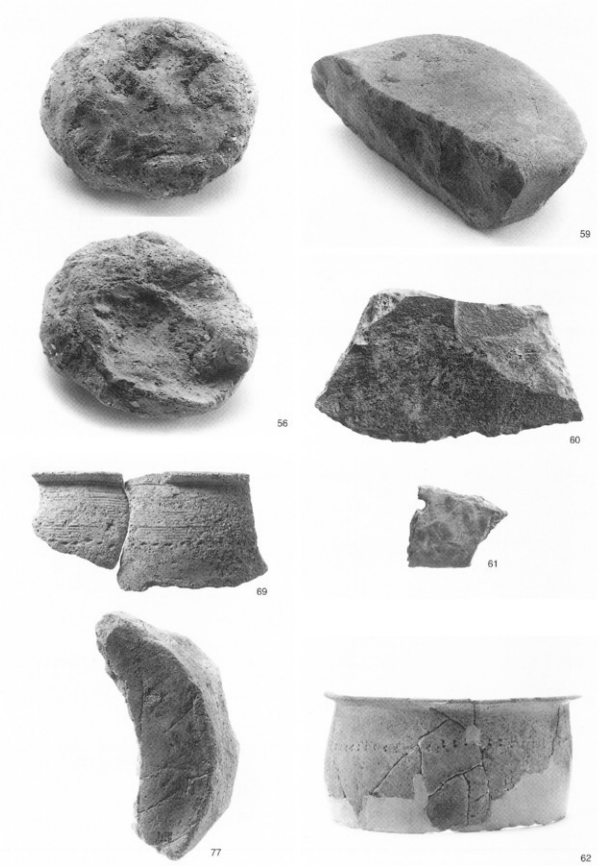
20

24

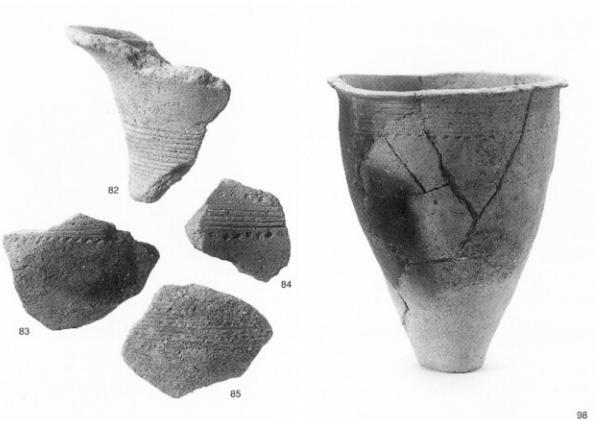
27

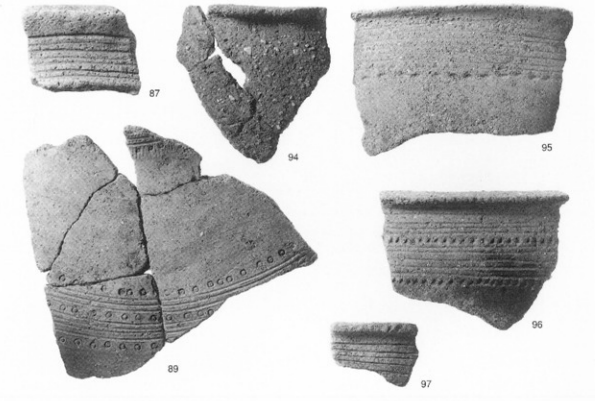
ＳＫ４出土遺物（２）、ＳＫ５出土遺物

ＳＫ６出土遺物（１）



ＳＫ６出土遺物（２）、ＳＫ７・９出土遺物





SK 10・11 出土遺物

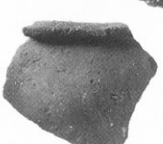
ＳＫ13出土遺物（1）

111

112

124

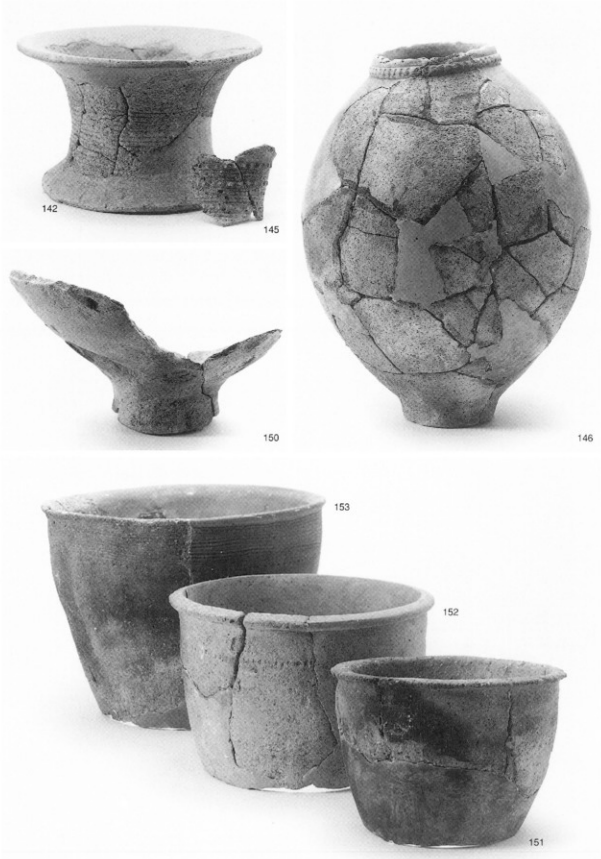
125



127

126

S K 13 出土遺物（2）、S K 14 出土遺物



ＳＤ７出土遺物（１）

154

155

156

157

158

166

171

ＳＤ７出土遺物（２）

174

192

176

194

199

201

204

205

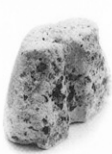
SB4・SD1出土遺物

212

215

219

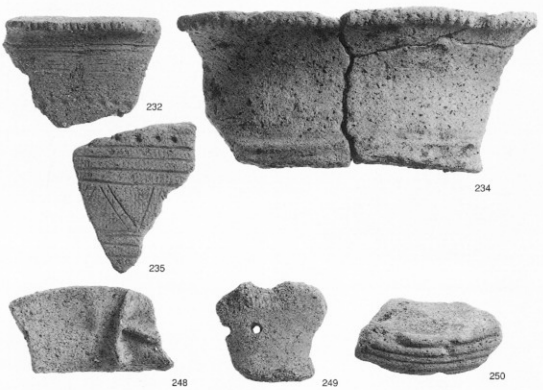
228



229

231

ＳＤ２出土遺物、ＳＤ３出土遺物（１）



ＳＤ３出土遺物（２）

279

299

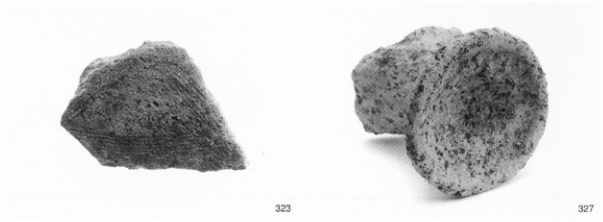
285

305

312

311

SD3出土遺物（3）



ＳＤ３出土遺物（４）、ＳＤ４出土遺物、ＳＤ６出土遺物（１）

340

334

335

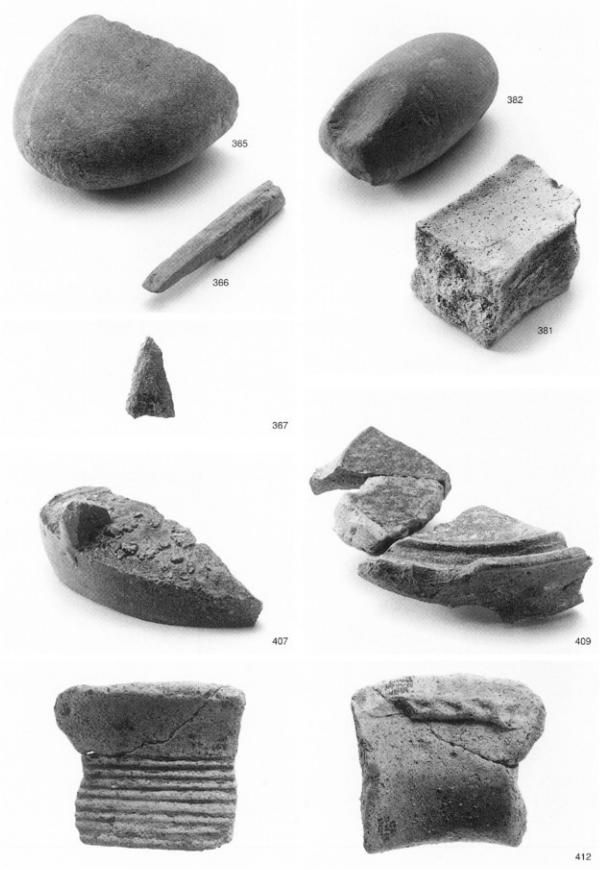
343

346

347

351

ＳＤ６出土遺物（２）、柱穴出土遺物（１）



柱穴出土遺物（2）、包含層出土遺物（1）

420

436

441

442

458

449

459

460

461

462

463

包含層出土遺物（2）、A区覚擾出土・表採遺物

465

468

470

469

471

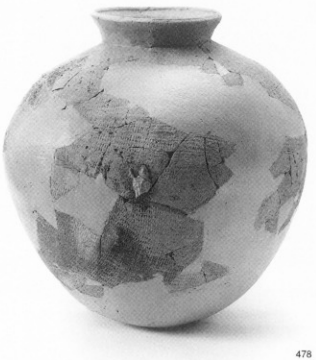
474

475

476

S D 101 ・ 103 出土遺物、S D 104 出土遺物（1）

477

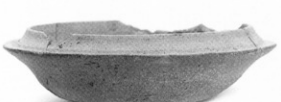

478

487

501

502

504


505

S D 104 出土遺物（2）、S D 105 出土遺物（1）

510

517

511

538

539

516

540

541

543

S D 105 出土遺物（2）、B区表採遺物

報告書抄録

ふりがな	くめくぼたふるやしきいせき
書名	久米窪田古屋敷遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第148集
編著者名	栗田茂敏
編集機関	財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地6　TEL089－923－6363
発行年月日	西暦　2011年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
久米窪田 古屋敷遺跡	愛媛県松山市 久米窪田町	38201		33°48′32″	132°48′50″	19870116 ～ 19870408	約2,000	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久米窪田 古屋敷遺跡	集落	弥生	竪穴建物、土坑	弥生土器、石器	舟形土坑2基、 西南四国形甕・壺
		古墳	竪穴建物、 掘立柱建物	須恵器、土師器、 埴輪	
		古代	掘立柱建物、 溝・流路	土師器	

要約

松山市東部で1980年代に行われた店舗用地造成に伴う調査。弥生時代前期末～中期前半を中心とする竪穴建物や舟形土坑2基を含む土坑群等の生活址、および古墳時代～古代の掘立柱建物群が検出された。これらのうち古代の建物群は、久米官衙遺跡中枢からはずれた周辺施設の建物群と考えられる。

松山市文化財調査報告書 第145集

久米窪田古屋敷遺跡

平成23年3月31日　発行

編集　財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL(089)923-6363

発行　松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL(089)948-6605

印刷　株式会社明朗社
〒791-2112　伊予郡砥部町重光150番地1
TEL(089)958-6868